関東氷上郷友会

山ぎぶ

第17号　昭和61年5月

渡辺紙工業株式会社

取締役社長　渡辺金三

本　　社	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町５丁目22番12号 Tel　849—6611(代)
〃　関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町2192番 Tel　0471—96—1721(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋１丁目20番４号〈久月ビル８F〉 Tel　861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町３丁目13番地 Tel　521—8111(代)
大阪支店　工場	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
九州支店　工場	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884番１号 Tel　09297—6—2211(代)

渡辺製袋株式会社

取締役社長　渡辺金三

本　　社	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋１丁目20番４号〈久月ビル８F〉 Tel　861—2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西３丁目２番24号 Tel　939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町4938番地 Tel　028262—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438—１番地 Tel　0794—95—0257(代)

山ざる　第17号　目次

表紙画――常岡幹彦画『漂霧』……昭和60年作
ごあいさつ……伴仲信次…2
昭和六十年度総会・祝寿会……3
丹波の巨星・有田喜一氏逝く……10
故有田喜一先生の想い出……畑　光…12
去住自由……吉住自由造…15
座談会「丹波を語る」……17
特集・わが青春のふるさと……23
わが青春の歌……波多洋三…23
年月を経るにつれて……生田正輝…24
一炊の夢……須原　清…26
修羅場の青春……藤田正雄…27
青春虚実……田中篤郎…29
修行の日々……植村章子…31
山ほとゝぎす……菱田ふみ子…32
つかのまの春……木呂子恵美子…33
小島鋭男先生のこと……大野善三…35
子供のころ・(1)……足立源治…39
氷上のルーツ……編集部…41
大西瀧治郎さんの思い出……谷垣正雄…43
のらくろ会……西山敬次郎…44
人民中国に載った二玄社……足立和巳…46
放屁論……梶原　清…48
私の健康法……伴仲信次…51
布施のこころ……堀井隆川…52
細見綾子さんの句碑建つ……55
常岡幹彦氏個展……56
可部美智子さんの陶彫展……56
柏陵同窓会東京支部長に上山氏選任……57
卒業三十年同窓会に出席……足立敬子…58
イッキに消えた三十年……村上善英…59
会則……62
会計報告書……63
同好会報告……64
寄付金・訃報……65
'85丹波の動き……66
お便り・短信……77
関東氷上郷友会会員名簿……巻末

関東氷上郷友会の九十周年を迎えて

関東氷上郷友会会長　伴　仲　信　次

会員の皆様にはますますお元気でご活躍のこと、先ずもってお喜び申しあげます。

今年は当会設立九十周年という意義深い年にあたります。本誌第16号にも詳報いたしましたとおり、一昨年秋の盛大な八十八周年記念大会を契機として、会員間の親睦・交流もいちだんと深まり、かつ広く波及して、当会もいよいよ充実の一途をたどっておりますこと、まことにご同慶にたえない次第でございます。

またさらに今年度からは、当誌巻末の会員名簿に収録しましたとおり、六百数十名にものぼる新会員が加わることとなりました。従来記載もれになっておりました方々も数十名ございましたが、そのほかの六百余名は、いずれも過去十年間に高校を卒業して関東方面に出郷された前途有為の青年であります。大学に在学中の方もありましょうが、関東方面に嫁がれた女性や、すでに就職して希望に燃える新進気鋭の郷友たちでございます。そういった若い多くの方々を、今年この会にお迎えするのは何と喜ばしいことでございましょう。

関東氷上郷友会が、九十年前、当時東京帝大の学生であった安藤広太郎・田昌氏ら数名の学生によって創立され、その後は単なる親睦会にとどまらず、後学の育英事業にも志があったということでございますが、そういった郷友会創立の精神を思うにつけましても、今日、千五百名を擁する郷友会を通じて私どもが果たさねばならない多くの責任を痛感いたします。

幸いにも郷土愛に燃える熱心な幹事さんたちのご尽力と、会員の皆様の温かいご協力とに支えられて、会誌の「山ざる」も年を追って充実し、このように立派な第17号を出版できるまでになりました。この会誌を通じて、今後も郷友の親睦・互助・交流の輪がますます広まることを念願する次第でございます。

今年二月、当会名誉会長・有田喜一氏が逝去されましたが、郷友会はもとより、わが国にとりまして大きな損失でありました。昨秋の総会にもお元気なお顔をお見せいただきましたし、当会の会合には、どんな多忙な時にも必ずご出席いただき、よく後輩を激ましてくださいました。氏は常に私たちの誇りとすべき郷土の大先達であり、関東氷上郷友会の草分け的な存在で、かつ久しく大きな柱でございました。氏の熱い郷土愛は当会にとって永遠に消えることのないものでございましょう。

皆様とともに心からご冥福をお祈りしたいと思います。

昭和六十年度総会・祝寿会

十一月二日、市ヶ谷の私学会館において本年度総会、祝寿会および懇親会が開催された。宮野理事の司会・進行は丹波弁丸出しで、まことに懐しく楽しいものであった。

伴仲信次会長の挨拶のあと議事に入り、足立正理事より会務報告、足立和巳理事の会計報告、吉住監事より会計監査報告があり、いずれも異議なく承認され、役員改選に移った。

今回は従来、会則では掲げながら役割りのなかった常任理事を久々に選出したこと、会のさらなる発展を願ってできるだけ若い理事、役員の選出を図った。

今総会において改選された新役員は左記の五十五名である。

〈名誉会長〉有田喜一

〈顧　問〉足立三治　上山顕　植村章子　小谷正雄　小林武治　西川政一　村上大憲　渡辺金三　佐々木盛雄　須原清　波多洋三

〈会　長〉伴仲信次

〈副会長〉村上末吉　○渡辺隆男

〈監　事〉吉住重造　荻野武

〈常任理事〉足立かをる　◉足立和巳　足立謙悟　足立正　○小田富士夫　○坂上勝朗　○田中篤郎　○常岡幹彦　西崎祥　○宮野近　○足立源治　○鶴田ゆき子　◉山中岩雄

〈理　事〉足立誠一　秋元多美子　芦田重秋　小川晴通　木村ったえ　小谷正己　田中寛　高見嘉都司　谷垣正雄　田英夫　藤田正雄　前田和市　山内隆行　山本清士　若森敏郎　○大野善三　岡吉明　岡田一男　粕谷進　○小杉仙生　小山年博　千種倫幸　堀井隆川　村上昇　安原三智子

○印＝山ざる編集委員　◉印＝会計

次いで八十歳の長寿会員をお祝いする吉例の祝寿会が、多くの会員の祝福のうちに開かれた。本年、祝寿を受けられる方は五名であったが、当日出席されたのは竹村政雄氏一人であった。伴仲会長が可部美智子さんの作った陶彫「万寿姫」の記念品を贈呈し、花束を贈って長寿を祝福した。竹村氏からは、お年を感じさせないはつらつとしたユーモアあふれる謝辞があり祝典を終えた。なお、この祝寿会に出席できなかった片瀬義勝、小西保、荘正衛の各氏から礼状（別記）が寄せられている。

懇親会では、今は亡き有田名誉会長の「政界に三世記会という会があるが、私は二十世紀に入ったばかりの時に生まれたので、どんなに頑張っても二世紀にしかならない」との話の中に、

祝寿会で謝辞を述べる竹村さん

ますます意気盛んなところがうかがえる挨拶があった。続いて、司会の宮野理事から来賓の紹介があり、谷口務柏原町長、上嶋昇二氷上町助役、松尾源三元氷上西高校長らが挨拶、われらが郷土丹波の現状報告には、会員みな感懐ひとしおの面持ちで聞き入った。

乾杯が終わると、会場はにわかににぎやかになった。会員の岡田一男氏提供のザ・トップ・クラブ・ミュージックサロンのお嬢様ザ・ベスト・フォーのコーラスが流れる中、年に一度集った郷友は懐しい思いを込めて、互いの無事を喜び会い、果てることを知らぬ話の花を咲かせる。

会場の私学会館は、当会顧問小林武治氏が理事長をされているため、懇親会には大層サービスをして頂いた。宴の終わりにお楽しみプレゼントの抽選が宮野理事の進行で行われ、懇親の場をさらに盛り上げた。ことに超豪華賞品の松茸の当選発表には、会場に一瞬、緊張感が流れ、番号が読み上げられると当選者の周りの輪が「ワッ」とどよめいた。今年は参加者全員におみやげがあるようにとの図らいで、帰りには抽選にもれた会員に丹波黒豆一袋が配られた。誰もがふる里の物産を手に、心には今日温めた懐しくも楽しい思いを抱いて散会した。

総会・出席者氏名（七十一名、敬称略、五十音順）

来賓　谷口務（柏原市長）

上嶋昇二（氷上町助役）

松尾源三（元氷上西高校長）
満浦謙之（兵庫県東京事務所）

祝寿者　竹村政雄

会員　安達健一郎　足立明子　足立かおる　足立和巳　足立謙悟　足立三治　足立静雄　足立順治　足立正　秋元多美子　天野清子　有田喜一　飯田光雄　池田忍　鵜沢洋子　上野重喜　梅津浩平　大槻作治郎　岡吉明　萩野一雄　可部美智子　河本幸子　木村つた江　木呂子恵美子　小谷正巳　小中克巳　小林武治　小山千理　近藤勇　佐々木盛雄　坂上勝朗　渋江寿美恵　勢正彦　田中篤郎　田中寛　田辺泰久　田村元子　高尾久子　高見秀史　谷達夫　谷垣正雄　谷口捷　常岡幹彦　鶴田ゆき子　出町京子　中江悦子　西山敬次郎㈹深川英之　畑秀夫　伴仲信次　広内光正　藤田正雄　藤本和幸　前田和市　宮野近　村上末吉　村上善英　森田宏　安原三智子　山内隆行　余田貞雄　横田公子　吉住重造　渡辺隆男　渡辺貴美子　渡辺也寸美　浅野重幸（神戸新聞社）

〈祝寿者からの礼状〉

片瀬勝義氏

本日、氷上郷友会より祝寿のお品態々御恵送賜り有難く正に拝受いたしました。久美窯可部美智子作、陶彫「万寿姫」郷土の皆様の厚き御配情の程只々有難く家内一同深く感銘に存じおります。万寿姫と共に末長く一日一日を大切に心して一期一会の思いで精進いたし度き所存、重ねて御礼申し述べます。

小西　保氏

過日の総会の際にはご鄭重なご案内を頂きましたにも拘わりませず健康不如意のため失礼申し上げ誠に申訳なくまた残念でもございました。然るところ先日は八十才祝寿記念とて、郷土出身の陶芸家、可部美智子氏の心温まる陶彫「万寿姫」をお贈り頂き、ご高配の程誠に有難く衷心より厚く御礼申し上げます。大変なごやかな印象を受ける佳品でございますので早速書斎に飾らせて頂きました。

荘　正衛氏

本日は傘寿のお祝として誠に貴重なる陶彫「万寿姫」をご恵贈恭ふし身に余る喜びでございます。心より厚く御礼申し上げます。実は私もいつのまにか何をすることもなく齢を重ねたにすぎず、お祝を戴くのも恥かしいのですが、ご厚情に甘えて拝受させて戴きます。会員の皆々様へ衷心御礼申し上げる次第でございます。

竹村政雄氏

去る二日、私学会館に於ける郷友会主催になる祝寿会にお招きを頂き、心温まる一時を過させて頂き誠に有難く厚く御礼申し上げます。私ども永く都会生活をして居りますと、父母の地丹波は大切な思出多い所でございます。人生八十年最早終着に

懇親会　元気な有田さんの顔も見える

盛りだくさんのごちそうに頬もゆるむ

コーラスの流れる会場　花よりダンゴか

近づき幼時の友達も過半は他界し淋しさ一入の感じでございます。残された人生、神より与えられた一度よりない人生、皆々様の愛情に守られ乍ら大切に過したいと存じおります。終りに郷友の皆様の御発展と御健康を切に御祈り申し上げ御礼の言葉と致します。

張九令の詩

宿昔青雲志　蹉跎白髪年
誰知明鏡裏　形影自相憐

私の現在をいい表したような詩です。

〈荘正衛氏から可部美智子さん宛の礼状〉

拝啓

この度関東氷上郷友会から傘寿のお祝として貴創作の陶刻「万寿姫」の貴重なる作品（写真）をお送り下され恂に有難く厚く御礼申し上げます。

早速机上に置いて拝見しておりますが、とてもすばらしい出来栄えにて、色調もしぶく、やわらかく、感触も暖かく、少女の首傾けるポーズも愛らしく、その姿えも云われぬ素朴さを表現しあり、見つめれば見つめる程なにか語りかけて来るようにも思われ、一つの人形がこれほどまでに魂を打つものとは思いませんでした。関東の地で生まれた一つの人形が、京都の地で

相まみえることゝなったのも、何かのえにしなのでございましょう。私もこの万寿姫にあやからせて載き、いつの日までも長寿を保ちたいと存じております。先は不取敢御礼まで　敬具

可部美智子様　　昭和六〇年十一月八日　　荘　正衛

六十一年度、祝寿者は左の七氏の予定です。明治三十九年生れの方々です。会員名簿の生れ年によるもので、生れ年を自己申告されてない方も多く、他に同年生れの方がありましたならば、事務局までお知らせ下さい。

足立玉治、有田久代、小林武治、荘克衛、谷垣正雄、伴仲信次、最上次郎（敬称略五十音順）

懇親会のプレゼントの景品

ノーブルスター賞（吉住重造氏寄贈）

トレーナー　一〇本

ジャンパー　一本

郷土物産賞、（会より出品）

きり芋　二kg　五本

きり芋　三kg　三本

きり芋　四kg　二本

丹波黒豆　一袋　参加者全員

超豪華郷土物産賞、（宮野近氏寄贈）

猪（いのしし）肉五〇〇g　四本

松茸五〇〇g　二本

今後もこの催しは総会に続く懇親会で、必ず行ないますのでご期待ください。

なお、景品のご寄贈もよろしくお願いします。

新春役員会

二月十二日、五時三十分より、飯田橋かすがホールにて、今年初の役員会を開催しました。当日は奇しくも名誉会長有田喜一先生の葬儀告別式の日と重なり、役員のほとんどが式に参列の後、会場に集まりました。開会に先だち伴仲会長のご発声で一同起立、黙祈を捧げて、有田名誉会長のご冥福をお祈りしました。

坂上常住理事が司会進行をつとめ　会長挨拶、山ざる十七号に関する報告と議事を進め、今年秋の総会は十一月八日（土）午後、九段会館にて開催することを決定しました。

続いて、参議院議員梶原清先生の挨拶があり村上副会長の乾杯の音頭で懇親会に移りました。今回は、前年度総会で選出された新任の理事が加わり役員の平均年令がかなり若くなった感

新春役員会　新築成ったかすがホールにて

じで心強い限りです。懇親宴の中でこれら新顔の理事からそれぞれ自己紹介などがあり、なごやかに、にぎやかに時の経つのを忘れるほどに盛り上った会合でした。

出席者は左記の三十五名です。伴仲信次、村上末吉、渡辺隆男、上山顕、須原清、吉住重造、足立和巳、足立謙悟、足立正、坂上勝朗、田中篤郎、常岡幹彦、西崎祥、宮野近、足立源治、鶴田ゆき子、山中岩雄、足立誠一、秋元多美子、芦田重秋、田中寛、谷垣正雄、藤田正雄、山内隆行、若森敏郎、大野善三、岡吉明、粕谷進、千種倫幸、安原三智子、村上善英、足立静雄、木呂子恵美子、梶原清、梶原康弘

可部美智子作・万寿姫

丹波の巨星 有田喜一氏逝く

追悼　有田喜一先生

有田喜一先生が亡くなられた。二月九日午後二時三分、狛江市の慈恵医大病院第三分院において、心不全による急逝であった。享年八十四歳。

先生は、明治三十四年四月三十日、兵庫県氷上郡沼貫村谷村（現在氷上町谷村）の生まれである。大正十四年、東大経済学部を卒業、逓信省に入省されて以来、大阪逓信局長、運輸省海運総局長、船舶公団総裁、を経て昭和二十三年、芦田内閣の官房次長に就任された。

昭和二十四年の衆院選に出馬して初当選を果されて以来、当選は九回を数えている。昭和五十一年病気のため政界の第一線から引退された。政界にあっては、昭和四十一年、佐藤内閣の文部大臣、昭和四十三年、第二次佐藤内閣の国務大臣防衛庁長官、昭和四十七年、第二次田中内閣の国務大臣経済企画庁長官にそれぞれ就任されている。防衛庁長官時には、第四次防衛力整備計画の編成に当たられるとともに、わが国初の防衛白書を公表して、国政史上に輝かしい足跡を残され、昭和四十八年に勲一等旭日大綬章受章の栄に浴された。

政界を引退後は、みずから「海はわが道」として天職と心得、海を相手の職場へ戻られ、日本海運振興会長として、亡くなるまで精励されるかたわら、湊川名誉学園長も勤めておられる。

先生が政界に入られるきっかけは、柏原中学校同窓の縁で、当時内閣総理大臣であった芦田均氏によって内閣官房次長に起用されたことであろう。政治家としての先生の業績については、国政上も丹波振興上も語るべき人は数多く、いまさらここで述べるまでもない。

ただ、下記の一件だけは誠に有り難いこととして、丹波人の誇りとして人の心に伝えたい。

先生は、終戦後間もなく船舶公団総裁となられ、当時叫ばれた「貿易立国」の推進者として造船業の指導に当たられ、第一

元総理・各大臣の供花のひしめく祭壇

麻布・長谷寺の境内を埋めた告別式

次計画造船を手がけられた。次いで代議士として、外航船舶建造利子補給法の立案を担当させられたのである。後になってこの法案の成立を巡って、政府与党と造船業界との間に造船疑獄事件が発覚した。現職大臣を含む政府与党の幹部が相次いで事情聴取のために検察当局に呼ばれる事態は、遂に当時の佐藤栄作幹事長の逮捕請求にまで発展した。この間、政・官界で取り調べを受けた者は百名にも及んだ。結局、「指揮権発動」によって事件は下火となっていったのであるが、このころの政界は、汚職で内閣が倒れた例もあり、打ち続く政・官界の腐敗に世人はやりきれぬ思いに包まれていた。

先生は、この法案はもとより、最初から造船業振興の立役者として業界と密接に関係してこられたが、かかる汚辱の世界にまったく無関係であった。

この有田先生の「ハンカチは白かった」ことは当然といえば当然であるが、極めて有難い当然であり、その清廉というさわやかな光りは暗い世間に救いとなってさし込んだのであった。この一事が先生の万事を雄弁に物語るものといえよう。この廉恥の士今や亡しと痛嘆せずにはいられない。既に先生は天に帰られた。丹波の空を悠々とはばたきながら、われらが美しい郷土をいつまでも見守って下さるに違いない。

春くれば　くればと思うころに訃よ

哀悼無窮　　合掌　　（源治）

故有田喜一先生の想い出

畑　光

―「八十年の歩み」出版を中心にして――

昭和五十六年五月に、「八十年の歩み」と題して、五百十頁にわたる自叙伝が発行された。この本が完成する迄には約三年を要したが、その間有田先生が逓信官僚として或は政治家として歩んで来られた色々なエピソードや想い出話があって、それを全部収録するととても一冊の本にまとまるものではなかった。

そこで、収録できない部分をどうしようかという議論をした時に、有田先生は、「できるだけ、生ぐさい話や、現在生存者が居られて差し障りのある話などは、私が死んだら追悼録等を出版して、発表してくれ」といわれた。何しろ先生の原稿は、大半が口述で、それを先生の奥様が便箋に書きとられたものが中心となり、その他に小生が一週間に一回ずつ、日本海運振興会の会長室で口述筆記を続け、その上、自分で思い出すままを原稿用紙に書いて来られるという三段構えだったので、文章の統一や内容の重複の有無などに随分苦労した。原稿の段階で、記憶違いがないか、或は時間的にその事実が前後してないかといった裏付け調査にも随分時間をかけたものだった。いずれに

出棺

しても数回にわたって全原稿の校閲を終えて、浄書をしたが、その原稿量は風呂敷包みに一杯で一度に持ちはこぶのに大変なほどだった。

次にそれを本にするため、どういう編集方針でやるか。例えば編年体というか、生い立ちから時間を追ってくるか、惑は事件別というか、ある項目をたててそれを中心に組みたてるかなど編集の手法として、あるいは読みものとして、どれがよいかという議論も何回かした。結局、日本経済新聞が連載している「私の履歴書」スタイルという事に決まった。そこで誰か専門家にまかせて料理をしてもらうことにし、その選任方を相談されたので多紀郡出身の元実業の日本社事業出版部長の森田淳二郎さんを推せんしたところ、よかろうということで森田さんに引き受けてもらうことになった。

ところが有田家の系図をみていると、不思議な縁でその系図の中に植木さんという家があってその家の娘が「実業の日本社森田氏へ嫁す」という記載がなされており、有田先生と森田氏とは「全然他人」ではないことになってしまった。一方出版についてはその資金をどうするかが大きな課題だった。森田さんが原稿の見出しや、割り付け、写真の選定にその力量を発揮されながら、一方紙質や外函や本の形態などの決定についても、その専門的な知識を駆使されて、予算をたててもらい、有田先生の自費と、財界や関係者からの寄付などを集めることにし、

有田喜一自叙伝刊行会」という組織を作り、一方平行して郷里で胸像建立の気運があったので、「有田喜一胸像建立協賛会」を組織し、海運や電力の業界から多額の寄付をいただいた。これらの事務や計画については日本海運振興会の橋本善作常務理事、その後任の岩崎政己常務理事が実に綿密に立案され実行されていった。「八十年の歩み」の刊行パーティが五十六年五月十二日、赤坂プリンスホテルで盛大に開かれたことは、記憶に新しいところである。胸像の方は、郷里氷上町役場の前庭に五十六年七月十九日に建立され、盛大な除幕式があり、地元では前記「八十年の歩み」を希望の方々に配布した。

この「八十年の歩み」の中へ小生がどうしても入れたかったが駄目になった「選挙」に関する部分がある。合計十一回選挙をして二回落選の憂き目を見るわけだが、地元で協力していただいた多くの方々の名前を記録しておくべきだと考えたからである。しかし有田先生の選択は私の発想とは違っていて、名前を挙げればきりがない、表面で頑張ってくれた人と陰で応援してくれた人があって、縁の下の力持ちになってくださった人に対して失礼になるという考え方だった。これは当然配慮しなければならない事だったので「八十年の歩み」には入れなかったが、今後追悼文集等が出される機会があれば、やはり家業を捨てて手伝って下さった多くの後援会の幹部の人々の手記をまとめておく必要があろうと考えている。それは二十五年に及ぶ政治生活の裏面史として欠かせないからである。中央での多彩な政治活動の他に、地元の振興のために働かれた多くの事蹟の記録とも表裏の関係にあるからである。

「小説吉田学校」という戸川猪佐武氏の書いた本があって、その中に有田先生がたびたび登場するが、ご本人は全然そのことを知られなかったので、小生が買い込んで差し上げたことがあるが、全く「ノーコメント」で「俺は吉田学校の生徒じゃないんだ」といわれただけだった。とはいっても読まれなかったのではない。ある時、「評論家というものは、うまいこと、もっともらしく書くもんだなあ」といわれた。この本はベストセラー入りして、最近では文庫本で売られているが、読む方からいうと面白い本である。

その他、あまり知られていない事だが、内閣官房次長（現在の官房副長官）の時に、初代国鉄総裁に下山さんを選任したが、その下山総裁が歴史的な結末になってしまった事で、非常に強烈な思い出があるようだった。下山さんが就任されるまでには色々な人に交渉して断られ、最後にやっと説得をした苦労話があって、下山さんとしては、あまり喜んで受諾された状態ではなかったことがわかっているだけに、死因で今だに争われていることを考え合せて、有田先生には何ともいえぬ感慨があったようである。

また、ポスト佐藤の自民党総裁選での角福戦争や、推名裁定

による三木総裁の誕生、三木総裁に対して挙党協を作って反三木になった裏話などは、関係者が今尚多く居られるので、と前記したように発表されなかったが、最近になって続々とその関係者も逝かれている。いずれ本格的な追悼文集が出される時に書いてみたいと思っている。

去住自由

―有田先生安らかに―

吉住自由造
（春日・中山）

人との出逢い、別れ、毎日くりかえされる世の中のできごとなど、過ぎてしまえばすべて定かではないが、なかには心に刻まれて忘れられないものもある。

有田喜一先生との出逢いがそれであった。

そのまえの記憶は寸断されているにもかかわらず、そこだけがきわめて鮮明になっている。有田先生は政界の超大物、わたしはしがないユニホーム屋、つながりようのない分野でありながら、人との邂逅には思わぬ出逢いの場があって、先生に近づけさせてくれた。

わたしがはじめて先生をお訪ねしたのは昭和五十三年十月、日本海運振興会の会長室であった。それまでは、郷友会でお目にかかっても、ごあいさつするていどのもので、親しくお話することもなかった。二男が国家公務員上級試験に合格して、どの省庁に就職しようかといっていたとき、有田先生にご指導いただいた、それが先生との出逢いであった。二、三の省庁から誘いがあったが、息子は「人事院」とはじめから決めていたようであった。わたしは文部省への思いが強く、かなりの好成績で上級試験にパスしたことで次元の低い打算が生まれていたのだった。元文部大臣だった有田先生におねがいしてみようと思いたちおたずねしたのが、先生と親しくお話しできた最初の機会であった。

先生はわがことのようによろこんでなにかとお骨折りくださり、文部省へのお膳立てをしていただいたのに、息子は先生のご厚意に反して人事院に就職を決めてしまった。わたしがそうであったように、三人の子供の進学、就職、結婚などすべて自分で決めればいいという考えで一切口を出さなかったが、この場合にかぎり中途はんぱに口出しして先生にご迷惑をおかけしてしまった。

先生にお詫びしよう。わたしは息子を連れて成城のお宅に上がった。けれども、先生はそのことには一言もふれず、まるで孫にでも接するようにやさしく、これから社会に出ていく息子のために官庁とはどんなところか、公務員はどうあるべきかなど、社会、人生、青春について、ご自分の経てきたさまざまな

できごとをおりまぜて話して下さった。

わたしは、先生の大きな心、大地のような温かさにふれて、自然に頭が下がる思いであった。

去る二月九日、先生の訃を知らされたとき、わたしのなかをよぎっていったのは、悲しいというより、地上の明るさが暗黒のなかに沈みこんでいったとき「生死不染　去住自由」という八文字であった。生死に染まず、他の世界に去るのも、この世にとどまるのも自由であるという臨済語録である。先生は亡くなられたのではない。わたしの胸のなかにはいつまでも生きている。そう思い、気をとりなおしたのであった。

息子が長期在外研究員の試験に合格し、ワシントン大学、大学院に留学した時も先生はたいへんよろこんで、お合いするたびに元気でやっているか、と必ず尋ねてくださった。有田先生の寛容さはさらに大きく、息子が帰国したら人事院総裁内海倫先生を紹介しようとも言って下さった。はからずも私は昨年十一月の兵庫県人会ではじめて内海総裁にお目にかかったのが機縁で、ご懇書と息子の留学先からの寄稿文が載っている「院内報」を送っていただいた。有田先生にご迷惑をおかけして入った人事院であったが、先生とじっこんの内海総裁のご指導を仰ぐことになろうとは、まことにふしぎな縁であった。

昨年十一月二日、氷上郷友会で元気な先生にお目にかかったのが最後であった。わずか三か月余で幽明さかいを異にしようとは…。

息子が帰国したら嫁と三人で有田先生をおうかがいしますと約束をしていたのに。

先生、どうぞ安らかにおねむりください。

昭和六十年十一月二日の総会にて

座談会「丹波を語る」

出席者

谷口　務（丹波総合開発促進協議会会長、前柏原町長）
常岡　幹彦（日本画家）
小杉　仙生（講談社文芸図書出版部）
司会　宮野　近（東京トヨペット企画室）

宮野　私たちのふるさと丹波が、今、大きく変ろうとしていると聞いています。交通が不便なため、兵庫県の他の地域に比べ、都市機能の整備などが立ち遅れていた丹波ですが、それがかえって豊かな自然や、伝統文化を残すこととともなり、京阪神の人々や、他の地域の人々の注目を集めているとも聞いています。そこで今日は丹波総合開発促進協議会会長で、柏原町長の谷口務さん、日本画家の常岡さん、講談社の小杉さんの三人で、丹波の近況と将来について懇談していただきたいと思います。

まず、谷口さんから丹波の〝今日〟と〝明日〟ということでお願いします。

丹波田園文化都市の創造

谷口　淡路島と四国を結ぶつり橋、大鳴門橋の完成を記念に六十年四月から「くにうみの祭典」が開かれ、二百二十万人近い入場者を集めて成功裏に終わりました。

そこで、ポストくにうみとして六十三年に丹波を主体とする祭りを開こうという構想です。舞台は丹波十町、それに少しコンパスを広げて三田市と、建設中の近畿自道車道舞鶴線（近舞線）の接続点の吉川（よかわ）町を合わせた一市十一町として、単なるお祭りでなく近舞線周辺の地域全体の開発を考えよう、という企画です。すでに開発協議会ができて、三田市長を会長に私たちもお手伝いをしながら、六十三年の丹波と北摂を含めた祭りをどのように展開するか検討している最中です。

三田市は北摂ニュータウンができて、六十三年には条件整備のできた状態になる。だが、丹波は交通不便ということもあって祭りにはまだ、なじまない状態です。そこでまず、丹波の抱えている実態から考えて、地域整備や開発整備に発展させる、

それを十町の町づくり構想につないでいこうとしています。

たとえば**柏原町**は「文化と健康の里づくり」をキャッチフレーズに、鯉の泳ぐ溝整備や陣屋跡の活用、CSR（カルチャーゾーン・スポーツ・レクリエーション）運動公園の建設などを進める。**氷上町**は「社寺と公園とのまちづくり」として達身寺とぼたん園、伊尼神社、岩滝寺と森林公園などを考える。**山南町**は「文学と特産の町づくり」にして古刹と歴史を訪ねる旧街道の復活を図る。**市島町**では「福祉と愛育の里づくり」で、三ッ塚公園を整備して自然博物館やちょうと植物の館などを検討する。**青垣町**は「森林と渓流の里づくり」をうたって、グリーンスポーツ施設整備や、もみじマラソンの振興に務める。**春日町**は「くつろぎと歴史の広場づくり」として、ファミリーパークの建設や美術館、歴史の民俗資料展示場をつくるなどがその構想案例です。兵庫県当局にも計画の前倒しをして積極的に取り組んでもらっているところです。

緑と水と火をテーマに

谷口　先般、構想委員会ができまして、阪大の山崎正和教授、関係地方団体、民間の人にも参加していただき、六十一年にかけて祭りをどのようなテーマにしたらいいのかを、スタートしたところです。たとえば丹波と言えば「緑」、つまり農林業です。それに「水系」。篠山川、竹田川、加古川などが地域の文化と密接な関係にあります。さらに立杭焼きに代表される「火」もそうです。こういった丹波の自然、文化、歴史を大切にしたテーマが考えられると思います。

丹波の祭りは素朴な民俗、風俗、農林を土台に、古き良き物をだいじにしつつ、それに地域開発、整備を付け加えるものにしたい。六十三年には、こうした計画が達成できた喜びが、祭りにつながるようにしたいと思っています。近舞線は六十三年には供用開始になる。福知山線の複線電化は遅れるが、三田市までが複線、城崎まで電化ができるので祭りの条件は整ってくる。六十年暮れには氷上郡民会館で、山崎先生を中心にシンポジウムを開き、若い人、婦人みんなの意見を交換しました。こうした声を組み合わせて祭りの準備は進められて行きます。

「開発」と「保存」の調和を

宮野　ありがとうございました。我々、東京にいるものは、丹波がこのような変身をしつつあるとは思いませんでした。さきほどの丹波祭りには緑、水、火のほかに、土、石、布もテーマになると思います。

常岡さん、今までのお話に関連してどうぞ。

常岡　丹波に住んでいる人びとの発展はもちろんのこと、離

れて住んでいる人たちの願いもみたしてくれるようで、大変結構なお話だと思いました。私は丹波生まれですが、父が東京にいたものですから東京育ちで、だから昭和十九年に疎開で丹波に帰った時の印象は強烈でした。真夏のことで、いきなりワラぞうりをはいて山へ行ったのですが、あの時の草のにおいは今も覚えています。おかげでたき木づくり、炭焼き、学業もしないで山や川、田んぼをめぐっていました。旧制中学二年、十五歳の時でした。今も旅をして草のにおいをかぐと心はすぐ丹波に帰ってしまいます。ふるさとを離れれば離れる程、昔のふるさとがガッチリと頭の中に残っていましてね。開発と同時に、構想委員会の中にもありましたが、森林とか川、火などが大きな要素として片方にある。土地を離れた人にはそういうものへの思いが相当に大きい。古いものの保存とか管理は、一見、便利さとか、利益とはかけ離れているようだが、結局は丹波の人の心のうるおいとなる。これからの人も、その中ではぐくまれるような環境、そういうものに魅力を感じますね。

谷口　おっしゃるとおりです。開発と保存、そのバランスと言うか、その調和をどう図っていくかが大切なところです。京阪神から五、六十キロと言う都市近郊の中で、丹波は比較的古いものが残っているところです。だから古き良きものを残しながら、これから何が必要か、と言うことに知恵をしぼっていかなければいかんと思っています。

小杉　私は青垣町生まれで、高校卒業まで十八年間丹波にいました。だから常岡さんのような、丹波に対する強烈な印象と言うより丹波は空気みたいなものでした。それでも子供を連れて帰って、ここで魚をつかんだとか、ここはウナギがよくとれた、と話せるようなところは残してほしいですね。しかしそれだけじゃダメで、谷口会長としてはむずかしい立場でしょうが…

常岡　私は絵をかくため、よく旅をするんですが、そこにワラ屋根があるとそれがおもしろい。くずれかけた土べいがあると絵になるんですね。ある郷愁かも知れないのだが、ふと思うと旅行者の目になっているのでないかと思うんです。当然のことですが住んでいる人はやはり近代的なものが必要だろう。そのへんをよほど注意しないといけない。

小杉　郷土を離れているとかなりのものが部外者の目になっている。だけど「あまりいじらないで、そのままにしておいてよ」と言う気もあるんです。そのあたり、我々くにを捨てた者と地元の人たちとのあつれきの部分があるのでしょうね。

常岡　丹波に帰って友人と飲んでると、おやっと思うことが時々あるんです。私なんかそうだが丹波を出てから、丹波をよく知ったところが相当ある。コケむした石段や木の肌ひとつを

取ってみても丹波でないとない、関東にはないものがあるんです。だけど丹波の人はあたり前だと思っている。

谷口　どっぷりとつかっているとわからないんですね。つい忘れて、次の新しいものができれば発展しているのだと錯覚してしまう。

常岡　そう言うものが、知らず知らずのうちに心をうるおしているんですがね。

高速道で近くなる〝海〟

宮野　具体的にはどんなプロジェクトを考えておられるのでしょうか。

谷口　氷上郡の拠点は二つありまして、ひとつは春日町を中心にした丹波カルチャーゾーンです。ここには近舞線のインターチェンジが設置されます。いうならば〝陸の港〟です。ここに先年、歴史民俗資料館ができましたが、かなりの人が訪れているようです。さらに美術館をつくり「くつろぎと歴史の広場づくり」として計画しています。柏原の方は工業団地と今、造成中の氷上町の農村工業団地の接点になるところを丹波リフレッシュ・フィールドとして「文化と健康の里づくり」をテーマに進めています。勤労青少年中心の野外活動の場づくりを進める。

小杉　プロジェクト全体としてのねらいはその土地に住んでいる人の住みやすさでしょうが、観光立地的にも良くなるんじゃないでしょうか。その面での経済的発展もあって内需と外需の両方、うまく行きそうですね。

谷口　阪神間から春日インターまで一時間で来れますから、かなりの都市の人が訪ねてくると思います。

小杉　高速道路ができると、近間の海舞鶴まで相当、時間が短縮されるのではないですか。その意味で森と火と水の中に河川だけでなく、海を取り込んだ計画はできないでしょうか。丹波人の海に対する憧憬は強いですからね。

谷口　近舞線ができると、県では次の案として、日本海太平洋道路という構想があるようです。但馬を経由して太平洋につなぐと言うものですが、これができれば、海との結びつきが一層鮮明になります。

暮しぶりわかる郷土館も

宮野　山国丹波に海ができたような楽しいお話ですね。ところで常岡さんは丹波路を中心に大和路や丹後路も歩かれて六十

小杉　時間距離からして、なぎさが近くなる。うれしいことですね。

谷口　この道路だと春日インターから、氷上、青垣を経て、但馬に出ることになる。車なら小一時間で行けますよ。

一年一月に個展を開かれるそうですが、大和や丹後を歩かれて気づかれたことがあればお話しください。

常岡　さきほど美術館の計画をお話くださいましたが、丹波がはぐくんできた美しい自然と、そこに住んでいる人間との結びつきの中で、美術館がありますとなお、生きてくると思うんです。たとえば立杭焼も、今はガラスケースの中に飾られていますが、昔は生活の雑器でしてね、そういったもの、今は使われていない農機具だとか、単なる美術品でなく、生活の中から生まれてきたものも一環として美術館があってほしいと思うのです。

谷口　いいことですね。偉大な人物が集めたコレクションもだいじだが、そういう土地で生まれたものも大切ですね。

常岡　生活館と言うんでしょうか。その中に一級品がさりげなく置いてある。そして、これはこういう風にして使われたんだよ、と言うことがわかるような。奈良の法隆寺で今昔の仏具がいっぱい出ているが、それをただ並べるというのではなく、これから行事の時に実際に使おうとしているんです。これは大変おもしろいと思いました。

小杉　関東でも郷土民俗資料館と言うのでしょうか、ミノやクワ、大八車などを集めているところがありますね。丹波の人のいとなみがわかるような展示館があるとすばらしいですね。

常岡　丹波布もそうですが、昔はふとんの表地だった。だけど今は古美術品のあつかいしか受けていないので何に使っていたのか、わからなくなっている。

小杉　みんなで知恵を出し合えばいろいろあるのではないでしょうか。食べ物、着物、生活の道具、後世へ伝える物は多いと思います。

常岡　どんどん開発が進んで、それはそれでだいじなことですが、コンピューター時代になって、その最先端と同時に、人間として個人個人の心の中で大切に持っていなくてはならないものがあると思うのです。

谷口　便利になればなる程、伝えなくてはいけないことも多い。その意味で郷土を離れて各分野で活躍しておられる、関東氷上郷友会の皆さんから、六十三年に向けて濃厚なメッセージをいただきたいですね。これからはもう行政サイドだけで考えていてはダメです。

宮野　ひとつ禅寺生まれの小杉さんに古刹観光ルートでもつくってもらったらどうでしょう。

小杉　三田の永沢寺、氷上郡では円通寺、高源寺などいいですね。

常岡　高源寺なんか、奈良を回ってもあれだけしっとりした自然石の石段を持った寺はそうざらにないですよ。余談ですが雨の日、かさをさして見ていると、一番上の急な階段のところから水がチョロチョロ流れ出しているんです。ああ、これも生

命は長くないな、と思ったりして…。

谷口　私も役場の横の石垣は、ずっとこのまま残せ、と言ってあるんです。こけむした野づら石でしてね、あれは。

みんなで丹波祭り参加を

小杉　私は神奈川県の平塚に住んでいるのですが、ここは丹沢の山があり、相模の海があって、都心に住むよりよほど子供を育てるにはいい環境だと思っているんです。それでも丹波に子供を連れて帰りますと、子供がパパ、こんないいところで育ったのか、と言うんです。そうだ、ここで自転車こいで、なんて言いましてね。こういう申し送りができる土地を持ったのは幸せです。

谷口　青垣町が今、紅葉の里のマラソン、と言うのをしているのですが、これが好評で県内外から多くの人が来るんです。そこで青垣町長が言うんですが柏原に総合スポーツ公園ができれば、起点終点は交替してもいいから、青垣をスタートして佐治川沿いに氷上、柏原へ、と言うコースに広げようと提案しています。点から面への発想です。

小杉　それはいいことですね。先日、帰省して見ましたがにぎやかでした。

谷口　ただ青垣は紅葉の少ないところでして。そのかわり佐治川マラソンとか、丹波を考える時、母なる水系抜きでは考えられませんから。いずれにしても六十三年の丹波の祭典には、関東在住の皆さん方やお子様も含めて、大挙して帰郷していただきたいと思います。そして丹波の良さを再発見していただきたい。

宮野　お話を聞いているうちに、ふるさとがますます夢多く魅力的なものに見えてきました。

六十三年にはぜひとも東京からバスを連ねて参加したいと思います。本日はまことにありがとうございました。

小杉　常岡　谷口

宮野

特集　わが青春のふるさと

わが青春の歌

波多洋三（春日町）

わが青春とは何歳ごろのことであろうか？　青春とは心の若さであり、信念と希望にあふれ勇気に満ちて、日々自分の仕事に打ち込むかぎり、青春には年齢がないように思います。

丹波で生まれ丹波で育った私は、誰もがそうであるように、いちばん大切なもの、いちばん懐しいものは両親であり、ふるさと丹波であります。

大正十年に国領村（現在の春日町）の進修小学校を卒業した私たちは、毎年一度はクラス会を開いて親愛を深め合っております、このことは七十歳をはるかに超えた現在でも、毎年つづけられております。私が名古屋にいたころ、幹事からクラス会の通知をうけて京都駅で山陰線に乗り換えて帰郷したことがあります。そのとき、車窓から丹波路の風景を眺めながら、ふとこんな詩が浮かんだのです。

静かにけむるふるさとに
そっと春風吹いてきた
思い出してよ昔の夢を
三尾の山のともたちが
楽しい集いをしらせたの
しばらくでしたふるさとさん

クラス会の席上、声を張り上げて歌ったところさかんな喝さいをうけました。親の在世中は都合のつくかぎり帰省したものでしたが、亡くなってからは、その回数も次第に減り、このごろは年に一度か二度、それもクラス会に出席を兼ねての墓参です。しかし、ふるさとへの愛着は年とともに強くなっているように思います。

仕事の都合で酒を飲むことがありますが、私は日本酒が好きで、それも丹波で造られた小鼓に限っております。小鼓の無い店には小鼓の小瓶をワイン用の皮袋に入れて持参します。

持ち込みを嫌う店では止むなくビールにしております。飲ん

で気分が上向きますと、自作の歌を口ずさんで得意になります。

飲むほどに　飲むほどに
飲みたくなるよ　この酒は？
小鼓なりき　小鼓なりき
ふるさと（丹波）のあじ

また酔いが回るにつれて、柏原中学校時代の校歌を

麻の如くに乱れつる　世をば鎮めし織田公の
威烈残りて山水の　姿うるわし柏原
偉人の霊をなつかしみ　自然の精に交らいて
教えの園に高潔の　精神養う楽しさよ
ああ幸多きわが健児　ああ幸多きわが健児

（二、三、四番略）

氷上農業高校（現氷上高校）の校歌

濃緑（こんどり）の兵主（ひょうず）のほとり千年の精気をうけて
梢は高く根は深く風と光の流れるところ
土の心に生きるものわれら
ああ青春のわれらの学園
氷上農業高等学校

（二、三番略）

など丹波に縁のある歌をよくうたいます。

赤いかすりの丹波布
娘のときに母さんが　おばあさんからいただいた
あのよろこびをそのままに　あなたにゆずるこのきもの

（二、三番略）

氷上農業高校の校歌と「赤いかすり」はどちらも私の叔母（母の妹）深尾須磨子の作詩です。叔母も九十歳近くまで生きましたが、死ぬ間際まで丹波、丹波と丹波を懐しんでおりました。こよなく丹波を愛した叔母は、年を重ねても常に若い気持でいつまでも自分の青春でふるさとを思い、歌いつづけたかったのでしょう。私も同じ気持です。単身赴任で名古屋に六年ほどいた時にもよくこんな歌をうたいました。

花の名古屋も一人で住めば
泣きたいような夜がある
そんな時には思いをこめて
うたう故郷のデカンショ節

年月を経るにつれて

生田正輝（柏原町）

いつものことであるが、帰省するごとに奥野々坂のトンネルを過ぎ、かつて慣れ親しんだ山や川が見えはじめると何となく心のときめきを覚える。年老いた母

が住む旧住宅の屋根や八幡山のたたずまいが目に入ると、思わず車窓から乗り出してその変らぬ姿に安らぎを感ずる。「ふるさとは遠きにありて思うもの」というが、やはり現実にふるさとの風物に接すると、時の経過を忘れ、いろいろな思い出が去来するものである。

そこには、幼なかりし頃のかずかずの出来事が、そうして多感なりし青春時代の日々の行動が深くかかわっているからに違いない。私が旧制柏原中学校を卒業してふるさとをあとにしてから、すでに四十余年が過ぎ、人生の三分の二以上をふるさとを離れて過したことになる。しかしながら、年月を経るにつれて思い起されるのはふるさとのことであり、青春時代のことである。残念なことは、このころの多忙にかまけて、帰省もままならないことである。昨年は亡父の十三回忌を営むことが出来たが、八十才を過ぎた母を残していることもあって、心苦しく思うこともしばしばである。幼なじみや近所の人びとに対してもご無沙汰のしっぱなしで、申し訳なき次第である。無沙汰は元気なしるしであると勝手なことをうそぶきながら、多忙な毎日を送っている。

このところ、ことさら仕事が多くなり、何の因果かとぼやきながら東奔西走を繰り返している。本職である慶應義塾大学の教壇に立ちながら、水戸市に常磐大学の創設を依頼されて手がけて来たが、それもようやく四年目の完成年度を迎えて目鼻がつきほっとしているところである。水戸で人情のこまやかさや素朴な人びとに接するごとに、あらためてふるさとがしのばれ、ふるさとの人びとが思い出されることである。

三年前まで日本新聞学会会長をつとめたが、今は一昨年の「世界コミュニケーション年」を記念して創立された財団法人日本情報通信学会の常務理事ということで、さまざまな国際会議にも出席を強いられている。また、政府からも郵政省の電波監理審議会委員をはじめ、いくつかの審議会、懇談会などに加わることを求められ、微力をつくしている次第である。「サンケイ新聞」には、毎週「マスコミ論壇」を執筆しており、時折NHKをはじめラジオやテレビに顔を出しているので、あるいは記憶の片すみにとどめていただいているかもしれない。

手前みそをならべたようであるが、ふるさとの方々や氷上郷友会の皆様方に対しての日頃のご無沙汰の申しわけに、私の近況の一端を申し述べたにすぎない。重ねて日頃のご無礼をこの機会を借りておわび申し上げたい。

たまたま、この一文をしたためている折も折、柏原からの母から電話があり、今年も雪が降り積もっていることや知人の消息を耳にし、ひとしおふるさとが思いやられた。私もすでに還暦を過ぎたが、還暦とは暦を還して子供にかえる意とのこと。私もそろそろ身辺を身軽にし、ふるさとをもっと訪ねたいとしきりに思うけれども、意のままにならないもどかしさを覚える。

わが青春といえば、押しつぶされたような大学生活もさることながら、厳しかった軍隊生活とあの中学時代の生活なしには語れない。何人かの戦死した仲間や、六・六増減案で苦労している西山敬次郎君をはじめとする級友のことが、あのころの柏原中学のたたずまいとオーバーラップして脳裏を去来する。花のお江戸でそれなりに芝居をしている丹波の山ざるの、ふるさとを思い、青春時代を懐かしむ心境の一端を、まとまらぬままにつづった次第である。

一炊の夢

須原　清（市島町）

昭和十五年の春のことだった。京城駅（現在のソウル駅）を出発、平壌のある特約店を訪れた私は、夕方近く、ある有名な料理店に案内された。

当時の平壌はキーセン（妓生）の本場であったが、数名が朝鮮の歌の数々を聞かせてくれた。その中のひとりが、東京へレコードの吹き込みにいき、帰ったばかりであること、時折、銀座や道頓堀で新しい歌を仕入れることなどを話し、これが今回仕入れて来たものといって美声でうたうありさまに、ただもうあっけにとられるばかりであった。

酔うほどに、そうひけめばかりでもあるまいと、一昔も前旧制高校時代にドイツ人教師から教わったドイツ歌曲、荒れ野のばら、ローレライ、などを歌って柏手を浴び、さらに、ゲーテのファウスト第一部のグレーチェンが歌う「昔トゥーレに王ありき」で始まる美しいバラードをうたってしめくくった。

私は、横光利一の「旅愁」に出てくるキーセンと主人公の矢代とのやりとりの一節を覚えていた。

「でも、神戸があたし一番好きだった。こんな美しい所が世の中にあったのかしらと思って、うっとりしてしまったわ」

「神戸が？」矢代は一寸意外な気持で訊き返した。

「ええ、神戸にはあたしすっかり感心したわ、ですからあたし、平壌へ帰っても、ここで一生自分が過さなくちゃならないんだと思ったら、もう元気も何も出なくなってしまったの。もう、早くお金を溜めて、田舎へ引き籠って一生暮らそうと決心したの」

妓生の年を訊ねると二十歳だという。高麗文化を伝える二十歳の歌手に絶望を与えた神戸に、何がいったいあったのだろうと、矢代はそのとき考えた――

この一夜の歓はまさに旅愁の一節をほうふつとさせるものであった。神戸に魅せられたキーセンの郷里は平安南道の温井里であって、私はかねて機会をみていちど訪れたいと思い続けて

いた。いまこのチャンス逸すべからずと、私は特約店主に通訳のできる青年と乗用車の提供を申し出たところ快諾を得た。

その翌朝、早々に喜び勇んで出発した。しばらくは風景を楽しみながら車を駆ったが、南浦を過ぎて西北方に広がる水田の間をただ一筋、果しなく続くアカシヤの並木道にはさすがに閉口、夜来の疲れも出始める始末にようやく見つけた貧相な飯食店に腰を下ろしたのは二時間も走ったあとのことであった。しかしここでは、ハエの集中歓迎を受け、店頭のはしたてに群がる黒い塊にぼう然となるばかり、食欲もうせ、若者たちのうまそうに食える焼き肉と冷めんを見やるのみであった。

これ以上の前進は無理と悟り、初めの張り切りようはどこへやら、空腹を抱えて振り出しに戻らざるを得ず、かくて多感な青年のあこがれの「温井里行」は、はかなくも「一炊の夢」と化したわけである。

神戸から京城へ赴任して三か月もたったころ、同郷人の世話で、閑静で珍しく家庭的な素人下宿の人となった。若い同宿人が一人いたが気兼ねのいらぬ住みよいところであった。

長い期間ではなかったが、この人とは散歩をしたり、土曜日の夕食後はよく雑談に時のたつのも忘れたものだった。

この地の雑踏、不潔、土地の人々との間にわだかまる感情の波風などについて、若者の抱く胸のうちを吐露し合った後は、きまって関西、特に神戸のよさが話の中心になった。

彼の最後の言葉は必ずといってよいほど、東京は「人間の住むべき所でない」という愚痴であった。長年住み慣れた、山と海の街神戸に母ひとり残して転勤して来たチョンガーであってみれば、風俗・習慣のなじめない外地にあって、うっ積するものが多いことだろうと同情の念を禁じ得なかった。

神戸、私が青春を過した街、ここに生きたことを誇りに思う街、この街のなにかに魅せられ、絶望した半島の麗人の嘆声に、私はなお深い共感を覚えている。

はからずも到来したチャンスをとらえて決行した念願の温井里への道化の旅と見果てぬ夢。

修羅場の青春

藤田正雄（多可郡黒田庄町）

柏原中学校は一学年百名二クラス編成の小さな学校であった。毎年クラス替えがあり、卒業までには全員が二度か三度同じクラスになる仕組みであった。

入学式は四月八日、その日から私はOと親しくなった。彼とは郡の競技大会での好敵手で顔見知りだった。彼は浅黒く精悍な顔立ちの、さっぱりした気性の少年だった。Oも私も陸上部に入り以後行動を共にした。自転車で二三十分の彼とは休暇中

よく行き来し、夜を徹して語り合うことがしばしばだった。Nは色白の目の鋭い強烈な個性の持主で、新入生総代を務めていた。Sは大柄で茫洋とした風貌の暖い雰囲気をもつおとなびた少年だった。この異質だがともに優れた資質の三人の友の影響を私は強く受けることになる。OとSはトップを争い、一番で入学したNは学業成績を問題にしない奔放さがあった。Nと私は教科書以外の読書に没頭した。

二年に進級して間もなく、支那事変が勃発した。急激に軍国主義の風潮が強まった。軍部批判の演説で斉藤隆夫氏が衆議院を除名になった。少年飛行兵を志願して学窓を去る級友もいた。中学生も勤労に動員された。街では和服の女性の袖をはさみで切る愛国婦人会の行為が美談として報道された。時局とか非国民という言葉が氾濫した。

私の一日は朝五時起床で始まった。駅まで自転車で約十分、五時五十分の始発で谷川に出、一時間待って下り列車に乗りかえ、七時三十分登校、八時から二時三十分まで授業、練習後四時十六分か五時十分の列車で帰宅、雨の日は二時四十三分に乗れた。教科書を開くのは試験前夜だけで、十二時頃まで読書、冬季は始発が三十分おそくなり、陸上部の練習は休止。これが三年生頃までの日課であった。

四年生になって、私は高等学校を志望し、人並に受験参考書を購入したが、国語と数学はともかく、英語は全くお手あげだった。情けなくなるほど暗記力に欠けていた。一生懸命覚えた単語は翌朝には九十%忘れていた。本を読むときは時間がいやに遅く感じられた。その年、Sが三高の試験に合格した。これは大変なことでクラスに大きな刺激を与えた。翌年三高に二人合格したが、何年かに一人入れるかどうかという学校に、現役から二人合格したのは初めてのことではなかったろうか。

五年生になってすぐ、Sは政府派遣留学生として中国に渡った。私の受験準備は遅々として進まなかったが、陸上部では結構活躍していた。近府県中等大会で走幅跳二位入賞、走高跳は柏中の記録保持者になった。十二月Oが運動と学業を両立させ、卒業を待たずに海軍機関学校に入校した。

翌春、六高受験に失敗した私は東京の予備校にはいり、真剣に受験勉強にとりくんだ。四ヶ月、自分でもよくやったと思う。毎月のテストの成績が励みとなり、OとSの手紙に勇気づけられた。しかし、それも上京直後感染した結核の発病であっけなく挫折した。

その年の十二月八日、日米戦争のひぶたがきられ、個人の小さな不幸をよそに、日本民族はその興亡を賭けた大戦に突入した。緒戦は奇襲が成功して大勝したが、半年後の十七年五月以降、サンゴ海、ミッドウェイ、ソロモンと戦況にかげりが見えてきた。

八月、機関学校最後の夏季休暇でOが帰ってきた。うかつに

は何もいえぬ時勢だったがＯとは何でも話せた。二泊して彼は去ったが、不思議と疲れは出ず体調は快方に向かった。

昭和十八年早春のころ、ガダルカナルの敗退が報道された。それ以後、我が軍は転進（後退）を余儀なくされ、戦況は容易ならざるものとなった。十月、学徒動員令が発令され、徴兵猶予の制度はなくなり学徒は学園を去って戦場に赴いた。学籍のない私にも徴用令がきた。もはや病弱者も例外とはされなかった。横須賀海軍工廠の電気工として、軍艦修理に励んだ。迷いもなく体調もよかったが、半年後何の前ぶれもなくかっ血し、再び入院することになった。その頃、日本の国土はＢ29の熾烈な攻撃にさらされ、東京、京都を除く各都市はつぎつぎに廃墟と化していった。航空科に転じ、茨城県の百里基地で飛行訓練を終えたＯが任地に赴く途中立ち寄ってくれた。生還を期せぬ戦場に征く友との最期の別れの日であった。さわやかな笑顔を残して若い海軍士官は去った。それからさらに半年、昭和二十年一月二日、二十一才の海軍中尉はサイパン上空の白雲のなかに散った。

人は死が既定の事実であると意識した時、その人なりにさまざまな思いにかられる。Ｏは祖国に対する忠誠心と義務を尽すことのみをねがい、武人らしい最期を望んだにちがいなかった。私にはＯのような死に場所はない。美しい死は望むべくもなかった。ただ、どのような死に様にしろ精神の気高さと誇りとをもって死ぬことを願っていた。

八月十五日無条件降伏によって戦は終わった。我が青春の一幕はあらゆる可能性を秘めた花の季節ではなかった。それはすべての可能性を圧殺した戦争という地獄の修羅場であった。それまでの価値も権威も秩序も歴史さえも逆転させた敗戦という結末。しかし、これもまた壮大な世界史のなかの一駒にちがいなかった。翌年五月私は京都に出た。飢えと混乱と混沌のなかに己を求める無明の旅立ちであった。

青春虚実　常岡君のこと

田中篤郎（市島町）

常岡君（常岡幹彦画伯）との最初の出合いは昭和十九年秋のころだったと思う。

わたしたち悪童四人が炭運びのノルマを終えて、口々に勝手なことを言い合いながら、残りの弁当を食べるべくどやどやと教室に入った。山行きは朝が早く、育ち盛りのうえにろくなものを腹に詰めていないので、いつも腹をすかしていた。それで山に着くとまず弁当を半分食べ、炭運びを済ましてから残り半分を食べるのが例であった。

教室に入ると、秋の西日を受けた窓際の机に少年が独り坐っ

て、何やらノートに書き込んでいる姿が目に入った。その少年に覚えがなかったので、仲間の一人に「あれだれや」と聞くと「常岡や」と教えてくれた。

そのころは柏原中学校にも疎開で転校して来る生徒が増え、知らない顔ぶれが次第に目につき始めていた。なにぶん、戦争も末期に入っていたから、上級生は工場動員、私たち以下の生徒は連日炭焼きと、授業はほとんどなかったから顔を合わせる機会も少なく、知らないのも無理はなかった。わたしが「?」という顔をすると、「文亀さんの息子や」とつけ加えた。常岡文亀といえば中学の先輩で高名の日本画家だったから知らぬ訳はなかったが、息子が転校して来ていることは知らなかった。そんなことを言ってる間も、彼は色白の横顔をみせてせっせとノートに書き込んでいた。

私たちは弁当を机に置くと、ぞろぞろと彼の方に寄っていった。色白で大柄の彼は、生意気?にも黒縁の眼鏡をかけ、育ちの良さと都会のにおいを漂わせていた。数学の公式を書き写している彼が手にしているのは、なんとパイロット万年筆ではないか。当時、万年筆などというものはめったにお目にかかれる代物ではなく、わずかに持っている連中のものも親父か兄貴のお下がりで、型も古くさいくたびれたこっとう品であった。いま目のあたりにする彼の万年筆は新品でペン先はみごとに輝いていた。いま思い出してもはっきりその姿がよみがえる。

わたしは当時いちばん欲しいものであった万年筆に気を取られていたが、一人が

「お前なにしとんや」と問うた。

炭運びでふらふらになるほど働いて帰ったのに、のんきにノートをとっていやがって、どういうつもりや、という気持を込めて少し強くいった。居残っている者は、体が弱いか、けがをしているかで、色白だけれど、柄は大きいし、見た目には弱そうにも、けがしている様子もないからサボッているとしか映らなかった。その言葉に驚いたようなしぐさをして顔を上げた彼は、「今日は仕事の様子が分らなかったので先生に聞くと、自習しているようにといわれたので……」とか丁寧に言って、眼鏡のつるを持ち上げた。こざっぱりした服装の彼にひきかえ、彼を取り巻く連中は山行き姿のうえに炭で汚れていて、それでも中学生かと怪しまれそうな恰好であった。

初めの気勢はどこへやら、彼のもつ都会的な雰囲気と姿勢に逆に気押されたようになり、その後のことは記憶にない。ただ、あの時の彼の姿勢とあの万年筆がわたしの心に焼きついていて、今もはっきり思い浮かべることができる。

その後、彼とはいつもクラスが違っていたのか、顔が合えばあいさつぐらいはしたのだろうが、親しく話をしたような思い出はない。

彼は敗戦後も東京に帰ることなく、柏原で中学、高校を過ご

し、昭和二十四年春卒業して東京芸大に進んだ。彼の消息は、時に風の便りに聞くぐらい、それもとだえがちだった。

はるかなり四十年

柏陵同窓会で彼に会い、改めて交遊を重ねて今日に至っている。わたしも彼も酒をやるので、何かと誘い合って飲んでいる。彼は、風ぼうどおり、泰然として飲み干してゆくが、わたしは騒がしく品の悪い酒で、彼には迷惑なことだろうと恐縮している。飲んでいる彼の横顔をみていると、少年時代の面影が幾分残っているだけに、昔のあの時のことが鮮やかによみがえってくるのだが、

「そんなこと言うてもなあ、でけへんて」とか、

「忙してなあ、酒も飲んどれんわあ」とか彼の丹波弁を聞くと、四十年前の彼と、目の前の彼とは重なりにくく、深まる酔も手伝って、なんとも不思議な気持になってくるのである。

修行の日々

植村　章子（春日町・旧姓善積）

「我が青春」などといわれましても、こんな八十四歳の老婆にはすべてが忘却の彼方にかすんでしまった思いです。はるかな記憶を頼りにどこまで青春をたどれますことやら……。

柏原女学校への通学は、他の友達は徒歩で、私は、朝七時二十一分・石生駅発の汽車を利用しましたが、わずか五分の乗車でした。冬は野山から歌道谷へ渡る道の寒かったこと、雪の日には何度もきつねに会いましたが、きつねは、たびたびうしろを振り返りながら逃げていきました。

校長の近藤九一郎先生は、良妻賢母主義の徹底した教育を校是として、厳しい指導をなさいました。いま思えば懐しく、何十分の一かは頭に染みついております。養蚕、せん茶の作り方まで習いましたが、貴重だったと思っています。

中学校がすぐ近くにあるのによく何ごともなく過ぎたものと思い出しています。汽車通学の生徒たちは、二等車を中にはさんで、うしろの車両に女学生、前に中学生が乗るのが規則でした。中学校の河津先生も乗っておられました。運動会の時には、学校の南の土手に（今は山すそまで広くなりました）中学生の坊主頭が並んだものでした。

当時、家の遠い人は寄宿舎に入りました。生徒は、一村から一人か二人、多くとも三人くらいでしたが、皆仲よく勉強したものです。料理の時間など楽しゅうございました。今のように共学だったら、また異なる楽しさがあったでしょう。

女学校を卒業したら奈良の女高師へいきたかったのですが、すぐ下に妹がいるから嫁にいかないと困る、という父の理不尽な理由で、私の希望はかなえてもらえませんでした。

卒業後、惇明校長をしていた中島鉄二郎（叔母の夫）宅へ修業に出されました。二人とも厳しい人だがものわかりのよい人たちで、私をよう教育してくれました。行儀見習と申しますか、接客の作法、料理、裁縫、茶、花などのお稽古ごとも習いました。女高師行きはあきらめましたので、こんなことに精出した楽しい思い出もございます。小学校の先生から結婚の申し込みを受けたこともありました。

縁あって満十九歳で植村へ嫁ぎ、九州の赴任先では、土曜から日曜にかけよく旅行に出ました。これが後年になって私を無類の旅行好きにしたと思います。娘時代の延長で、稽古ごともしておりましたが、年子の子供を産み、育児の明け暮れになり私の青春は終わりました。

山ほととぎす

菱田ふみ子（氷上町・旧姓有田）

筆をとりますと、なにから書いてよろしいやら、この年になりますと青春は遠くかなたにあって、なにもおぼろけで、つかみどころがない始末です。

子供の頃の思い出は、年をとるにつれてなにかにつけて、断片的にではありますが、はっきりとなつかしくまぶたにうかぶものでございます。

ある日、女学校時代のことですが、授業時間中、ほととぎすのけたたましい鳴き声に東京からこられた先生がハッとなさったのをみて、改めて耳を傾けたこともございました。朝夕、入船山の塔を眺め心安らぐ思いがいたしました。柏原はしっとり落ちついた城下町でしたが、知人からの写真や手紙でその移り変わりを知り、一度行ってみたいと思いながらもその機会がなかなかもてないのは心残りのことでございます。

東京に住むようになってすでに六十三年にもなります。私の実家は昭和のはじめに京都に引っ越し、これまでに数回墓参に故郷を訪ねましたが、屋敷跡を眺めるくらいでした。生家の裏手に大竹やぶがあり、その向こうに庭園があって、折にふれては行っておりました。今でも、木石、築山や池をそのままはっきりと覚えています。庭の杉垣をへだてて松林があり、雨が降れば小川のせせらぎも楽しく、とてもよい所でした。この辺りは祖母の毎日の散歩道で、時々お供することもありました。朝に夕に伸びる竹の子と背比べをしたり、雪の朝、うさぎの足跡が残っていたり、夜更けの雨戸越しにきつねの声が聞こえたり、寂しいところではあったが住めば都で、自然とともに生きたあの頃がひとしおなつかしく思われます。もういちど住んでみたいと思いますが、さて住んでみましても六十数年の隔たりは昔に返すよしもありません。

小学校六年生の時、遠足で「鬼の架橋」に登って楽しかったことを思い出して、女学校三年になって寄宿舎の有志と舎監の先生とで、小学校当時のコースを私が案内して、遠足の再現をいたしました。登りは「鐘ヶ坂」のトンネルを通り、下りもそのまま小倉の方へ出て帰りました。今は鐘ヶ坂も桜の名所となりにぎわっているようですが、さぞ美しいことと想像しております。

いつか有田喜一先生のお留守宅に参上し、お母様からいろいろご近所の話などを伺い、お心尽しのごちそうになり、その上、墓参までして頂きました。

それから数年後に訪ねた時には裏の小川も松林も道路に削られましたが、それだけ便利になりました。母の実家が今の西脇市にあります。今ではバスが通って、アッという間に行けるほど便利になりました。当時、夏休みになると五里の道を三時間も人力車にゆられながら行ったものでした。汗びっしょりになって走る車夫の背をみながら気の毒だなあと思ったことでしたが、隔世の感とはこのことでございましょう。事実、前世紀の人間ですから当然のことと存じます。思えば長い年月で何を考えても七、八十年昔の話をついこの間の事のように思い出します。まあ、こんな思い出をもてることは、古里があればこそで、ありがたいことでございます。

いまはどこも老化いたしまして、目も薄く、頭も薄くなりました老人のたわ言とお聞き流し下さいまし。

つかのまの春

木呂子 恵美子（春日町・旧姓河内）

中学二年の春、父が春日部診療所勤務になり、同村の多利に移った。転校した春日部中学校はたいへんおおらかで楽しい校風であった。よそ者のわたしをみんなすんなりと受け入れてくれた。

「ああ春日部の美し郷、人勤勉に物豊か、文化は日毎進めども、平和は太古さながらに、よき師の君に導かれ、互いに励み励ましつ、この環境に恵まれて、学ぶ我等の楽しさよ」

三十五年前の、それもたった一年間の在校生だったのになぜかいまでも覚えている。学校は小人数であったが、絵のうまい人、裁縫の上手な人、歌のうまい人、運動の得意な人、明るい笑いを運んで来る人、みんなそれぞれに豊かな天分を発揮して、クラスはいつも良い雰囲気に包まれていた。

学芸会では、ふたつのクラスが「マクベス」と「コーカサスの捕虜」を上演した。まさしく全員参加の全力投球といったところ、歌あり、踊りありのミュージカルであった。なにかロシア風の曲を取り入れようということで、満州のハルピン（現在、

中国黒竜江省省都ハルビン）で生まれ育った母が曲をつけたりもした。昭和二十六年のことである。当時、芸術家肌の和田先生や若々しかった稲畑先生のお名前を時々丹波新聞などでお見かけしてなつかしく思う。

私の家は子どもが六人も居たため、貧乏暮らしではあったが、割合に書籍がたくさんあった。ひまわり、それいゆ、トルー・ストーリーなどの雑誌をはじめ、内外の文学書を読みあさり、果ては、押し入れにしまってある父の本までひっぱり出す始末であった。それに、子守当番の時には、小さい子を背負って、乱読を重ねたものである。

中学校時代には、人並みに甘酸っぱい初恋らしきものの淡い思い出があり、高校では、ちょっと不良っぽい人に心をひかれたり、先生にあこがれたりもした。当時は人並みに悩んだつもりが、いま振り返ると、恋に恋した時代であったともいえようか、甘い言葉を交わすでもなく、手を触れることもなかった。ひとりで燃えては、つかのまに消えてしまった、いとおしい青春のひとこま。

高校生活はそれまで転校の多かった私にとって、入学から卒業までをおなじ学校で通した初めての経験であった。それが柏原高等学校である。学校では、音楽班、国文学班、ＥＳＳ、といろいろ欲張って顔を出し、ほんとうに楽しい時を過した。教科の勉強はおろそかになりがちではあったが、束縛なく、自由にものごとについて考えることができる、充実したたいへんありがたい時期であった。

サーカスと見せ物の大ねずみ（いま思うとヌーメリアだった）を思い出す厄神さんのお祭り。無理に頼んで、Ｈ君の洋品店でアルバイトをさせてもらい、優しいお母様に、おやつ付きでシャツまで頂いた、たった一度のアルバイトの経験も忘れ得ぬものである。

そしてもうひとつ、卒業間際に敢行した一大秘話を披露し筆をおくことにしょう。

なぜかこのまま校則を守ったまま卒業してしまうのは惜しい気がして来た。そこで、親友のＩさんと共同謀議におよんだ末、かねての念願であったお好み焼き屋なるものに入ってみよう、ということに決まった。Ｙ君に白羽の矢を立てて相談したところ、首尾よく自分のいきつけの店に招待してくれることになった。清水の舞台から飛び降りるのもかくやの思いで、遂にお好み焼屋の敷居をまたいでようやく宿願を遂げ、意気揚々と引き揚げたときは、大石良雄の心境さながらともいえるものがあった。

この話には後日談がある。わたしたちはおかげで望みを達することができたが、気の毒なのはＹ君で、秘蔵の本を売って軍資金を作ってくれた由で、申し訳ないやら、ありがたいやら、とんだ天野屋利兵衛の出現ではあった。

山鳥鋭男先生のこと

大野善三（柏原町）

昭和二十二、三年の頃であった。新制高校に変ったばかりの一年生か二年生であったように記憶する。所は柏原町南多田。ある宅の離れ座敷。藁屋根に荒壁造りで、座敷というより納屋のような陋屋であった。傍に、柿の木が実をつけていたように思う。屋内は薄暗いが、昼間なので天井から垂れ下っている裸電球には明りがついていなかった。

山鳥先生は正座し、小机をはさんで私に対した。背筋がまっすぐに伸びているので、私を見おろすような形であった。

「大野君。悪いけど、これは一文の価値もありません」。先生はぶっきらぼうに言い放った。これが、私が親しく先生の薫陶を受けた最初であった。

これより以前、先生のこの下宿に友人の小田君と二、三度訪れて、文学の話などを聞いていた。そのうちに、「君も何か書いたものがあるなら、持ってきなさい。読んであげるから」と言われ、それまでひそかにノートに書き溜めていた幾つかの文章を見せた。その時の読後感がぶっきら棒なこの言葉だったのである。

「君ね、物事をもっと見つめな、あきませんね。恋愛小説が悪いとは言わんけど、人物が全く描けとりませんね。だめです」。

私は小さくなって項垂れた。淡い片想いの経験はあったが、激しい恋愛感情の葛藤についてはまだ知らない。心理描写するほどの筆力もない。中味は、ある男女が遭遇して瞬く間に恋に陥るという他愛のない甘い空想物語であった。

私の文章を批評したあと、山鳥先生は、文章作法や小説の要諦について説かれた。見たことを思いのままに記すこと。そのためには、物事の状況を丁寧に凝視すること。いつも分析的に観察し、ものの本質を把えるように怠らないこと。その説くところは、子規の「俳諧大要」に見られるようにきびしく教育的であった。やたらに多い形容詞は極力排除すること。主観を排して、客観的であること。事の美醜好悪は事実をもって語らしむべきことなどを諄々と説かれた。

山鳥先生は、学校では「鳥さん」の愛称で呼ばれていた。国漢が専門であったが、国語の授業がどんな内容であったかあまりはっきりした記憶がない。ただ、国文法の時間に、品詞の細かい規則を教えられたことを思い出す。「この言葉は格助詞であって目的助詞ではありません」とか、「この言葉は連用形にはつかないものですから、この文章の用法は間違っています」といった難しい話であった。文章に対して余りセンシティブでないわれわれには、文章を分解して品詞の性格を問題にしたり、

用法の誤りを指摘されてもそれほど興味のもてる話ではなかった。

先生はまた、時々生徒に作文を書かせて、その中から出来のよい二、三篇を皆の前で読むという指導方法をとっておられた。あれ以来先生の教えを守ったためか、私の作文も二、三度読んでもらったことがある。返された作文には、時々朱筆で添書されていて、「ここの表現は、言い得て妙！」などと評価してあるのを見てうれしかったものである。

しかし、ぼつぼつ大学受験の準備をしなければいけない頃で、こんな授業を受けていたのでは入学試験が心配だという声も出てきて、必ずしも先生の授業方法が好評だったわけではない。試験問題に出てきそうな文例をとりあげて、その読み方や解釈のしかたを教えてくれることに、もっと身を入れてほしいという希望が生徒の一部から出された。

「その考え方は、君たちの間違いです！国語は、受験のための課目ではありません。国語というのは、日本文化の基本なんです。君たちの生活の基本なのです。作文は君たちの学力をつける上で最良の方法なのです」。先生は毅然と言い切った。しかも、一度断言したものは露程も変えないという頑な表情で生徒たちを見すえた。この言葉で生徒側が納得したわけではなかったが、この先生に自分たちの希望をぶつけてみても畢竟無駄なことだという空気になった。

明治、大正の文学界を二分する文豪として森鷗外と夏目漱石があるが、先生は森鷗外の本を好んで読まれていた。教室でも、鷗外の文章が無駄がなく本質を衝いているという例を、いくつかの小説から引用して、詳しく説明された。しかし、先生が鷗外の書を愛読された根拠は、その作品に人生の道を見出そうとされたことにあったように思う。鷗外の作品には、西欧のものの翻訳が多い。それに、徳川時代の武鑑などから題材を得た歴史小説が多い。そこには、逆境に闘う人や、運命に弄ばれて戸惑い歩く生き様が、冗漫な感情表現を一切抜いて描いてある。下手な生き方を選択した人たちに暖い眼を注ぎ、それを簡潔な文章で寸分の狂いもない物語にしたててある。ここに、先生が鷗外の作品にひきつけられた原因があったように思う。

先生の実生活に、鷗外の作品にひきつけられなければならないような問題があったのかどうか、それは知らない。ただ、奥さんやご子息が住んでいらっしゃる多紀郡の自宅から、汽車で通勤することが全く不可能であるというわけではないのに、柏原で単身生活をしておられたことが、常識的であるとは言えなかった。

一度こんなことを先生が話された。

「鷗外は、家族に不愉快なことがあると、書斎に籠り切りになって、翻訳に逃げこむということが、しばしばあったそうです」。つまらない当方の勘ぐりかもしれないが、心を患わす面

倒な世事が先生の頭を占めているように聞えた。大人の複雑な生活事情はわからなかったが、奇妙な感情でこの言葉を聞いた記憶はある。

私たちが訪れた頃、机上に鷗外の著「渋江抽齋」が載っていた。虚構と誇張に満ちた小説より、このような作品こそ文学の本質を表わすものだと、先生は説かれた。しかし、十五、六の少年に「渋江抽齋」のよさが解ろうはずがない。これは小説というより、鷗外がその後期に好んで書いた史伝である。渋江抽齋にしても、その他「伊沢蘭軒」や「北條霞亭」の伝記にしても、歴史上一般には無名であり、それぞれの生涯に特に波乱万丈のドラマがあるわけではない。作品はいずれも淡々とした考証記録である。高校二年の若者に、そのような枯淡の著作が興味をひく訳はなく、それを読みこなせる程の国語力も持ち併せていない。先生は無理に読めと言われなかったが、兎角浮薄に流れ勝ちな私の精神生活に対して重厚をもって応えようと、この史伝を示されたのかもしれない。

先生はほとんど着たきり雀だったような印象が残っている。本当はそうではなかったのだろうが、記憶に残っているのは、いつも紺の詰襟に細いズボンという姿であった。細いズボンに三つ揃えというときもあった。今でこそ若い女性が細いジーンズのズボンをはいて活発に動く姿は珍しくないが、幅広いダブダブズボンが流行っていた当時、一九三〇年代の細ズボンを身につけた先生の風采は、時代遅れをことさらに強調しているようで目立っていた。長髪が一般であったのに、僧侶のように常に丸坊主であった。左の小脇に風呂敷包みを抱え、少し前かがみになって大股で歩く姿勢は、多少長身でもあった所為で人目をひいた。

この姿が、ある朝運動場に集まった全校生徒を前にして、突然演台に立った。どなたかの先生が口角泡を飛ばして演説をした直後である。

「わたくしは、あすのストライキには参加しません。私はいまの組合の方針に反対します。明日も、私は授業します。」

これだけを宣言して、山鳥先生は直ちに演台を降りた。生徒たちは一斉に、他の教師の顔を見た。いずれも目を伏せて、顔を強張らせていた。

何を目的としたストライキであったか覚えていない。恐らく日教組指令のゼネストであったろう。他の教師は温順しく組合の意向に従い、翌日は予定通り罷業休講した。その中で、山鳥先生は決然とスト破りを敢行した。普段通り、時間割りに合わせて授業を行なった。翌日、一人だけ授業をやり通したユニークな先生として、新聞に報道されたそうだ。当時労働運動が盛んになり始めた頃で、教師聖職論と生活の苦しさを訴える教師安月給論とが入り混じり、そこへ新進のイデオロギーなどが導入されて深刻な議論が起っていた。ストに参加した中には内心

忸怩たる思いの教師もいたに違いないが、流れに逆らう程の勇気のある人はいなかった。山鳥先生は、どんな目的であろうと教える立場の者が集団行動の挙に出ることは厳に慎しむべきだという信念を貫いた。その行動はあまりの少数派であったために変人扱いされたが、多くの尊敬もかち得た。

この頃、先生から夏目漱石の「私の個人主義」という評論について話を聞いた覚えがある。これは、漱石が学習院の学生にした講演である。とかく日本人は他人の尻馬に乗って自分の説を立てる。殊に、西洋人の説くことに従うばかりで、自分が何であるかを見失っている。漱石はこうした反省から、自己本位という考えに到達する。この自己本位はもちろん自分勝手に振る舞うという意味ではない。個の独立を説くものである。自分の文芸作品はすべてその四文字に立脚するとしている。そして、自分が自我を主張する限り、他人の自我も認めなければならない。権力や金力で他人の自我を圧えつけてはならない。ここに個人主義が生れ育つ。徒党を組んで力を頼むより、これに対抗して個人主義を貫く方が淋しい。しかし、徳義心の高い個人主義こそ平和の原点であると、漱石は説くのである。山鳥先生は、付和雷同しない論拠をここに求めておられたようである。

山鳥先生は東北大学で国語学を修められた。東北大学に山田孝雄という国語学者が教授をしていたからである。日本文法の研究には、時枝誠記、橋本進吉の東京大学のグループと山田孝雄のグループの二派が併立していたのだそうである。素人の私には詳しいことはわからないが、時枝文法とか山田文法とか称され、それぞれ譲らぬ学説をたてていたという。いまは、高橋進吉氏の学説が主流をなしているということだが、山鳥先生は早くから山田文法こそ日本本来の文法だと考えられていたようである。われわれは、その山田文法の片鱗を国語の時間に教わったのである。

国語学者として、先生は現代仮名遣いの制度に反対された。日本語への冒瀆だとさえ言われた。漢字制限に対しても、漢字という表意文字で表わす簡潔性をそこなうと嘆かれた。仮名と漢字で熟語を作らせることは、文化の破壊に手を貸しているように見えたのではあるまいか。当時その姿勢は新風に楯突くアナクロニズムと受けとられた。しかし先生は、終戦とともに圧し寄せてきた民主主義が衆愚政治に堕落することを虞れ、国語の簡便化が不知不識のうちに文化の浅簿化を導くのではないかと憂えておられたのではないかと思う。

先生は酒を嗜まず、三度の食事も菜食が中心だったようにお見受けした。いつも蒼白い顔色で、時に天神髭をたくわえられた。賑やかなことからはできるだけ身を避け、孤高を保つ風であった。それはさながら戒律に従う苦業僧の趣きがあった。

昭和三十六年、先生は五十六歳で亡くなられたと聞く。高校を卒業して後、先生とのつき合いは完全に切れた。先生が死亡

されたことも、ずっと後になってから知ったのである。だから、その後どんな風に変られ、孤独な生活がいつまで続いたのか知らない。ただ当時の一途な生き方から見て、真摯な生活態度と変人扱いされた剛直な個性は終生変りようがなかったのではないかと思う。

子供のころ (1)

足立源治（青垣町）

「アルマ。サロン。オリエント。スター。エアーシップ。リリー。ゴールデンバット。胡蝶。」

「シーアン　セーズニ　ナニゴトデーモ　エスハ　キミールヨールベキートモゾ　コハ　ワガオカシタル　ツミノターメターダ　シンゼヨーオ　ターダ　シンゼヨーオ　シンズルモノハタレモ　ミーナスクワレーン。」

幼いころを思うとき、共に遊んだ悪童どもといっしょにこのまじないのような文句が浮かんでくる。前の方は大正末期の両切りたばこの名であり、後の文句は、救世軍の布教の歌詞の一部である。

ほぼ部落の中央にあったたばこ屋の表の通りが子供たちの集合場所になっていた。たばこ屋の横額の看板に書かれた名前をお経のように読むのも遊びのうちである。

「来た、来た」誰かがどなる。ドーン、ドーンと楽隊が太鼓を打ち鳴らしながら、やって来る。いつもの歌である。皆がうしろに続く。「信ずるものは誰も皆救はれむ」のところへくると悪童が合唱する。「シンドルモンハダレモ　ミーナハーカイケ」そしてちりぢりに逃げるのがきまりであった。

わたしたちの子供のころといえば、大正末から昭和の初めである。男の子も女の子も木綿かすりの着物にわら草履である。背丈に合わせて縫い上げがしてある。そのぬやげの中に「あきまめ」といったが、そら豆のいったものを詰め込んで「遊んでくるでー」と家の中へどなってからたばこ屋へ駈け出す。もう電灯がつくころまで帰ることはない。当時は定額灯といい、夕方五時になると一斉に各家に点灯する。点灯時というのが昼と夜を別けるメドとなっていた。中学校の規則には、電灯時以後の外出を禁ず、という条項があった。

遊びといっても、大げさにいえば、森羅万象を相手に動き回ることがすべて遊びであった。四季折り折りの遊び、季節に関係なく年中できる遊び、の区別はあった。自然の恵みの中で、自然を相手に、遊び場である山野で遊び道具を求め、作り、その中で遊ぶ喜び、考える楽しさを覚えたのであろう。

遊びにもある程度のルールがあった。そしてその場の年長の子供がリーダーの役を果たして、アムパイヤーともなり、監督

ともなった。

柿の木や椎の木は折れ易くて滑るから、登る時は気をつけよ。あそこの池はひとりで行ったらカッパが出て来て池へ引きずり込んで血を吸うてしまうど。すりばち池の危険をカッパに托して教えたのであろうか。水泳ひとつをとってみても、大きい子について大川（おおかわ）へ行く。大きい子が「見とったるさかい飛び込んで浅い方へダボテン、ダボテン、泳いでいけ。顔は水につけとけ。そしたらからだは浮きよるさかい」この命令に権威があった。こわいながらも飛び込むと、その勢いで一生懸命足をジャボジャボやって浅い方に向かう。息が切れて立ち上がろうとするとまだ背は立たなくて、「ガボッ」と水を呑む。こんなことを繰り返すうちに自然に泳げるようになる。泳ぐ距離はせいぜい10メートルどまりだろうが、思い出としては、底まで澄みきった流れに美しい色の巨大なイザが泳ぎ、洋々と流れる大河は正に長江の思いではある。

今の子供たちには、われわれがこぶな釣りし故郷は自然とは受けとめにくく、むしろ、ピーピーとわたしにはうるさく感じるコンピューターの機械音の方が自然なのであろうか。

「あそび」について書くといえば、これは当然のことであるが、当時の文化、風俗である以上、正確でなければならない。しかし、ここで書くことはわたしのウロ覚えの記録であって、不謹慎のそしりは免がれないところである。

一年の始めは正月から。で、正月はなにをして遊んだのか。

まず思い出すのは、餅とみかんとかるたである。それに深い雪である。丹波はわたしの中学生時代まではとてもよく雪が降り積もり、近年はそうでもないように思うのだが。統計上は、今も昔も大した変化はないそうである。

バット六銭、電灯十六燭（しょく）一ヵ月六十五銭の時代である。この間の変化は、恐竜時代から明治維新までより長いように感ずるわたしにとって、統計などは見ないで、背丈ほども積もっていた雪の記憶を大事に温めていたいと思っている。

晩飯を済ますと雪明かりとちょうちんを頼りに、いてついた雪をパリパリ踏み締めて、かるた会のある家へ急いだ。このかるたは小倉百人一首で、小学生のわたしは姉についていったものである。競技者は、はたち前後の男女であったろうか。源平に分かれて五十枚ずつを取り合うもので、読み手は年輩者が務めていた。読み札には作者の似絵（にせえ）が書いてあり、この読み札で坊主めくりもできた。普通は字のみのものが多かったが、桐箱やまきえの箱に納めた美しい札のある家もあった。今でも碁や将棋の道具にみられるように、一種のステータスシンボルとして名品を備える風潮があったのであろう。昭和十年くらいまでは、百人一首は全国的に歌がるたとして普及していて、わたしくらいの年輩の人は、たいていのうたをそらんじていたように思う。正月のお飾りのある間は回り持ちでかるた取

りをやっていた。若い男女が一帳羅の着物を着込んで一軒に集まって楽しく遊ぶ。手が触れる。下着がこぼれる。あまり大事件の覚えはないが、なにか抑制のきいた色気があったのではなかろうか。

男の子供たちは、屋内では、いろはがるた、すごろく、軒先では、こままわし、パン（めんこ）、外では、たこ上げ、竹馬などが主なもので、女の子は、てまり、おじゃみ、おはじきなどで、羽根つきなども見受けられた。いまでも、いちばん初めは一ノ宮、二で日光東照宮……　この歌はおしまいには「不如帰」の武男と浪子の生き別れ、に続くのである。更に、おしろのサ、おんさかさか赤坂道、四谷の道、とか、羽根つきの、ひとめ、ふため、みやこしよめご、……　などのわらべ歌が浮かんでくる。

これらわたしの子供のころの遊びについて、改めて書いていきたいと思っている。

氷上の地名のルーツ

第16号所戴の足立順治さんのエッセー「幸世のルーツを」で求められた地名のルーツについて調べた結果を報告いたします。

「幸世」の名は、幸世解村における安田村長の式辞のなかに「明治二十二年、町村制実施に当り、村名を由良とすべきか、井中とすべきか、将亦御油とすべきか、種々論議がなされたのでありますが、その何れにも関係なき「幸世」という目出度い名を採用して今日に及んだ」とある。

氷上のヒは氷の字をあててあるので寒さを連想しやすいが、実は日・火も同じで音を借りたまでのことである。ヒは盛んな活気をあらわす言葉である。

佐治川の本流である加古川は、古くは「氷の川」と呼んでいた。その「氷の川」の上流であるから、「氷上の里」というのである。古事記、日本書紀、播磨風土記、にも「氷上」の記載がある。

「香良」―集落の入口の伊佐口寄りに鎮守の森があり、式内加和良神社の石碑がある。古くは「河原谷という」と、古書にあり、また岩山が風化されて石がごろごろした所だから、コロ、すなわちコーラともいう。播州の香呂、箱根の強羅、鳥取の賀露、などもおなじである。

しかし、祭神に住吉を祭るところからみれば、住吉は海の神、航海の守り神であり、有名な福岡の高良神社や、近江の甲良神社、香春神社その他があり、いずれも神功皇后を中心にした航海神、住吉系の神である。神奈川県には高来神社があり、高麗の神を祭っている。神功皇后の朝鮮征伐には丹波の兵も参加しているから、その人達が皇后の徳をしたい、国威の隆盛を祈っ

た、とも考えられる。

「方町」―山際に寄った片側町である。

「日比宇」の語源はピウで、古語では新しく開かれた土地を意味している。日比谷などもそれである。

「鴨内」―山東の鴨庄、鴨坂、山西の加茂に通ずる線の中にあるから早くから加茂庄園の中に入ったためであろう。

「沼」―東西から山が迫って佐治川を狭み、深い沼地であった所、小字にも、沢、フケ、タタサワ、など、泥の深そうな名が多い。

「御油」―「北」が元で「南」御油はその出戸である。御油は早くから京都加茂大社の荘園とされ、賀茂神社並びに貴船神社の御灯明料として供えられたことから、この名がある。

「井中」は伊中とも記録にみえるが、やはり「田舎」のいなかであろう。田作りの進展に伴って、田の中に母家を持って出て、「田中」となり、田井（田居）となったもので、集落が発展の経過をあらわしている。御油や井中を昔には、山田と呼んだ時代もある。

井中誌では、氏神森あたりを境に、その奥地がかなり広く、かなりの人家を収容できる平地があり、奥と口とでは遺跡や伝説に相違がある。奥地は別天地の観があり、先住民族がいたのではないかと疑われ、今は廃寺となった今滝寺に坂上田村麿が寺領を寄進した、というのが事実ならば、渡来人系に関わりがあるかも知れない。

「加茂」―井中の山端から北田井、南田井、西田井、と山にまつわりついている細長い集落は、昔から加茂一本でやってきて、明治直前の万治五年に四部落に分けられた。加茂荘園の加茂である。

「氷上」は幸世の南端であるが、氷上郡の郡名もここから出ており、早くから記紀にも記された故地で、加古川の古名「氷の川」の川上なる要地として、氷上はこの地方の中心地であった。隣接して、市場として栄えた「市辺」があり、南側の本郷は郡内一の舟着場として物資の集散地であった。山陰地方から、京、大阪、伊勢に通ずる古道の宿駅でもあった。

「油良」はユラともいい、山がすそ野をひくことなく、がけとなって平地に至っているところという意味である。

「桟敷」―田井の加茂大明神は由良庄十ヶ村の産神として敬われていたから、祭礼の時には氏子十ヶ村を巡ったが、そのお旅所がこの桟敷の地蔵堂のあった辺りである。近在での大祭として賑ったその行列を見るために桟敷が組まれたのが、村の名の起りである。

以上が、字の由来であるが、小字をたずねてみるとその辺の歴史がよくわかるようである。塚のつく所は古墳が多くみられたし、山の字（アザ）は、霧山、向山、小田山、また上見取、下見取、は毎年の出来をみて年貢を決めることから由来してい

る。佃は作り田、六反田、三丁田、それだけまとまって開かれた田地をいい、タイト田は珍しい小字で、大唐田という古代種の水害に強い赤い米を作っていたのではないかと考えられる。松ケ端、蓮花田、竹後、宮ノ前、谷田、横坪森、小松田、枚挙にいとまないが、名前からおよそ地形がわかる。

参考文献

氷上町誌、幸世村誌、落合重信著・ひょうご地名考、地名にみる生活史、山中襄太著・人名地名の語源、その他、氷上郡誌、丹波年誌、氷上郡各町村誌、等を参考にさせて頂きました。

無断で引用したところもありますが、「郷土誌」掲載のためとして、ご了承いただきたくお願い致します。

（編集部・足立源治記）

大西瀧治郎さんの思い出

谷垣正雄（柏原町）

昭和六十年十一月十五日、靖国神社にもうでた。当日は風冷ややかではあったが空は澄み切って、誠にすがすがしい好天であった。

九段坂　秋天高く　大鳥居　（椒風）

昭和十二年八月、私は日支事変に応召して近衛工兵連隊に入隊した。出征の前日に部隊全員が明治神宮、宮城とともに靖国神社に参拝して武運長久を祈願してからもう四十八年になる。

幸いにも英霊とならずに今日まで無事に生き伸びることが出来たことを感謝して礼拝した。終わって、境内の宝物遺品館を約二時間、丹念に拝観した。展示品の中に日露戦争で戦没した福知山、歩兵第二十連隊兵士の写真があった。なお見てまわると、特攻隊の生みの親で柏中九回卒業生である大西瀧治郎中将の自刃前の遺書が次のように大きく展示されていた。

遺書　　大西瀧治郎　海軍中将
　　軍令部次長

昭和二十年八月十六日午前二時四十五分

特攻隊の諸英霊に申す、善く戦いたり、深謝す、最後の勝利を信じて肉弾となり散華せり　然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり　吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす

次に一般青少年に告ぐ　我が死にして軽挙は利敵行為なるを思い　聖旨に副い奉り自重忍苦するの時と思はゞ幸なり　隠忍するも日本人たるの　持を失う勿れ

諸子は国の宝なり　平時に処し猶克く特攻の精神を堅持し日本国民族の福祉と世界人類の和平の為最善を尽せよ

八月十七日　　海軍中将　大西瀧治郎

（富岡海軍少将宛　遺書を托す）

大西さんに初めてお会いしたのは、確か昭和五～六年頃、東京柏中同窓会の席であった。大西さんは、将来の海戦には飛行機が最大の武器となり、今進められている大艦巨砲主義では時代遅れになることを力説されていた。当時、同氏は佐官級の意気盛んなる将校で、横須賀の追浜で実施されている飛行機の猛訓練の話に傾聴したことであった。

当時のわが海軍は、日露戦争における日本海海戦の大勝利の夢を追っていた。そして、海戦を左右するものは、訓練周到の戦艦は、一艦よく訓練劣る数艦に匹敵する、という東郷元帥の教訓を信じ込んでいたのである。

昭和五年のロンドン海軍軍縮会議で、米、英、日の戦艦保有比率を六・六・三に押さえられ、全権大使の若槻礼次郎さんと次席の財部彪さんがさんざんたたかれるという状況であった。

今から考えると、われらには想像もつかないことではあったが、大東亜戦争ぼっ発直後、すなわち、昭和十六年十二月十日、マレー半島東岸のクワンタン沖で、英国の誇る新鋭戦艦、プリンス・オブ・ウェイルスとその僚艦、レパルスを日本海軍航空隊が撃沈したことは軍事専門家である軍首脳部が考慮できることであった。それにもかかわらず、なお大和や武蔵の超大戦艦に固執していたずらに巨費と時日を費やし、しかもしかるべき戦果を挙げることなく敵のえじきになったことを思えば、いまさらせんなきことながら、この巨費と時日を航空母艦の建造に向けていたら戦局はどうなっていたであろうか。

その後、戦局やや不利になった昭和十八年六月、航空将校養成のため私が大倉土木在社中、江田島兵学校北郊に広大な土地を造成し、昭和十九年三月まで約二万坪の建物を第二兵学校校舎として建造せよとて、すでに人員物資が枯渇した中をさんざん苦労して完成させたことを想起すると、いかに当局の見通しが甘い泥縄式の対策であったか、いまさらながら大西中将が先見的見識の持主であったと敬服している次第である。

のらくろ会

西山敬次郎
衆議院議員（市島町）

阪神タイガースの熱烈な優勝にあやかろうという「寅」年にこれは又「戌」の話で恐縮ですが、わが「のらくろ会」をご紹介させて頂きます。事のおこりは十二年前の寅年昭和四十九年九月にさかのぼります。私がまだ公務員のころのことで、大阪通産局長を拝命して当時の中曽根通産大臣に赴任の挨拶をしましたら、大臣から「関西には仕事を離れてからも生涯おつきあいの出来る人が多いので、それを心掛けるように」とアドバイスされました。ところがそのころはオイルショック後の不況の最中で倒産対策に追いまくられる日が続きました。年末も押し

詰まったある夜、関西電力の小林庄一郎専務（現会長）、小松製作所の田村靖大阪工場長（現小松建設社長）とが集まった席で、たまたま三人が同じ戊年の生まれである事を知り、早速同年生の会合を持とうという事になり、年の明けるのを待ちかねて発起人が会合しました。三人の他には岸昌大阪府知事、能村龍太郎太陽工業会長、古市實特殊機化工業社長などでありました。ここで特筆すべき決定がなされたのであります。その一は会に会長をおかず、大正十一年生まれの者であれば何人といえども入会出来る。月一回十一日（ワンワンの日）に会合をもつという規約が出来た事、その二は古市君の発案によって会の名称を我々の少年時代のアイドルである「のらくろ会」とする事であります。これが全国的に反響を呼び、その後、東京、名古屋をはじめ地方の都市にも会が結成され、今日まで入会者は増加の一途をたどっているのであります。

私はその規約が簡潔であり、特に会長制を採用しない事がかえって永続する原因になっていると考えております。昭和五十年二月十一日の発会式には東京から田河水泡先生（写真）をお招きし、遠くブラジルから小野田寛郎君（彼も大正十一年生れです）がはせ参じてくれて盛大に催す事が出来ましたのがまだ昨日のように懐しく想起されます。昨今は漫画が街にあふれて、ともすれば人は字を読むよりも絵を見る事に慣れるといった風潮になっておりますが、私たちの少年時代は月一回出版される「少年倶楽部」の「のらくろ」を楽しみ、次の月が来るのを気長に待ったものでありました。その「のらくろ」が失敗したり、笑わせたりしながら昇進する姿を見ながら少年時代を過ごし、やがて青春時代を苛酷な軍務に投入され、敗戦の祖国をようやく今日の隆盛に建て直すための一翼を担わせてもらった同年生れの者が、月一回（年次大会は十一月十一日）会合をもつ楽しい会であります。そんな趣旨から、この会は政治にも商売にも利用しない純粋の親睦会として運用されております。

以上のような次第で、私は「のらくろ会」の生みの親といわれながらも雑用にとりまぎれて年に一～二回しか出席出来ません。家内からはよく「あなたは生むだけ生んでおいて他人様に育ててもらっている」と難詰されますが、会長はなくても古市君や能村君といった会運営の有能の士のおかげで会がますます隆盛に向っている事を感謝し、私も余裕の出来る限り会に奉仕する事を心に誓っております。

「人民中国」に載った二玄社

足立和巳（青垣町）

もう五年も前になってしまったが、一九八〇年の夏に、中国友好の旅に参加して北京・合肥・蘇州・上海に九日間を過し、中国本土に凄い魅力を感じて以来、北京で出版され日本語で書かれている中国の月刊総合雑誌「人民中国」を毎月購読し、ここ五年間、中国が近代化に向かってものすごく意欲的に取組んでいる姿を見て来たわけである。そしてヨーロッパの一部とシンガポール・香港しか知らない家内に、中国は度々訪ねたい国であり、今度行く時は一緒に行こうと話している昨今である。

「人民中国」の一九八五年（昭和六十年）十一月号に北京師範大学教授で中国書道家協会主席・啓功先生の「肩を並べて鑑賞できる日を待ちながら」という表題に「台北故宮博物院所蔵書画複製展を見て」という副題のある記事が載っていた。

現在台北故宮博物院に保存されている書画をはじめとする中国国宝級の夥しい美術品が、かつては北京故宮博物院にあったことは、世界中の多くの人達の知悉の事柄である。昨年七月、その台北の故宮にある書画の名作六十数点の複製品が、北京の故宮にお里帰りして大きな展示会が開かれたのである。

その記事は、懐旧、感謝、感想の三文からなっている。

啓功教授は懐旧の文の中で、五十年程前まだ学生であった氏が、それ等の書画のすばらしさに取りつかれて、毎月北京の故宮に通い続けた当時のこと、それによって得た鑑定眼、そういった自分の経験から、後継者育成には実物を見ながらの品評と議論が必要であること等が書かれている。

次いで書かれてあった「感謝と感想」の文についてはその一部を次に抜粋したい。

「私はまず日本の偉大な科学技術の発達に感謝しなければならない。もし、現代の進歩的な撮影、印刷などさまざまな技術がなければ、これ等の真に迫って生き生きとじた複製品はありえない。（中略）しかし、これまでに中国の古書画を複製したもので優れた作品はまだ見たことがない。中国の古書画を複製したものでは、わたしの見たところ、日本のこの方面の専門家の成果を推さざるを得ない。

日本で作った複製品を見ると、いずれも原寸・原色でその素材まで原物に等しく、巻物の装ていのレイアウトから書画の印刷効果への要求までいずれも申し分がなく、まさに『かゆい所に手が届く』ものである。（中略）

文物の『価値』から見れば、複製品は、何といっても原跡ではない。がその芸術効果から言えば、『真跡と同等だ』と言うべきである。（中略）**二玄社**は中国の古書画を複製して、それ

を千点万点とした。**二玄社**の方たちは、設計から研究、テスト、印刷、管理、経営など各方面で限りない労苦を払われた。どうして心から感謝せずにおられようか。また、かれらのこれらの貴重な成果は、日本の中華書店、中国国際図書貿易総公司と北京故宮博物院の協力によって、北京故宮博物院絵画館で展示され、北京にいる広範な芸術文物愛好者の目を楽しませた。これに対して、どうして心から感謝せずにおられようか。（中略）いま、**二玄社**は、海峡彼岸（台北故宮博物院）の一部の古書画の逸品を複製して、こちらの人びとの目を楽しませてくれた。みんなは、展覧を見たのち、お互の心情を語りあい、期せずして如何にしてこちらの逸品を向う岸（台湾）の同胞、同好者たちに見てもらうかを考えた。（中略）

わたしたちは、謙虚に進歩的な印刷技術を学びたいと願う。日本の**二玄社**から進歩的な技術を導入するか、またはこちらの古書・画の逸品を協力して複製して、できるだけ早く向う岸の肉親たちに見せよう。そしてさらに海峡両岸の書画の原作を共に展示するための条件を作ろう。さらに両岸の肉親たちが肩を並べて展示品を鑑賞する機会を作ろう。この機会はきっとあると確信する。そしてこの機会が実現したとき、みんなはきっと涙にくれて展示品をはっきりと見ることができないだろうと思う。」と結ばれている。

私は五年半読み続けて来た北京出版の中国総合雑誌の中で、まさか**二玄社**の名に出くわすとは思ってもいなかっただけに、一様の驚きではなかった。啓功教授の文を一度ならず二度、三度と繰返し読み、啓功教授の心と、その文を通して**二玄社**の複製事業のすばらしさと、その事業を先導した同社の社長であり関東氷上郷友会副会長でもある渡辺隆男君の偉大さを、今更ながら知った次第である。

渡辺君は私と同期で昭和二十年に旧制柏原中学校を卒業して上京、東海科学専門学校を出た彼は、当初出版会社の白水社に数年を過した後、弱冠二十四歳にして自ら**二玄社**を興し、書道・美術関係図書の出版社としては日本一の会社に築き上げ、併せて同社が出版している「カーグラフィック」という自動車雑誌も有名で、若者は言うに及ばず、専門家や車関係者の間でも、権威ある雑誌として高く評価されている。

その上彼を一層偉大に思うのは、前述の通り独立独歩の大成功者であるにも拘らず、相手の地位や年令にこだわることなく、だれとでも気安く語り合う彼の人柄である。

台北故宮博物院の国宝・門外不出の書画の数々を、二玄社の手で複製することが出来たのは、彼の人柄が台湾政府に格別信頼されたからであり、彼が台湾へ行くと、政府要人から国賓級扱いにされるまでになっていたからである。

「稔る程に　頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」とは、母に子供の頃聞かされ、常に脳裡の片隅にありながらなかなかそうはなれない人間

の性に、我ながら嫌気を感ずることさえある自分であるが、彼は民族を越えてでも、高い地位にある人にはそれなりに、またどんな人でも見下げたり、無視することなく、相手の人格を常におもんばかる心があり、そういうものが、啓功教授をして、印刷技術だけの問題でなく、中国と台湾の書画複製を通じての交流にまで思いを馳せさせたのだろうと思う次第である。

私の独断と偏見かも知れないが、啓功教授は、二玄社の渡辺社長に中国と台湾の書画複製を通じての橋渡しの協力依頼さえも心の隅に懐かれたのかも知れないと思う。そして私も何時の日かそうあってほしいという思いを懐いているのである。

〈蛇足〉

足立和巳君が、今度の山ざるに君のことを書くが、決して没にするなよ、といった。君も僕も山ざる編集者の一員なんだから、そういう手前ミソは止そうよといったのだが、足立君が書いてきたのがこの一文。文末で顔がホテるほどほめたたえられて降参！　編集者の権限でここ削るぞといったら、だめだという。そこで致しかたなく敢えて蛇足を記すこととした。

私が手がけた台北故宮の法書名画二百数十件の複製事業は、十余年前に着手してまだ五～六年はかかる大仕事になったのだが、そのいきさつは山ざる第12号にも書いたように、多くの先輩や郷友のご協力や激励があったればこそ出来た仕事である。

その印刷技術は東京印書館の下中直也氏（先代が篠山出身の下中弥三郎氏）が開発されたものである。またこの仕事を聞きつけた今は亡き山ざる誌の主幹・松山幸逸氏は、郷友常岡幹彦氏とともにわざわざ台北の仕事場に見えて、私を力づけてくださったものだった。その後、常岡さんは再度、植村章子さんや渡辺ひろ子さん、田中篤郎さん、郷里の両親や親戚連中までが台北に赴いて私の仕事を見、応援していただいたものである。仕事そのものにも、目に見えない人脈のきずなが綾なして、この事業を導いてくれたようである。そのあたりの人と人との関わりについては、いずれこの誌上でご報告したいと思う。

渡辺隆男

放屁論

梶原　清
大蔵政務次官・参議院議員（篠山町）

私は運輸省三十年在官中に沢山の異名（あだな）を頂載した。その一つが『足の梶原』。先日も共産党の小笠原貞子先生が「わざわざ来てくださらなくても電話をかけてくればいいのに…、先生は本当に足まめなお方ね」と。そこが『足の梶原』たるゆえんである。

『ミスター運鈍根』。ご存じのように運鈍根とは、事を成すには天運と鈍重な気質と根気強いことが肝要であるという趣旨の

ことわざ。私は航空局飛行場課長在任時、当時デッドロックに乗りあげていた大阪国際空港の用地買収、補償問題を解決するのに文字どおり辛酸をなめたが、そうした苦しいなかからこのことわざを見つけた。問題はいちばんうえの運。本来は天運だが、この字を「運ぶ」と理解して、どんなにつろうても一回よりも二回、二回よりも三回と足を運べと自分自身に言い聞かせている。足を運べば相手とも気心が通じ、相手の立場も理解できて歩み寄りも可能となる。そうして事が成る。この世のなかは足を運ばなければ事は運ばない。数年後、航空局飛行場部長のときに取り組んだ同空港へのエアバス（大型低騒音機）の乗り入れを実現させることができたのも、また、関西国際空港建設絶対反対一色であった周辺地域を駆けずり回って調査開始オーケーを取り付けることができたのも、すべてこの「運鈍根」を地でいったおかげであった。

昭和三十五年に運輸大臣秘書室から官房会計課の補佐官に移ったが、課長室から呼び出しがあって上着をひっかけながら駆けていく後ろ姿から『ゴールデンバット』。急いで駆け出して行くが、前に仰せつかった用件などを思い出して途中から引返してくる。「おい見てろよ。班長はいまに必ず引っ返してくるからな」と同僚がささやいているところへそそくさと帰ってくる。こうしてだれ言うとなく生まれていたあだ名が『バックさん』。課員八十名のなかで課長からお小言を頂載するのは決まって私だけ。他人の分まで叱られ、『避雷針』という有難くない綽名を頂載して同僚から重宝がられた。

この課長というのが元・参議院議員のKさんで、大変厳格なことで有名だが、放屁っぷりが実に見事であった。マージャンをやっているときでも、ケロッとした顔付きでプーとやられる。ずっと以前は、放屁と同時に気合いともつかず、わび言ともつかないせきばらいをされたものだが、そのうちにこのせきばらいもされなくなった。どう見ても、人前での放屁など「屁の河童」と心得ておられたらしい。そこへゆくと、私は我ながら気の毒なほどガスの放出に神経を使う。いまから二十五、六年前、胃かいようという診断で入院したが、開腹手術の結果は胃と肝臓とかが癒着してイカン状態にあったらしい。手術後幾日もおならが出ないで苦しんでいると、

「どうです？　まだガスは出ませんか」

「はい」

「なかなか頑固ですね。なるほどよく張っていますね。薬や注射もしたので間もなく出るとは思いますが…」

「先生、ガスが出ないというのは本当に辛いものですね」

「大体あなたの腸は動きが鈍いんです。手術のときもガスが大分たまっていましたよ。あなたの胃が変形しているのも、腸のガスが上に押し上げるからでしょうね」

「それじゃ、おならを我慢するのはよくないんですね」

「もちろんですよ。生理現象なんですから…」

翌朝、主治医が、ガスの出る静脈注射を打って下さった。すると、ものの五分もたたないのに腹が痛みだし、五十センチほどの、しかし恐ろしく弱々しいおならが二本スーッと大気中に出た。全く待望のおならであった。この静脈注射のうえにかん腸で追い打ちをかけて頂いたので、バケツに一杯ほどもおならが出たが、同時に私の目からは涙が流れ出た。私はこのとき初めて「屁一つ薬千服に向う」（向うは、相当するの意）ということわざの意味をしみじみと理解することができたわけであるが、その後、考えついた放屁のコツが大便所利用説である。尿意だけのときでも、つとめて御婦人なみに大便所を利用するのである。肛門を大気にさらしていると、二つや三つ必ず出る。その屁一つが薬千服に匹敵する。女性が男性より長命な原因の一つがこれではないか、とはあられもない私の想像である。

屁という字の尸は人体、比はガスの出る音を表したものらしい。この屁には値打ちのないもの、つまらぬものという意味もあるが、「嫁の屁は五臓六腑をかけめぐり」である。おならを我慢することは苦しく、絶対に身体によくない。屁などは「屁とも思わぬ」「屁の河童」では済まされないのである。

昔から「屁は笑草煙草は忘れ草」という。おならは笑いの種であるが、時にはとんでもないことを仕出かす。小さいころ母から聞いた話だが、村に嫁入りがあって近所の人が大勢見物に押しかけた。その村人の前で、三々九度の式の最中、お辞儀をした花嫁がプーッと一発やってしまった。出物はれ物所嫌わずだから仕方ないが、花嫁のすぐ側に付き添っていた妹が、「まァ姉さん」といったのが実に拙かった。翌朝、婚家の井戸の中から痛ましい溺死体となった花嫁が引上げられたのである。お辞儀をした拍子にとび出したただ一発のおならに花嫁がどれだけか心を痛めたことか。思いつめたあげく、閉ざされた地域社会から身を消すことを考えたに違いない。

拍子に飛び出した一発のおならに心を締めつけられ、死を覚悟するに到った花嫁の心中は、一体どんなであったろう。何年前のことか知らないが、私はこの花嫁の冥福を心から祈らずにはいられない。それにしても怪しからぬのは妹の言動である。真実、姉の尻からガスが出たのだから、「まァ姉さん」が間違ってはいないのだが、あたかも自分が落としたような振りをして何とかあいさつできなかったものか。

昔、屁負比久尼といって、人にやとわれて家の娘などに付添い、その娘がおならをして満座で恥をかくような時に、自分の失敗のように取りなす役の老女がいたが、妹がこの屁負比久尼の役をしておれば、姉を死に追いやらずにすんだかも知れない。

一プラス一は二ではなく、ときにはとん馬ぶりも発揮して、ゆとりのある明るい世の中にしていきたいものだと考えながら、屁でもない屁の話で、貴重な誌面をけがした次第である。

私の健康法

伴仲信次（春日町）

ことしは、天皇在位六十年の佳き年にあたります。ご在位六十年は、かいびやく以来のことと承りました。しかも、お元気な陛下のお姿を拝し、身をもって範を垂れたまうものと受け止め、お互いに健康に留意し、それぞれの職域で奉公すべきだ！と痛感する次第です。

そこでたいへんおこがましい次第ですが、前号の村上さんにならって、私の健康法?をご披露させていただきます。

私は、過去に大病をやったり、命の瀬戸際を何回かくぐり抜けて、ことしはさんじゅ（傘寿）を迎えることができました。幸い健康に恵まれ、自分で車をころがしてハードなスケジュールをこなし、時に好きな旅行やゴルフができるのは、自分なりの健康管理に努めている結果かと思っています。

まず、目が覚めると目薬を点眼し、その場で裸になって全身の摩擦からはじめて、真向法まがいのいろいろな運動（床上運動）をします。洗面と同時に水を飲んで胃を清掃?し、野菜ジュースを作って飲み、自己流の徒手体操（ラジオ体操まがい）を済ませ、シャツを着るまで一時間と少々を裸で過ごします。

以上の動作のうち、裸体操は戦前から続いており（寒中も裸）、生ジュースは、昭和三十七年以来家に居る限りは必ず作って飲み、摩擦と床上体操は、昭和四十五年以来旅行中も欠かさずに励行しています。

「人間萬事塞翁馬」とか、誰しも明日のことはわかりませんが、生きている限りは健康でありたい！　との念願は、年をとるほど強く感じます。幸いこれらの総合効果?　と朝晩手を合せる神仏の加護のお陰と信じ、仕事にまた社会へのお礼奉公に、更には趣味のゴルフ、旅行、謡曲なども楽しみながら悔いのない人生を過ごしたいものと念願している次第です。

目の健康については割合無関心の人が多いかと思いますが、私は建築家という商売柄、目に狂いがきてはいけないと思い、四十代の半ばごろから、毎朝、目が覚めると目薬をさす習慣です。わたしぐらいの年になると、いわゆる老人性白内障とかで視力が衰えるようですが、幸いにもわたしは、運転免許のための視力テストにもパスし、また、ゴルフボールの行方が見極められる程度の視力を保っています。

生ジュースについて、材料、レモン1、バナナ2、にんじん3～4、トマト1、ピーマンとりんご（いずれも中ぐらいのもの、各1個）、以上はベースとして年中変わらず、そのほかに季節のもの、例えばキャベツ、レタス、セロリ、白菜、大根葉、パセリ、ぶどう、かき、なし、みかん、桃、パイナップルの皮、

等々有り合わせのものをジューサーにかけた果汁に、米酢８０ｃｃ、植物油大さじ2、小麦のはいが添付のスプーン2、を加えてかき混ぜ、ほぼ５００ｃｃから７００ｃｃぐらいを飲みます。

家で寝起きする日は生ジュースを欠かさない。家内が材料を洗い、私が作るという分業でやっているのが長続きしている理由かと思っています。

ほかに、夜間、テレビを見ながら、三千回以上の竹踏みを習慣にしております。それから月一回は指圧をしてもらいます。三～四時間かけて凝りを徹底的にほぐすのです。これは、終戦以来励行しています。

わたしは、昭和五十二年に胆のうを手術しましたが、以後、月一回は医師の診察を請い、また年一度は精密検査を受けております。

なにごとにつけても、「良い」と信じたことは実行し、しかもそれを続けることが肝要です。識者からみればナンセンスと思われるようなことでも、「いわしの頭も信心から」で、ともかくやってみることです。やったり、やめたりでは効果は期待できないと思います。自分の健康は自分で守る、という信念のもとに、自分に妥協することなく、以上のようなことを今後も頑固に実行し続けようと期しております。

布施のこころ

堀井隆川
真照寺住職（山南町）

一般のご家庭では、「お布施」といった場合は、先祖のご法事を営まれた時に、僧侶に懇志を包んで納められる金銭の事が身近かに考えられる事でしょう。これは長い間に習慣となったもので、古くはお釈迦さまの時代の教団から始まっていると思われます。

教団に対する布施は、上はスダッタという長者が僧坊を建立して寄進した祇園精舎や、ビンビサラ王が宮殿内の塔寺を建てて、釈尊の髪、爪を奉安礼拝したという大きなものから、下は袈裟や寝具などの必需品、あるいは毎朝、托鉢（乞食ともいう）に出る比丘（坊さん）に食物を施すという身近かなものまで種々あります。しかし、比丘には三衣一鉢をもって足れりとし、厳密な規定があり、今も南方仏教の中に継承されています。

主として、我が国では近世になって寺檀制度ができてから、特定の寺院に所属してこれに布施をなす信徒（檀家）が、その所属の寺院を檀那寺と呼び、伽藍の維持や修復、宗団の興隆護持に金銭を直接支弁することが便利であることから、懇志という考え方が強まり、「お布施」という仕方が通常となったので

あろうと思います。

とくに、最近になり目立つようになったのは、「お経料」という言葉であります。この「料」というのは「はかる」ということで、物と財との比較、行動に対する反対給付ということであって、お経に対する代償とは考えられません。

なぜならば、お経とはお釈迦さまの説法を意味内容とするものであって、その教えのこころを法会（法要）という形に表わしていくものなのです。もしも「料」という言葉が考えられるとするならば、それはお経の長短や行数によって単価がつけられるということになります。しかし実際にはお経の長短を問わず、三宝を敬い利益の善因善果を示されるものであるから、法要の意義について、心から喜んで施す気持の表現でなければならないと思います。そのことが「喜捨」ということなのです。

今は亡き人と、その死者から恩恵や遺伝を受けて生き残った私共との間に、心と心の接点を見つけ、健康で先祖を敬うことができる「御蔭げ」を、皆に披露しなければなりません。「追善」「追薦」供養とか、「追福菩提」とかいう場合の、死者の苦を除き、冥福を祈るための善事を、後から追い行なってその功徳を助けるという意味を、真に行なうことだと思います。

仏教では「不請の法」という言葉があります。在家で法事を営むことも、墓参回向をすることも、今は亡き先祖の方々がそれを望んで請求するのではなく、後に残った人々が追憶、追慕の情で「今日はおかあさんの御命日」という懇ろな、温かい心で、香華、灯明、飯食を供えるのです。

無心に何の欲得もなく、「どうか仏さまの世界に入って安らかなことを」と願うまことの心が、自然に我が身の上にめぐりめぐりてかえってくることが「回向」ということであります。どんな法事でもお経文の最後には、僧侶が亡き人の仏徳を讃嘆し、その法事を行なった施主の趣旨や功徳が、みんなの上におよび、生かされるようにと「回向文」を読みあげるのはその為です。

自分に応じた誰にでも請求されないで行なう善事。「むさぼりの心」を離れてほどこしをすること。それを仏教では「布施のこころ」というのです。

布と施を別々にみてみますと、広くゆきわたり、又ゆきわたるようにほどこす。めぐむという事になります。布施はダーナ（梵語）という古語から出ており、日本では「檀那」とか「旦那」とかいわれるように、一家の主人（夫）の意に転用して今日使われていますが、財物を布施する「施主」をいうのであり また在家の方々に仏の法を布施しなければならないのが「檀那寺」ということになります。

（法輪　53・6・20掲載）

○　○

摩訶般若波羅蜜多心経の語訳

◉摩訶―大、広大無辺の意味。◉般若―智恵という意味。八正道の修行生活によって執着を去る時に現われる真実な智恵。◉波羅蜜多―一切の執着を越えて悟りの境地に到った状態で完成の状態を意味する。◉心経―心は心髄、経は常にかわらぬ意味。◉観自在菩薩―観音様、別名観世音菩薩。◉照見―あきらかに観察し、体解する。◉空―無実体性の意、すべてのものはそれ自身の中に絶対に変化しないような本性というものがないという意味で主体的な意味においては、煩悩を克服した者が無執着の境地をいう。空はこの認識と体験との一致した境地を意味している。

◉度―煩悩を克服し悟りの境地に到ること。◉苦厄―精神的肉体的な苦しみ悩み。◉舎利子―舎利弗ともいい、お釈迦様の弟子の中でも智恵が最もすぐれているといわれた人。◉色即是空―形あるものはそれ自身に不変の本性がなく、無常なものであるとの意味。◉諸法―一切万物ありとしあらゆるもののこと。◉空相―空の姿ということで、それ自身に永遠不変の本性のない姿ということである。

◉無所得―得るところがないという意味。つまりすべてのものはそれ自身に絶対の本性というものがないので、仮に一時的に得失があったとしてもそれは永遠的なものでも絶対的な得失でもないということ。◉菩提薩埵―菩薩ともいい、自ら悟りを求めて修業しつつ、悟りを求めている他の人の手助けをする人々、つまりこの永遠なるものを求めて永遠に努力する人のことを菩薩という。

◉罣礙―障害になるもの、気になるさしさわり。◉一切顚倒夢想―すべての思い違いや間違った考え、つまり絶対的な本性のないものをあるように思ったり、永遠でないものを永遠であると考えたり、無常なものを無常と知らぬこと。◉究境―見極わめ、到り極めること。◉三世諸仏―過去、現在、未来のすべての仏様。仏とは執着心を克服し、悟りを完成させた人のこと。その代表的な人がお釈迦様である。◉阿耨多羅三藐三菩提―無上正等覚とも無常正偏知ともいい、この上もないすばらしい悟りという意味である。

◉呪―呪文とか真言とかの意味で、真実な言葉ということ。◉大神呪―偉大な神の言葉。◉大明呪―大いなる悟りの真実な言葉。◉無上呪―この上もない真実な言葉。◉無等等呪―他に比較するもののない真実な言葉。◉羯諦羯諦―行きましょう、行きましょう。◉波羅羯諦―悟りをめざして行きましょう。波羅僧羯諦―みんな仲よく一緒に行きましょう。◉菩提娑婆呵―すばらしい悟りを成就するために。娑婆呵は菩薩呵とも薩婆訶とも書くが、この呪の部分は発音のみを漢字に写した音写文字の部分なので、漢字自体の意味とは無関係である。

細見綾子さんの句碑
青垣町高座神社に建つ

で〻虫が　桑で吹かるる　秋の風

俳人細見綾子さんの句碑が、細見さんの出身地、青垣町東芦田の高座神社境内に建てられた。六十年十一月二十四日の除幕式には俳誌「風」の同人、会員等三百五十人、氷上郡内の会員や関係者合せて約五百人が参加した。

「風」誌は全国に三千人の同人をもつ俳句雑誌で、主宰はご主人の沢木欣一東京芸大教授。句碑はその創刊四十周年記念に、門人たちが中心となって建立したもの。高座神社の境内は細見さんが幼いころよく遊んだ思い出の場所という。

細見さんは芦田小学校、旧制柏原高等女学校、日本女子大を出て俳句の道に入った。日本の風土、とくに丹波の風物を愛して多くの秀作を世に送った。文部大臣賞、蛇笏賞、茅舎賞等を受賞、五十六年には勲四等瑞宝賞を受けている。

この句は細見さんが二十歳代の作で、むろん丹波の情景を詠んだもの。詩人三好達治氏が激賞した一句という。

細見綾子さん談

昨年一年間、NHKの俳句教室の講師をして感じましたことは、北は北海道から南は沖縄まで幅広い階層の人々から多数の投句が寄せられたことです。私は、一人でも多くの人の句を選ぶよう努力しましたが、その選定にうれしい悲鳴をあげました。

現在は昔と違って、一部の風流人が俳句をたしなむのではなく、人々の生活基盤の中にとけ込んでおり、さざ波のような生き〳〵とした響きが感じられます。特に、投句者には女性が多く、とりわけ家庭の主婦が目覚めているという実感を覚えました。その学ぶ態度は熱心であり、心の拠りどころを希求し、自分達の考えを次の世代に引き継いで行きたいとの願望が伺えます。それも、生活に根ざした俳句が多いというところに特徴があります。

丹波、青垣での私の句碑の除幕式につきましては、丹波新聞や神戸新聞などで報じられている通り、五百人の関係者がご参集下さり盛大に祝っていたゞき感激しております。そこで感じましたことは、丹波にはいまなお日本の母なる姿が存在していたということです。日本の本当の良さが、丹波には今なお脈々と生きづいているという事実です。これは誠に貴重な財産であると思います。

▼細見さんの俳句雑誌「風」に投句を希望される方は左記へどうぞ。
〒180武蔵野市境南町五の八の七
「風」発行所宛
会費四二〇〇円（半年分）
〇四二二(31)五九五五

常岡幹彦氏個展

一月七日から十九日まで、銀座の東京セントラル絵画館で、常岡さんの日本画展が開かれた。四年前から東京セントラル絵画館での個展が恒例となったのは、氏の日本画を当館が見込んでバック・アップすることになったからである。

今年は一〇〇号の大作三点のほか三十余点が出品された。「刻々と変化する雨や雪の景色、ことに茫々縹緲とした霧の風景は、つかみどころがないだけに心ひかれます。一瞬見せてくれる自然の顔が心の深い部分でつながって、私の風景になればと念じております」常岡さんが案内状に書かれた挨拶文である。

初日のオープニング・パーティには、郷友がどっとつめかけてそれぞれ鑑賞したあと、二次会に繰り出して作品論評に花が咲く。どれがよかった?。みな異口同音に〝漂霧〟がいい、という。丹波大江山山麓、椿の古木と数本の孟宗竹を濃い霧が包む一〇〇号の大作。何度も克明な写生を繰り返したという労作である。丹波の霧にほのぼのと浮かぶ老木のくすんだ色とその重量感、孟宗の淡い彩り、深いしじまと清冽の気。これは絶品だ。今の日本画壇でこれだけ描ける人はいるかな? とか、この一作で文亀さんに並んだか、いや抜いたかな? 幹彦さんもいよいよ一流やなあ! とかと話がはずみ、この作品を山ざる17号の表紙にしようということになった次第。

個展の画はいずれも大和、丹波、丹後を旅して描かれたもの。次回は来年の十一月とか、やはり奈良や郷里の情景を描きつづけるという。

霧、霞、もや、雨、雪、花吹雪……、そんな白の恒間に見えつかくれつする田舎の風情と淡い彩り、その奥にひそむ重く、強く、清らかなもの。私たちの心の故里が、いつしか常岡さんの画風ともなって定着したようである。

（玄）

可部美智子さんの陶彫展

可部さんの陶芸展が、このところ毎年のように開かれている。今年も四月十八日から二十三日まで、小田急新宿店の工芸サロンで個展が開かれ、応援にかけつけた郷友たちの顔も見られた。

可部さんは神戸の生まれだが、戦時中柏原に育ち、柏原高校、甲南女子学園を出て、昭和四十一年、名古屋で陶芸を修

行、瀬戸、志野、信楽、丹波の焼きもの行脚の後、四十二年に上京、東久留米に窯を築いて「久美窯」と名づけ、自学自習の創作活動に入ったという。

日本陶彫会々員、陶光会委員で、第五回女流陶芸展で京都府知事賞、陶光会全国陶芸展で東京都知事賞をもらった。

可部さんは織部、黄瀬戸などの茶器や雑器もつくり、ときに前衛的な造形にも挑戦するが、写真のような陶彫人形をもっとも得意とする。四月の個展もこの陶彫人形が過半を占めていた。

この人形は信楽の土でつくり、ヘラで仕上げて焼きしめたもので、天平の乙女や童女など、題材を上代にとっている。楚々とした風情、あどけない表情など、女性ならではのユニークな表現がある。素焼の肌が土の香を漂わせ、狐色がかった焼味が素朴で美しく、見眺めて飽くことを知らない。机上に一つ置いて、ときおりホッと目を移したいような妙品である。ねがわくば、この陶彫ひとすじに精進されんことを。

（玄）

▼五月十九日～二十五日＝銀座アートホール・日本陶彫展に出品。

▼六月三十日～七月七日＝上野美術館・陶光会全国陶芸展に出品。

柏陵同窓会東京支部長に上山顕氏を選任

旧制柏原中学校、同高等女学校及び柏原高等学校卒業の関東、北陸、東北、北海道在住者で組織する柏陵同窓会東京支部では、有田喜一支部長急逝に伴ない、新たに上山顕氏（旧中二十一回卒）を選任しました。

去る四月二十二日に支部幹事会を開き、空席になった支部長の後任について意見交換、満場一致（二十一名出席）で上山氏が選ばれたものです。なお、副支部長には小林武治氏（旧中二十四回、国学院理事長）、秋元多美子氏（旧高女三十三回卒、旧姓佐野）の両氏を選任しました。

また、前任の副支部長梶浦浩二郎氏、植村章子氏には顧問に就任していただくことになりました。

そのほか、母校創立九十周年記年式典（六月十四日）の件、六十一年度総会（七月五日）の件、新幹事選任の件などについて討議が行われましたが、詳しいことにつきましては、総会席上にて発表いたしますので、総会には奮ってご参加ください。

同窓会に関するお問いあわせ、ご連絡などがありましたら、(293)二九六一（ダイレクト・メール・サービス内）坂上までお願いします。

卒業三十周年記念

同窓会に出席して

足立　敬子

丹波にはなかった明るい冬のひざしを浴びながら、今ごろは雪が散らついているかな、と、故郷を懐しく思い出しております。

昨年四月末、卒業三十周年記念同窓会が母校で開催されることになりました。

東京近辺に住む同窓生の七名（鶴田、出町、川勝、伊藤、宮、室井、足立）は一緒に帰ることにして、前日、車中でもミニ同窓会を開いて、にぎやかなこと、思いは同じ、明日の同窓会のこと、故郷のこと、友人たちの消息などを話し合うち、あっという間に故郷に着いてしまいました。

同窓会当日は、受付は十時からというのに早朝から柏原へ出かけて、二十数年ぶりに街を歩き回ったことでした。

「駅からはこの道筋を通ったんだわ」「アッ、ある、ある、このお店、店構えはあの時のままとはいえないけれど……木の根橋を渡って昔と変わらない八幡様への登り口を過ぎると懐しい母校が姿を現した。しかし、その姿はすっかり様変わりし、校庭も広くなり、通いなれた川沿いの通学路はなくなっていました。

旧友たちが続々と集まってくる。

年をとるのを忘れたような若々しい人、頭の白さの目立つ人、ずいぶん貫録のついた人、職業を顔に書いたような人。あれから三十年、さまざまな人生があったのだろう。

しかし、よくよくみると当時の顔があるのです。ドッと懐かしさが込み上げてきます。そこここで「卒業以来ね、お元気?」「今どちらにお住まい?」と、それぞれに思いを込めた同じような言葉が交わされてにぎやかなこと。いま振り返っても何を話したのか、全然覚えていないのです。この場所（高校時代に戻ったよう）に自分がいるのが不思議なような気持で、ボウッとしていたのでしょう。

ご臨席の葛谷先生や水谷先生の元気なお声が聞けてうれしいことでした。名前もお顔も思い出せない先生もいらして、自分は不まじめな生徒だったのかと反省しました。

円応教本部での懇親会では、三年時のクラスごとにテーブルについたのですが、どういうわけか、一年時のクラスの印象が鮮烈です。

二、三年時は選択科目が多く、クラス一緒に授業を受けたことが少なかったためか、あるいは、一年生というのは、柏高に入学したという張りつめた気持でいたからかもしれません。一年生の時に学んだ女学校の木造校舎がとても懐かしくしのばれます。

新緑の丹波は明るくさわやかで、久しぶりに聞く丹波弁が耳に快く共鳴しました。

こんな感動の機会を与えて下さった方々に感謝し、また会う日の来るのを楽

しみに元気に過ごしてまいります。
おかげで増えた年賀状をいとおしみつつ。

イッキに消えた三十年！

村上善美

昭和六十年三月、丹波にいる友人U男より次のような案内状が届いた。

「（前文略）、私たち五百二十余名が柏原高校を卒業して以来三十年が過ぎ、ローソクも五十本を立てる齢となりました。今年は大きく飛躍することを期待して「柏高第七回卒業三十年記念同窓会」を開催しますのでご出席下さい。「前日祭＝親善ゴルフコンペ四月二十七日（土）山南カントリークラブ　午前八時五十分集合、午後五時より表彰式。パーティー＝四月二十八日（日）柏原高校午前十時集合、懇親会＝円応教ホール十二時三十分より」

数年前、東京在住のM君が大阪での同期会に出席し大歓迎を受けて感激し、同級生たちに東西合同同期会を浜松辺りで開催すべく提案していたものが実ったのである。四十過ぎまでは、同窓会や郷友会に顔出ししなかった彼が、昭和五十六年の東京では初の同期会に出席し、その時の感動が彼の郷土愛に火をつけたらしい。会のマンネリ化に心を痛めていた丹波在住の同級生たちは、M君の企画に乗ってきた。

かくして、卒業三十周年に当たる昭和六十年を開催年と決め、郷里を中心に、関西・関東の各地に連絡員を置き、二年越しの綿密な準備の結果がこの案内状となった。

前日のゴルフコンペには参加できなかったが、あたかも丹波は春たけなわ、一木一草ことごとく懐かしい故郷のゴルフ場のプレイは、澄み切った大気に包まれて味わい深いものがあったことだろう。

昭和六十年四月二十八日（日）快晴。朝十時前から続々と母校の校門をくぐる中年の男女は、三十年前の木造の校舎からモダンな建物に様変りした様子にしばらく戸惑いの面持ち。やがてやや不安気に受付へ行って名簿と名札を受け取っている。

「いまどこにいるんや」「まんだいけっとったんか」「お互いとしとったなあ」。久しぶりのお国言葉で交わす言葉は決まっている。

三十年という年月は長かった。頭に白いものが混ざった中年の男女の顔にニキビだらけだった当時の顔が涙の中で重なり合う。互いに握り合った手と手が、まるで磁石のように離れない。昔の呼び名やニックネームで口々に相手の無事を喜ぶ。近況報告に熱中しているグループ。腕を組み昔の面影を求めて校舎や校庭を歩き回るグループ。

三十年の歳月はイッキにふっとんだ！「学園をしてうっそうたる大森林たらしめよ」と言われた、故後藤校長は、この立派に育ったかつての若木をみて何と評されるか。校庭に残っている大くすのきと古桜は、ニコニコと笑っているようだ。

誰がつくのか、八幡様の鐘の音が昔と変わらぬ響きをもって、我々の頭上を流れていった。

十一時半、二百余名は記念撮影後、三台のバスに分乗して第二の会場へ。

十二時半、山南町の円応教ホールには、卒業時の級別に十テーブルが同意されていた。別室には巨大な卒業写真が壁面を占めていた。

三十年前の自分の顔、友の顔を前に、今の姿と比らべ合う級友たち。

代表より開会の辞が述べられ、遠く九州・関東よりの参加を合わせて、卒業時の四割に当たる二百二十余名が参集したことが披露された。

次いで、先生方の入場である。その数十二人、広い会場をゆるがす拍手の中を着席された。恩師の表情には、教え子たちの大集団を前に驚きの色がみえる。

校歌斉唱。「霧の底より生み出ずる柏原高校　おお　母校」この校歌の作詩者、富田碎花、作曲者、山田耕作の両先生も、ホールいっぱいに響き渡る歌声が中年男女のものであり、その子供たちが高校生や大学生であるときかれればさぞかしびっくりされることだろう。

何十年振りかでうとうたワという人が多く、歌い終えてすがすがしかった。

恩師の紹介に続いて、卒業後に亡くなられた恩師六名、級友十二名に対し、黙とうしてごめい福を祈った。逐年、級友の数が減っていくことは避けられないだろう。しかし、次回も元気な顔で集まりたいとだれもが思ったことであろう。

静かな雰囲気で始まったパーティもアルコールが入るともういけない。なにしろ、親しい友垣であり、懐かしい恩師である。全くの無礼講と相なった。

「アンタ、ナニシトッチャンケ?」「どこにイットッテン?」何のはじらいもなく、本場丹波弁に混じってにわか丹波弁が飛び交う。三十年前の淡い恋を今ごろ打ち明けているオッサンやオバサン。昔のイジメをここぞとばかりお返ししているヤツ。恩師をとりまく人波。交錯するカメラのシャッター音。カラオケの音も二百余人の歓声にしばしばかき消される。恩師も老体にむち打って（失礼）大声を発し、カラオケまでご披露になる。「今まで数多くの同窓会に出席したが、こんな楽しくもあほな会は初めてや。生きていて良かった。先生みようりに尽きる」との最大級の賛辞を頂いた。

時間は冷酷である。散会の時刻である。幹事が閉会を告げた。「お名残惜しいでしょうが、今日の同窓会で英気を養い、明日からまたお互いに力いっぱい生きようじゃないか。次回は何年先になるか分らないが、皆、頑張りましょう」

こうして、三十周年記念同窓会は大盛況のうちに幕を閉じた。

企画から閉幕までお世話頂いた諸君に感謝しながら帰路についた。

近時、ふるさと祭り、ふるさと宅急便などの報道が目につく、これは単なる懐古趣味ではなさそうだ。高度成長が止ま

り、社会が落ちついてきた一時的現象としてとらえられるかもしれない。それは何か違うように思う。利害関係のみが優先した合理主義社会が、人々に人の道や人間の生き方を考え直させ、生き方の原点として、「ふるさと」が見直されてきているのではあるまいか。

関東地区では、郷友会、同窓会があり、毎年、ふる里の香り漂う総会が催されている。この「山ざる」も発行されている。

関東地方の皆さん！　老若を問わず、同郷の友人、知人を誘ってどしどし出席しようではないか。日常生活では味えない雰囲気のある会、明日への活力源となるような頼もしい会に育てていきたい。

関東氷上郷友会会則

（名　称）

第一条　本会は関東氷上郷友会と称する。

（目　的）

第二条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

（会　員）

第三条　本会は氷上郡出身者及び縁故者を会員とする。

（役　員）

第四条　本会に左の役員をおく。

名誉会長　一名　常任理事　若干名
顧　問　若干名　理　事　若干名内二名会計担当
会　長　一名　監　事　二名
副会長　若干名

（役員の任務）

第五条　会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは副会長の互選により一名がこれに当る。常任理事及び理事は会務を執行する。監事は会務及び会計を監査する。顧問は会長の諮問に応じ本会の発展を促進する。

（役員の選出）

第六条　会員及び役員は総会において選出する。顧問は理事会の推薦により委嘱する。

（役員の任期）

第七条　役員の任期は二年とし、重任を妨げない。

（役員の報酬）

第八条　本会の役員は総て名誉職とする。

第九条　会議は総会と理事会に分ける。総会は毎年一回一一月に開き必要に応じ臨時総会を開催す。理事会は会長、副会長、常任理事及び理事を以って構成し、必要に応じ会長が招集して開催する。

（会　費）

第一〇条　本会の会費は年額一〇〇〇円とする。別に必要に応じ理事会の決定による額を徴集することができる。

（寄附金）

第一一条　寄附金は理事会の承認により受納する。

（会計報告、会則の改正）

第一二条　本会の会計年度は毎年一〇月一日より翌年九月三〇日迄とし、会計報告は一一月の総会において行なう。本会則の改正は総会の議を経て決定する。

昭和60年11月2日

会　計　報　告　書

（昭和59年10月1日～昭和60年9月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・足立和巳

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	1,740,046	現金109,452円 定期預金1,072,643円 振替貯金547,951円 普通預金10,000円	出版費	1,058,540	"山ざる16号" 製作および発送代
年会費収入	475,000	延256名	通信・印刷費	15,660	寄付金領収証発送代他
総会費収入	0	特別会計処理	総会費	0	特別会計処理
役員会費収入	140,000	33名	長寿祝費	0	同上
寄付金	49,000	特別会計処理以外延9名	会議費	192,000	編集会議60,500円 役員会131,500円
広告料収入	811,000	延83名	慶弔費	50,000	堀川万次氏香典30,000円 春日建設ビル峻工生花20,000円
受取手数料	500,000	明治生命代理店手数料	支払手数料	24,260	郵便振替手数料
雑収入	59,409	預金利息	消耗品費他	274,002	会員名簿インプット料 88周年記念写真，アルバム代等
88周年特別会計収入	155,980		繰越金	2,315,973	現金27,922円 定期預金1,409,349円 振替貯金559,991円 普通預金318,711円
合計	3,930,435		合計	3,930,435	

囲碁同好会報告

六十年十一月から毎月第二土曜日を例会日と定めて、飯田橋のかすがホールに同好の士がつどい、熱心に囲碁を楽しんでいます。盤石は一応十面用意しました。まだ一度も全部使用するに至っておりません。気の合った同好者だけの貸し切り会場です。午後一時から五時まで毎月第二土曜日、お気軽にお出掛け下さい。初心者も歓迎します。一年間の戦跡は左記のとおり。お問い合せは電話二六四－四〇一一、春日建設㈱小日向まで。

昭和六十年度氷上囲碁会記録

	新島	足立正	坂上勝
5／18	2－3	6－1	2－6
9／14	4－2	6－2	0－4
11／9	―	3－3	0－5
12／14	1－3	3－3	―
1／11	―	4－2	3－3
2／8	―	2－2	1－2

（勝―負）

	藤田	前川義	勢川	坂上豊	松山	三沢	渡辺	足立源	黒田	小日向	増田	前川清	大野	神保	谷口	上小沢	永塚	瀬村	石川	坂口
藤田	3－5	3－5	2－3	3－2	5－0	0－2	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
前川義	2－6	4－2	4－1	―	3－1	―	2－3	1－4	1－2	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
勢川	2－6	6－0	―	―	―	4－1	―	―	0－2	2－2	0－2	1－2	2－2	3－1	3－0	―	―	―	―	―
坂上豊	2－4	3－2	―	―	―	―	―	2－1	―	4－2	2－3	―	―	0－4	―	1－3	4－2	2－0	―	―
松山	3－3	3－5	―	―	1－2	―	―	―	―	0－1	1－2	3－2	―	―	―	3－2	2－2	―	2－0	―
三沢	5－3	6－2	―	―	―	―	―	0－3	―	3－2	―	―	―	―	―	3－2	―	―	―	2－3

ゴルフ同好会報告

六十年度のゴルフ同好会の経過および今年の計画をご報告いたします。

会を重ねて満六年、開催回数にして計二十二回、これもひとえに会友の皆様のご協力と郷友諸先輩のご指導の賜と存じます。現在会員数は四十九名ですが、さらに広く同好の士を募り、本会を発展させるべく、近く計画書の発送準備を進めております。

同好の方でまだご入会でない方は、この機会にぜひご参加いただきますようご案内申しあげます。

昨年度の成績は左のとおりです。

第十九回　六〇・四・四　相武ＣＣ
一位　松下文雄　二位　安永孝
三位　田中篤郎　ＢＢ　渡辺貴美子

第二十回　六〇・六・四　河口湖ＣＣ
一位豊嶋幹雄　二位　安永孝

三位　渡辺隆男　BB　新町親則

第二十一回　六〇・九・一九　袖ヶ浦CC

一位　沢田みさを　二位橋爪忠

三位渡辺隆男　BB　足立正

第二十二回　六〇・十二・四　習志野CC

一位　足立謙悟　二位　小山元和

三位　村上宗裕　BB　藤田徹

寄付金

自昭和60・1・1
至昭和60・12・31

◉明治生命氷上会代理店手数料　五〇〇、〇〇〇円

◉秋山龍一殿　一〇、〇〇〇円

◉西山敬次郎殿　一〇、〇〇〇円

◉伴仲信次殿　一〇、〇〇〇円

◉橋爪　忠殿　一〇、〇〇〇円

◉竹村政雄殿　一〇、〇〇〇円

◉小西　保殿　一〇、〇〇〇円

◉田辺輝一郎殿　五、〇〇〇円

◉小林武治殿　五、〇〇〇円

◉吉田勇司殿　三、〇〇〇円

◉塩見五男殿　二、〇〇〇円

◉関　正治殿　二、〇〇〇円

合計　五七七、〇〇〇円

訃報

つつしんで御冥福を祈ります

有田喜一氏（氷上町）　60・2・10

荻野完二氏（山南町）　60・4・7

小寺富美子さん（小寺確郎氏夫人　青垣町）　60・4・13

小林　剛氏（市島町）

田辺輝一郎氏（柏原町）

中川四郎氏（柏原町）　60・5・9

長谷川美世子さん（旧姓高桑　柏原町）　60・9・7

藤原岩市氏（黒田庄町）　61・2・24

村上　豊氏（青垣町）　59・3・26

矢持七郎氏（春日町）　59・7・29

'85 丹波の動き

丹波新聞の見出しから

昭和六十年一月一日特集号

○対談　貝原俊民副知事・藤原三郎県議
新しい時代へ丹波の活性化、丹波の特性を生かした〝地域づくり〟を
南北縁の回廊と祭典・近畿自動車舞鶴線を軸に単なる経済道路でなく文化の交流する道に
○琴に生きる女性二人
広く愛される琴の音を　大岡照子さん（新箏社）
胸に残る師との出合い　菊華ゆりさん（琴笙（しょう）会）
○年のはじめに
「二人区・自民案に断固反対」佐々木良作氏　（衆議院議員・民社党委員長）
「生涯の政治課題、平和・軍縮・安全・しあわせ」中西一郎氏　（参議院議員）
「六十年代を丹波の時代に」西山敬次郎氏　（衆議院議員）
「国政と郷土のかけ橋に」谷洋一氏　（建設政務次官・衆議院議員）
「丹波の将来は開発と同時に自然を守るという考えで」田英夫氏（参議院議員）
「丹波のために渾身の努力」梶原清氏　（参議院議員）
「夢！丹波独立国論」藤原三郎氏　（県会議員）
「初春に想う」村上旭氏　（県会議員・環境保健常任委員長）

わが町三十歳

丹波十町のうち七町が、昭和六十年に満三十歳。二年後に三十歳の山南町、大同合併十周年の篠山町、合併せず町制を敷いた今田町を加えた十町三十年の歩み

柏原町　町西部へ急激な発展　幹線道整備が開発誘因　いちはやく上水道網　活気づく新井工業団地　秋に織田サミット歴史と文化の町づくりを目ざす

氷上町　氷上工業団地に期待　〝流通の基地卸売市場　内陸型の優良企業誘致を目ざす　庁舎公民館を核にコミュニティ作りに活用　民間の活力生かす広域道路整備も課題に

西紀町　教育施設などを充実　道路網の整備も着々と　課題は過疎からの脱却若者定着の町づくりへ

市島町　「愛育」を基本理念に　〝ソフト〟の時代に対応　農業立町を目指して町の活性化が課題に　丘陵開発に魅力整備進む「三ッ塚史跡」

丹南町　田園文化都市めざす教育施設の整備に重点　町の活力生む原動力　進む大型プロジェクト　都市近郊農業に期待若者定着の町づくりを

青垣町（町名由来＝新町名応募総数九〇八点のうち一票だけの青垣が採用され、合併に際して全く予想されなかった新町名という）　スポーツの町を誇る　〝人づ

くり〃を重点に水量豊かな広域水道〃定住〃へ峠改修促進〃自然条件〃を生かす　最大の課題は経済の活性化

今田町　教育施設整備に重点　懸案の国道三七二号バイパス　農業近代化に力こぶ　立杭焼中心の観光開発

春日町　〃拓工挑水〃が理念　全町に建設譜奏でる　近舞線開通に期待　観光農業など生かす　発掘進む七日市遺跡で古代人の生活解明

篠山町　基盤づくりの十年　道路、環境整備を推進　第二期工業団地の構想も　特産品を核に農業振興　観光篠山へ官民一体　息づく伝統と文化の町

山南町　〃二一世紀の町〃を研究　基盤も着実に整える　薬草の研究も始まる　花と縁の〃健康の町〃　広域行政も活発　に懸案の斉場建設も目途

政治・行政

○柏原職案まとめ　今春高卒者の就職ほぼ全員決定　地元企業へ四三%、電気関係産業は好調　（1・17）

○丹南町四月から丹波で三番目の指定金融機関制へ　（1・17）

○柏原町福鉄局へ陳情〃無人化〃へ予防線　国鉄柏原駅特急停車で利用増も　（1・20）

○丹波の各町新予算編成進む　交付税アップで〃活〃だが痛い補助減額　（1・24）

○春日町長・議長らが福鉄管理局をたずね黒井駅の現状維持を要望　（1・24）

○五九年中の火災発生は三二件、救急出動は四二件（多紀郡消防本部まとめ）　（2・14）

○市島町へワゴン車、日本テレビから町社会福祉協会にプレゼント　（2・17）

○県が新年度予算発表　今田町に田園学校建設　山南町には薬草試験地　（2・21）

○地方空港の先取りを！　農業基盤を生かす活性化を提言　市島町で住民会議開く　（2・21）

○やよい会（西山敬次郎代議士後援会婦人部）市島町支部は第一回支部総会開く　（2・24）

○市島町は若者の定着目指し結婚相談所開設　（3・3）

○氷上町が合併三十周年事業でヒノキ四、七〇〇本植樹、南小六年生も卒業記念に一人二本植える　（3・3）

○丹波各町一斉に予算町会開会　柏原町総額三七億、青垣町総額三二億、氷上町総額六六億、篠山町総額八六億、丹南町一般会計が三二億、西紀町総額二四億円　（3・10）

○近舞線開通に伴う〃丹波活性化〃の方向固まる、四つの拠点中心に各町の町づくりと連携　丹南町（ヘルシー・ゾーン）柏原町（リフレッシュ・フィールド）春日町（カルチャー・ゾーン）篠山町（グリン・シャワーランド）　（3・14）

○市島町は町嘱託員を無人化の市島駅へ配置　（3・14）

○春日町予算総額四一億五千万円、市島町予算総額三四億円、今田町予算総額十四億円　（3・14）
○市島町で三十周年記念行事　模疑町議会や式典、町内一周駅伝大会も　（3・28）
○市島町役場でコンピューター作動　窓口業務の利用から　（4・4）
○氷上町が町役場北側に公共施設用地を確保　将来に備え先行取得　（4・7）
○山南町ダブル選挙　木戸町長の三選決まる　新人届出ず無投票　町議選は一人超過の届け出　（4・18）
○山南町議会議員選挙で新議員十八人が決まる　（4・25）
○氷上郡の保育所十九か所で定員割れ依然好転の兆なく　（4・25）
○主要地方道福知山―青垣―津山間国道昇格促進協議会は六一年度認定めざし建設省などへ陳情　（5・12）
○「危険ため池」四五ヵ所防災パトロールを強化　篠山土地改良事務所まとめ　（5・30）
○氷上郡やよい会が柏原町古市場公民館で総会　（6・2）
○市島町議会くすぶる　議員定数十六人案も提案　調査特別委設け審議　（6・27）
○氷上郡五九年の人口動態　出生九二三人、死亡は七五六人、死因一位は脳血管疾患、婚因三九〇組、離婚四九組も　（7・25）
○県と丹波十町防災総合訓練　氷上町でヘリや軽飛行機も出動し本番さながらに緊迫　（7・28）
○来春の中・高卒者厳しい〝就職戦線〟に　就職希望者増えたが求人数は減少（柏原職安管内の企業の七月末集計）　（8・11）
○国立篠山病院の六一年度統廃合は回避今後も存続運動を展開　（8・18）
○西山敬次郎代議士後援会は二泊三日の日程で東京バス旅行（同代議士を励ます会）を計画　会費は二九、八〇〇円
○県選管有権者数まとめる　丹波は一一三人減る（昨年比）兵庫五区の選挙人名簿登録者数二四五、六〇九人（九月二日現在）　（9・8）
○柏原駅から八幡神社へ〝大通り〟若者の集まる町作り　駅周辺開発構想を答申　（9・22）
○春日町制三十周年記念行事　桂小金治が記念講演　県警音楽隊ドリル演奏も　（9・22）
○柏原町議会行政の適正へ一矢　議員縁故の企業を町の公共事業から締め出す　（9・29）
○柏原町の〝織田信長サミット〟武者行列で歓迎　町づくりの意見交換　（10・6）
○西紀町長選　新人森口氏（前助役）が当選　全域で手堅く得票　（10・24）
○三十周年に新たな誓い　氷上町、春日町で記念式典　（11・7）
○丹波の人口一一五、二四七人、増加の大きい柏原町、篠山町は減少傾向（国勢

調査による概数）　（12・15）
○公営住宅入礼で疑念（柏原町議会）　（12・19）
○市島町議会の定数減条例は「廃案」に　現状維持を継続　（12・26）
○県の〝二一世紀兵庫づくり〟で丹波は田園文化都市と位置付け　（12・29）
○柏原町長減給六ヶ月　入礼不祥事で処分　鈴木助役ついに退職　（12・29）

事業

○丹波地区評議会が「石生駅を守る会」を結成、無人化反対で活動　全戸署名を展開へ　（1・10）
○丹南大山下に町立体育館の建設用地を確保川代ダム周辺整備の一環（1・10）
○市島駅無人化に反対「市島駅を守る会」が役場前で決起集会　（1・17）
○篠山町門前通りの「中橋」朱塗り欄干橋に　（1・20）
○西紀町桜の名所復活へ　鼓峠公園化進める。　（1・20）
○福知山線電化用阿草トンネル別線ルートが開通　（1・27）
○氷上町成松の甲賀山公園整備事業に着手　（2・3）
○山南町大谷の篠山川世花橋二年計画で架け替え工事　（2・24）
○〝森林浴〟を楽しもう！　県造林緑化公社が神池寺境内に遊歩道　（2・24）
○新奥野々トンネル開通　福知山線電化用で四番目　（3・10）
○丹南町川代ダム上流につり橋一ノ瀬橋完成　（3・14）
○国鉄大阪工事局は藍本―草野間の新日出坂トンネル着工　三田市側から掘削　（3・28）
○西紀町遠方に本格的なキャンプ場　バンガロー二十棟も　（4・11）
○西紀町鼓峠の公園化が完成（4・18）
○近舞線大内トンネル工事完成　（5・5）
○県道本郷―篠山線多紀連山を縦断し舗装され様相一新　（5・9）
○竹田川の災害復旧工事　中山―広瀬間四・六キロが完成　（5・12）
○篠山町は国土庁の推進している「花と緑のモデル地区整備事業」の指定を受け四ヵ年計画でうるおいの町づくり　（5・16）
○今田町伝統工芸公園完成　（6・13）
○氷上工業団地の造成いよいよ着工へ　雇用創出に大きな期待、分譲予約も受付　（8・8）
○国鉄バス四路線廃止は通学の足奪うと篠山町が存続要望　（8・25）
○十二年ぶりに待望の朗報！　市島町に大学建設　神戸市の八代学院大学六一年開校を目指す、神学部設置が本決まり　（9・5）
○県道春日―栗柄線バイパス完成　（9・12）
○近舞線工事の宿舎跡地、資材置場再利用へ春日町と市島町で運動場や工場に　（9・15）
○一般国道四二七号大名草（青垣）バイ

バス供用開始　（10・6）
○柏原警察の新庁舎完成　（10・17）
○近舞線の丹南―福知山間は六二年三月に供用開始　（10・20）
○郡内一のサクラの名所にと県立柏原病院に苗木二百本を植樹　（12・19）
○はやくも「効果あり」凍結防ぐ特殊舗装、柏原土木が試験的にカヤカリ坂で施工したもの　（12・26）

教育・学校

○氷上郡教委は教職員異動要項つくる管外からの転入希望なんと八五人　（1・27）
○氷上・多紀五高校二月二五日一斉に卒業式一、一七六人が高校去る　（2・14）
○篠山中が卓球新人戦で県大会三位　（2・17）
○市島町竹田小学校で〝地域の伝統〟を継承　蔡さんの影響受けて、ゆとりの時間に俳句学習　（2・17）
○氷上農業高校が氷上高校に変更　開拓精神は生かす　（2・21）
○柏原中学校長吉竹忠雄氏死去　（3・3）
○氷上・多紀郡小・中学校教職員の異動、郡外との交流活発に　校長の顔ぶれ　余田和幸市島中校長、松川國男柏原中校長、前川勝山南中校長、藤本一明和田中校長、岸田久丹南中校長、足立昭次西小校長、吉田良彦和田小校長、谷垣勲南小校長、吉見秀夫中央小校長、足立昭保東小校長、竹安二三男小川小校長、梅垣努佐治小校長、足立善昭吉見小校長、荻野義昭三輪小校長、河津義幸鴨小校長、小前清一日置小校長、辻健一味間小校長、北村昌八上小校長、宮田龍雄村雲小校長　（3・31）
○氷上西高校長に桑村寛氏（西播磨教育事務所副所長から）植田憲雄氏鳴尾高校へ　（4・4）
○不退転の意志持て！柏原高校普通科生徒四五〇人入学　（4・11）
○柏原高校の進学状況　例年にない健闘ぶり関関同立に延べ八一人　（4・21）
○〝忍耐力を養おう！〟氷上西高校で全校三十キロ遠足　（5・5）
○五年連続優勝飾る　県高校総体女子バレーで氷上高校チーム　（6・12）
○柏原高校でにぎやかに文化祭！　華麗なバレエ公演も　（6・20）
○丹波地区五高校二分校の来春卒予定者の求職動向　地元就職希望は四八％　（6・30）
○氷上高校の丹波農業大学が開講　パソコンや料理講習　（7・4）
○柏原高校ではビデオで学校紹介　入学から卒業まで生徒の表情、行事を追う　（7・28）
○柏原高創立九十周年の節目に一層の友好をとケントメリディアン高校（姉妹提携校）と六一年夏ハワイで対面！　（9・8）
○柏原高校校訓制定〝進取創造〟〝質実剛健〟〝敬愛和協〟の三本柱　体育大会開会式で公表　（9・29）

○文化の香りを拓本に解説文つけキメ細かに柏原中の文芸クラブが町内の文学碑展示　（11・14）
○柏原高校に六一年春、理数コース設置今ひとつ薄い関心　（11・17）
○氷上・多紀両郡の公立高校募集定員六一年度は現状維持で　（12・26）

産業

○氷上町桟敷に井上電機（三菱電機北伊丹製作所の協力工場）が完成　時代の先端担う半導体・モジュールを生産　（1・10）
○グランド　カバー　プランツ（GCP＝地表面を低くち密におおう植物）の生産組合が多紀郡に発足し特産品に　（1・13）
○焼酎〝デカンショ〟多紀酒造が発売本場（九州・四国）と共同開発　（1・13）
○五九年産水稲作柄は史上最高　（1・27）
○高級和菓子の材料に良質の小豆栽培青垣町東芦田が転作で推進　（1・27）
○氷上町賀茂の芦田さん　間伐材を有効利用テーブルや床置き　都会の人に受ける　（2・10）
○市場に対応　丹波の広域共販野菜にレタスとグリンボールの新産地化を目指す　（2・17）
○氷上郡建築協会連四月から千円アップ標準賃金一万四千円　（2・28）
○県下の中小企業賃金の実態　丹波は神戸の八〇％、郡部と都市部では依然大きい格差、（県労働経済研究所調べ）　（3・3）
○西紀町では黒豆ジュース販売　工場を建設し大量生産　（3・3）
○市島町農協に共同育苗センター完成水稲三万箱を生産　（3・10）
○〝青垣サンザシ〟消費拡大に乗り出すPRに絵はがき作戦　（3・28）
○市島町上垣の日本スーパーケース（吉見貞吉社長）の〝移動ストア〟に人気中国、韓国からも引き合い　（4・7）
○市島町農協と千里生協が軟弱野菜栽培の契約調印、消費者が生産に着手　（4・11）
○市島町上牧の荻野寂（やすし）さん銅線をつなぐ特殊合金を独自の方法で国産化し、科学技術庁振興賞を受賞　（4・11）
○氷上町成松の街路灯を一新し、商店街のイメージアップと明るい街づくり　（4・11）
○氷上町農協役員改選で〝新風〟婦人総代二八人を選出しキメ細かい配意期待　（4・21）
○柏原農協の「ふる里丹波の四季」の阪神間の会員がどっと三五〇人　山菜摘みに〝緑〟を満喫　（5・2）
○十一月の兵庫・青垣もみじマラソンはスポーツ観光へイメージチェンジ　特産品を産地直販、予約注文も受け付け　（5・5）
○篠山町後川地区に〝さんしょうの里〟

将来は一万本栽培　（5・16）
○青垣町商工会の町観光開発市場分析結果まとまる、丹波の奥座敷を強調〃青垣八景〃を設定し、高源寺では禅カルチャー、岩屋山でハングライダー（5・19）
○柏原農林事務所は春日町と氷上町でヘリコプターによる緊急松くい虫防除、被害木一本一本に薬剤を噴射　（5・19）
○健康食ブームで人気上々　自然卵で〃卵黄油〃製造　春日町の河西さんと市島町の細見さん　（5・23）
○市島町鴨庄に金型加工の工場誘致　尼崎の長岡機械が進出　（6・2）
○柏原町農協〃四季の会員〃を招待　泥だらけもさわやか　田植えやいも植えに歓声　（6・6）
○篠山農業改良普及所は山の芋の品質向上へ篠山町に「原種ほ場」作る　（6・6）
○丹波木材協同組合が売り出しているサンデーハウス〃木のぬくもり〃が受けて全国から相次ぐ問い合わせ　（6・13）
○五九年度の丹波の観光客は一四三万人、大半は日帰り客（丹波県民局調べ）　（6・13）
○一億円野菜をめざす丹波農協のピーマン出荷始まる。　（6・16）
○篠山町後川でホウレンソウを出荷　主婦ら特産へ自信　（6・20）
○毛皮製品生産の五社地場産業振興へ協業化　新しい需要へ対応　（6・23）
○役場にキャシュコーナー！丹波で初、氷上農協が設置　（6・27）
○市島町農協雨の中で馬鈴署出荷　作柄は〃平年作〃　（7・11）
○春日町農協ブランド化めざし丹波スイートコーン生産者大会　（7・14）
○春日町のナス、スイートコーン高値だが出荷量減　梅雨の長雨が原因　（8・4）
○青垣町の紅アスター生産者が全農を通じ系統販売　情報をす早くとらえる　（8・4）
○柏原町石戸観光農園が予約制でオーブン　玉太りもよく甘味十分！丹波初のリンゴ園　（8・8）
○氷上町誘致のサカエニット三割減産や希望退職の合理化で乗り切り　消費伸び悩みも要因　（8・11）
○柏原町鴨野の上木富雄さんは注目の健康野菜栄養万点のモロヘイヤを栽培　将来は加工し商品化　（8・18）
○篠山町農協〃レタス〃を特産品に作付面積は倍増　（8・18）
○深刻になった水不足　氷上町、篠山町が対策本部を設置し農作物などに対応　（9・1）
○天を仰いで青息、吐息　柏原町の稲の干害三二ヘクタールに　（9・5）
○稲、薬草はピンチ　山南町も干ばつ対策本部設置　（9・8）
○クリ、ナシ出荷始まる　甘味十分だが小粒のナシ　安値だが今後に期待のクリ　（9・12）
○丹波マツタケ顔見せ！一キロ五万円の高値　篠山町農協大芋支所で（9・29）

○青垣町商工会と建築協会が最新の設備取り入れモデルハウスを建築（10・10）
○〝丹波しめじ〟を宅急便で　青垣町農協と生産組合が特産品の販路拡大（10・20）
○青垣商工祭にぎわう　ハングライダーに人気集中！バザーのど自慢も（10・24）
○今田町立杭で盛大に〝陶器まつり〟十三万人でにぎわう（10・24）
○本年産水稲作況指数一〇五で豊作（10・31）
○人気呼ぶ〝近舞高速を歩こう会〟一、三〇〇人が申込み　春日町商工会企画（11・10）
○多紀郡特産山の芋の収穫　形、品質まずまず（11・14）
○福鉄局が多田山トンネルを活用しキノコ栽培を計画　遊休地に新アイデア（11・24）
○〝丹波の黒豆〟粒と味で人気上昇（12・8）

社会・文化

○谷川駅「国鉄利用をよろしく」駅舎に大タコと羽子板が職員の手づくりで（1・10）
○氷上中の開田校長が「山川草木」を出版、丹但の草花や陸水生物など随筆風に（1・10）
○〝地蔵さん頼みます！〟と山南町の首切地蔵尊に受験生の参拝続々（1・13）
○篠山町出身の書家三宅剣龍氏（六七・練馬区石神井台）三十年ぶり郷土で個展（1・13）
○早慶柏陵会が発足　在学生中心にOBも入れて年二回開催（1・13）
○篠山町の青山会が四〇周年を記念して文化遺産を一般公開　藩主別邸跡に「振徳版木館」と古文書館」を設けて入館料は大人三百円、学生二百円、小人百円、二十人以上は団体として一人五十円割引き、休館水躍日（1・17）
○成松公民館が全焼　柏原署が不審火で捜査（1・17）
○拾いました計四五〇万円　篠山署の五九年中の拾得、遺失届のまとめ（1・17）
○高校生の検挙倍増　篠山署管内の五九年年間少年非行概況（1・20）
○山南町久下小学校昭和三十一年度の卒業生が厄除にバスケット台を寄贈（1・20）
○篠山ABCマラソン昨年上回る九千人の申し込み　全国屈指の大会に（1・24）
○山南町和田出身の広内さん文化遺産を見直して映画「ふるさとの仏像」を町へ寄贈（1・24）
○柏原厄除け大祭に前田尋（山南町和田出身）きり絵個展　丹波五十景中心に大作も（1・24）
○丹波初の二階バスがお目見え　氷上町の氷上観光バスが購入し二十五日オープン（1・27）
○春日町鹿場の松山保さん「氷上郡の

神々」を出版　郡内の全神社を調査し古文献とのかかわりを解明　（2・3）
○生活改善で実態調査　冠婚葬祭の簡素化を（篠山農業改善会）　（2・10）
○氷上町新郷上市場の千手観音三三年ぶりに御開帳　（2・17）
○雨にもめげず十万人　平穏に厄除け大祭　（2・21）
○「おさん茂兵衛」題材に氷上町琴笙会社中の小野千恵子さん作曲コンクールで佳作　（2・24）
○山南町谷川の首切り地蔵春の大祭　千人がお参り、合格祈願も相次いで　（2・28）
○篠山ＡＢＣマラソン　丹波路に八千人寒さ吹きとばし力走　（3・7）
○「栗の郷・丹波」出版　日本一の産地願って丹波グリを細かく解説、丹波栗振興連など　（3・10）
○市島町の西山酒造場は良質の丹波グリを原料に焼酎製造、味は高級（3・10）
○ネパールの子救おう！篠山小で古切手三四万枚集める　（3・10）
○多紀郡内女性ドライバーの事故急増三十代がほぼ半数　（3・14）
○「'85ミス氷上」が決まる　西田、久下、薮内さんの三人　氷上郡のＰＲよろしく　（3・24）
○市島町塩津峠に〃梅林公園〃ウメ苗九〇〇本を植樹　（3・28）
○山南町太田の慧日寺仏殿他十三件を県文化財（有形）に選ぶ　（3・28）
○氷上郡内の市外局番を「〇七九五」に統一市内局番が二ケタに　三日午後二時から　（3・31）
○青垣町沢野の照徳寺焼失以来二百年ぶりに客殿建築に着工　（4・4）
○春日少年柔道クラブが県大会で優勝、兵庫県代表で全国大会に出場する　（4・14）
○春日町黒井で「平和」の誓い新に氷上郡招魂祭　（4・18）
○春を彩る〃篠山春日能〃桜の下、華麗に演能　（4・18）
○〃ディスカバー氷上〃氷上町公民館が婦人対象に観光ガイド養成　（4・25）
○多紀連山の山開き　シーズン中の無事を祈って頂上でゴマ法要　（4・28）
○柏原町では赤ちゃんの健やかな成長祈り記念樹贈る　（4・28）
○柏高七回生二二五人が集い三十年ぶりに同窓会　（5・2）
○三四年ぶりに恩師と再会　青年教師の小田富士夫さん（東京在住）と旧沼貫第二小の卒業生　（5・9）
○篠山町上二階町で元禄「町中の定」など発見、近世城下町の町民生活の記録　（5・19）
○西紀町はシャクナゲを大切にと盗堀防止に山岳パトロール強化　（5・26）
○京都で「信長まつり」柏原町からも出席　（6・2）
○春日町三相園で〃機能回復〃用にと絵合せパズル開発、将来は老人工場建設も　（6・2）
○都会っ子に大もて！　丹波少年自然の

家は自然教室で田植実施　（6・6）
○氷上町横田の井上敏夫さんは横田古墳や条理制地域の移り変わりを一冊に「土の匂い」を出版　（6・6）
○由良琢郎さん（県立西脇高校教諭・日本ペンクラブ会員＝市島町梶原）新説を入れた自信作「伊勢物語講説上巻」を東京・明治書院から出版、嵯峨本の絵も初めて掲載　（6・9）
○大阪氷上郡友会が和やかに第三三回総会を開き会長に大森一雄さん（高石市在住・氷上町谷村出身）を選任（6・12）
○西紀町の草山温泉ホテルの建設進む別棟に大浴場も　（6・16）
○山南町文化財審議委員会は同町金屋の県指定文化財「十三塚」の国の指定申請　（6・20）
○春日町でマツタケ二キロを出荷　香りも品質も上々　今秋の作柄を占う？　（6・23）
○青垣町公民館は民芸「丹波布」を出版　歴史や技法を一冊に　（6・27）
○氷上高校の桃陵同窓会は郷土に若者の定着を！結婚紹介を同窓会事業にと〝めぐりあいの会〟を発足　（7・4）
○山南町石龕寺の重要文化財「仁王像」国内屈指の比類なき仏像彫刻として〝国宝〟に指定を申請　（7・4）
○西紀町小坂の箱塚古墳群から円筒埴輪が続々五十基、馬具、太刀、玉類も　（7・4）
○氷上町の山口朗仙住職（五〇）脱サラ、僧侶に転身しダルマ三まいの毎日　ユニークな焼物創作　（7・11）
○丹南町大山上で竪穴式住居跡二棟　奈良時代のカマド跡も　（7・25）
○柏原町新町の山下道夫さん〝ふるさと柏原〟を出版　文化遺産など四十余編　（8・1）
○青垣町市原で青年らが手作りした〝神楽みこし〟が完成し子らにプレゼント　佐治川祭りに登場　（8・4）
○篠山町郡家の多紀福祉事務所で各集落の古地図三百枚を発見　克明に田畑描く　（8・4）
○畜産から花の里へ！柏原町石戸の開拓四十年のむらづくり〝ムクゲの花道〟も　（8・8）
○青垣のふじれんグループのアイデア商法がヒット　身障者らに雇用の場をと墓地の掃除や管理　（8・18）
○春日建設株式会社（東京・飯田橋）は創業三五周年を記念して新社屋完成　（8・22）
○柏原町の姉妹都市アメリカ・ケント市は提携二十周年記念に〝柏原パーク〟を開園　（8・25）
○成松の愛宕祭りにぎやかにサンバパレード〝伝統〟に〝現代感覚〟も加わる　（8・25）
○柏原町の劇研・椎の実は移封の歴史をヒントに地域色濃い自作脚本、新町発足三十周年に花添える　（8・25）
○遠坂峠のふもとで深夜暴走、山に激突三人即死　（8・25）
○丹波の百歳老人は三人　最高は百三才

の太田さつさん　（9・1）
○〝面打ち〟の真価問う　篠山町北島の能面師後藤さん代表作二十点を出品し大阪で初の個展　（9・5）
○柏原町は〝安土へ歩こう会〟で信長の史跡見学　（9・12）
○春日町観音寺、庫裡が完成、十月末に落慶法要　（9・12）
○篠山春日社で〝丹波夜能〟（9・19）
○「FM柏原77」開局二ヵ月若者たちが番組制作　身近な話題取り上げる　（9・22）
○氷上町の中学校教諭・足立秀男さんは二十年かけて「ヒノキ庭園」を作る　回遊式で一般にも解放　（9・26）
○春日町七日市遺跡の規模は近畿でトップ級　旧石器時代の出土も　十五ヵ月ぶりに発掘調査終わる　（10・6）
○丹波立抗焼の正元直作さん「白丹波の魅力」を出版　茶陶の逸品を集大成　（10・6）
○〝丹波篠山猪（シシ）まつり〟供養を多紀郡旅館組合が城跡下で開催しボタン鍋をPR　（10・10）
○丹波「氷上郡志」（昭和二年刊）を復刻　郡内書店で取扱い上下巻で二万五千円　（10・13）
○春日町古河で初めてみこしが練る　青雲クラブが手作りで秋祭りに景気づけ　（10・13）
○ふるさとの秋を満喫　大阪氷上郡友会の郷土史跡、名所訪問バスツアー　（10・13）
○柏原町の竹内茂雄さんらが柏原藩の歴史を一望した物語風にビデオ作る　（10・17）
○〝ヨイサ、オイサ〟の裸祭り催される　青垣町今出の熊野神社で　（10・20）
○篠山沢田八幡社の奇祭　古式通りハモ祭り　（10・20）
○青春カムバック！八十歳のおばあさんも笑顔でダンス勉強、丹波文化会館で　（10・20）
○マツタケ食い荒らす〝犯人〟はシカ！　氷上町香良、市島町美和の鷹取山中心に　（10・24）
○磯尾さん親子、弟の関口さん三人揃って日展入選　昨年に続く喜び　（10・31）
○俳人細見綾子さんの句碑が高座神社境内に完成　除幕式には全国各地から同人らが出席　（11・3）
○青垣もみじの里健康マラソン　二、○五〇人のランナー交流、特産品即売人気　（11・7）
○柏原町大新屋で複合遺跡確認　古墳期から室町期竪穴住居跡も出土　（11・10）
○わんぱく時代を思い出して三八年ぶりに修学旅行　新井小（柏原町）二三年の卒業生　（11・14）
○兵庫県の今年度〝ともしびの賞〟が丹波は一人一団体が受賞　磯尾柏里さんの彫刻、今田町の住吉神社神舞会の「蛙おどり」　（11・14）
○お待たせ！ボタン鍋　狩猟解禁で篠山町内のシシ肉専門店で活気　（11・17）
○ふるさと文化賞三人展　竹クギの石塚

芳春さん藍染めの前川澄治さん桧皮ぶきの村上栄一さんの伝統職人三人を紹介　（11・17）

○自然豊かな丹波路です　乳牛が急行列車と衝突乳牛全身打撲で死亡　乗用車にイノシシ体当り車の被害約四十万円　（12・8）

○市島町戸坂地区の行者講　百年以上続く　お酒とモチの宿に分かれて飲んで歌って楽しく　（12・12）

○幻の大工道具「槍鉋」？　柏原の中井宏さん方で発見　大阪城の大工棟梁が先祖　（12・19）

○西紀町下板井の内場（ないば）山城跡で古墳時代前期の壺棺発見　高地性集落（弥生）や木棺墓群も築城は室町時代中期　（12・19）

○柏原町出身の常岡幹彦さんが大和、丹波、丹後の旅を題材に一月七日から東京・銀座で個展　百号の大作など三三点　（12・29）

お便り・短信

足立圭造氏・美代子さん　丹波を離れてもう十数年経ちました。郷友会を知りましたのは、つい先日で、もっと早く知っていれば……と残念ですが今年より入会させて頂きます。夫婦揃って丹波の山ざるでございます。どうぞよろしくお願い致します。　（60・2・16）

足立順次氏（氷上町）何時もお世話になります。ふる里をもつ者の親しさ、親子兄弟にも似て気がねのない交り。おゝせの通りであります。私の上京して以来多紀・氷上の大先輩に接して、色々とご指導、お力添えを受け、他の同輩に先んじて活動、成果をかち得たことを誇りに思い、今更郷友の有難さを感じ、郷友誌の尊さを嬉しく思い居ります。

『84丹波の動き』私共老輩にはこの記事は大変うれしいです。故郷の近況、歩み等々が知らされ、向上する故郷の姿が嬉しく目に浮かびます。（60・5・30）

岩曽豊明氏（旧姓細見・春日町）60・4・1付で大阪へ転勤しました。住所は神戸ですが単身赴任です。留守宅は従来通り東京都世田谷区野毛です。　（60・6・22）

植村章子さん（旧姓善積・春日町）立派に完成した「山ざる」届けて頂きまして有難うございました。編集の方々の御協力に感謝致します。郷友会の発展を切に祈ります。私事、昨年一年六ヶ月ぶりに退院しまして、日常生活に不自由なく過ごしておりますが、少し離れた処までの外出は控えております。廃人になったのと同じです。過ぎし日をなつかしんでいます。　（60・5・24）

片山日幹氏（春日町）往時を偲び山ざる誌を拝見、楽しみ居りますが、老体とて会合に出席出来ないこと申訳御座いません。　（60・5・20）

竹内　健氏（氷上町）山ざる第十六号有難うございました。小生新編集委員足立源治さんの旧友（柏中＝旧制＝で私が一年後輩）です。こんな立派な本が、また集いがあったナンテ、何十年も知りませんでした。呵々……

或る日、何の前ぶれもなしに「山ざる」十六号が届いた。「ハハーン、源ちゃんの厚意だナ」と先月、何年振りかにお逢いした先輩の顔が浮かんだ。

故郷（クニ）を出てから四十年、鬼界ヶ島の俊寛僧都じゃないけれど、丹波というクニからは、雀一羽も飛んで来なかった。爾来、花の都でクニのことを口にするのは、もっぱら自己紹介の席、誰にでも早わかりする「丹波篠山、山家の猿が～」の一節に限ったものだった。がこれは余談。ありとあらゆる美辞麗句で満艦飾の「山ざる」は真実か虚飾か？

（60・7・11）

蔦川てる代さん（旧姓須原・市島町）年ごとに山ざるの頁が増え内容も豊富になり、楽しみに拝見しております。これもみな皆様の御努力のたまものと思います。ますますの御発展を祈ります。

いつも会費を失礼してゴメンなさい。とり敢えず五千円送ります。

（60・7・10）

林田孝子さん（旧姓田・柏原町）昨年は二男の病気、七月には死去というようなことで、会費未納になっておりましたことをおわび申し上げます。

東田　実さん（山南町）私は一月末に心臓を患い、二月より会社も退職し自宅で静養致しておりました。どうやら病気も治った状態で、ぶらぶらその日をすごしております。今後ともよろしくお願い致します。

前田和秀氏（柏原町）母前田コタケ（旧姓竹安・柏原町大新屋出身）が五十九年六月より東京で一緒に生活しています。昭和五年より二十年まで日本橋に住んでいましたので、東京のことは知っていますが、八十才になり足腰が弱くなり出掛けることは不自由で、山ざるを読んでは懐かしがり、電話をかけて御迷惑をかけていると思いますがよろしくお願いします。

（60・5・23）

松下トシさん（旧姓西垣・山南町）毎号ふるさとを思い浮かべながら、なつかしく拝見しています。会誌を拝見して、丹波人の力強さを感じます。末長く郷友会の発展をお祈り申し上げます。又機会があれば同期の者達と出席させていたぐようにします。

（60・6・17）

村上益三氏　今回足立正様の紹介にて入会させて頂きました。但馬出身ですがよろしく願います。

（60・5・20）

若森敏郎氏（山南町）小生六月九日～七月十四日までフィリピンとインドに出張します。皆々様の御健闘を祈ります。

（60・6・6）

○

※今回の名簿に新規登録の方々にアンケートを出しましたところ、以下の方々からお便りをいただきました（係）

足立圭造氏・美代子さん（旧姓勢）
郷友会のことはつい最近知りまして、是非お仲間に入れていただくよう願っています。私共夫婦は共に氷上郡出身（圭造青垣町大名草、美代子氷上町石生）なもので、山ざるの発行を楽しみにしております。61・4・15

伊比敏郎氏（柏原町）
柏原町は私が小学校、中学校を過ごしたなつかしい思い出多い故郷です。
私は昭和八年一月一日生、柏原町屋敷町に住んでいました。現在動力炉核燃料事業団東海事業所に勤務中。趣味は囲碁です。61・4・12

猪川節子さん（旧姓後藤、柏原町）
ご連絡ありがとうございました。父の勤務の関係で高校三年間のみ柏原で過ごしましたので、皆さまとのおつき合いも浅いのですが、よろしくお願い申し上げます。61・4・12

上田令子さん（旧姓岡林、山南町和田）
結婚してこちらに出て来ましてからはや一年余り、未だに丹波弁で通しております。会誌を発行されるとのこと、首を長くして楽しみに待っております。61・4・16

荻野よ志江さん（旧姓高橋　丹南町）
一昨年亡くなりました主人と共に山形へ来て六十年を過し永住の地と致しました。
年を重ねるにつれ、丹波がなつかしく、つい電話に手が出ます。東京を中心に四人の子女が在住しておりますが、足が少し不自由なのと住みなれた山形がよく、三男夫婦と同居、何の不足もない生活をしております。交通も文化も現在はいずこも同じです。61・4・24

片岡クミ子さん（旧姓井上　市島町）
転勤で東京に来てから早いもので今年で十二年目になり、いつ関西に帰れるかと思いながらも東京での生活をエンジョイしているこのごろでございます。
二人の子供も大学生になり、これからは自分のために何かをしなければと思いつつ、家庭にとじこもっております。週一回の友達とのボーリングを楽しみにしているだけで趣味もなにもない平凡な主婦でございます。61・4・11

近藤さとみ（市島町）
私は現在東京に在住しておりますが今年六月いっぱいで寮を退寮し、八月（又は九月）からアメリカのカリフォルニア州立大学に留学する予定です（現在国際基督教大学在学中）帰国は翌昭和六十二年の五月（又は六月）ですので、貴会の一員としては一年ブランクができそうです。帰国後はおそらく東京に住むことになりそうです。その時はお仲間にお加えいただければ幸いです。61・4・12

田中一美さん（旧姓清水　山南町）
相模原に住むようになって十数年、こちらで郷里の方に会うことはほとんどありませんので（郷友会へのご案内を）なつかしく、うれしく拝見いたしました。私もお仲間に入れていただきたく、よろしくおねがい申し上げます。趣味といえ

るほどでもありませんが、気の合った仲間とテニスをしたり、読書サークルを続けています。61・4・12

田中芳子さん（旧姓門田　山南町梶）

この度は思いがけないお便りを頂戴致しまして誠に有難うございました。九拾年の歴史に輝く御会のことはじめて承り、その御発展を心から祝福申し上げております。そして暖かい丹波に生れ育ちながら、寒い国を永住の地としたのは私一人ではなかった。東北にも北海道にも同郷の方がいらしたことに気がついて、大変嬉しくまた力強く存じております。私こと、当時現役を引退し北支方面軍司令部兵事軍に陸軍文官として勤務しておりました田中の妻の身で、北京で終戦を迎えました。陛下の玉音を拝聴して泣いたあの日が悲しく思い出されるのでございます。

そして翌二十一年の三月末　主人は北支第一〇三大隊の指揮班長の大命をうけ、千三百名の軍属とその家族の命をおあずかりして、無事に山口県の仙崎に上陸皆様方をそれぞれの郷里にお見送り致しました。私は長女をおんぶし、長男の手をひき、主人を力にすることもできず、他の奥様方よりも大変な苦労をして帰って参りました。あれから四十年、その二人も今や四十路の人となり歳月の流れの早いことに驚いております。

あの物のなかった祖国、人々の心はすさみきっておりました。物資の豊かな北京から帰った私は、その余りの姿に驚き、衣食足りて礼節を知ると、しみじみ感じたものでございました。平和で豊かな誠に結構な世の中となりましたが、当時を思いおこし激動する戦後を生きぬいた自分をふりかえり、全く感慨無量のものがございます。

おかげで今は四組の子供と十一人の孫達の幸せを祈りつつ静かな二人暮し、名実ともにすっかりよいおばあさんになりまして、孫達の訪れを楽しみに心豊かな毎日を送らせて頂きまして、勿体ないことと感謝致しております。遠く北の国に住みつきまして四十年、折にふれ、事に当って思い出されるのは、なつかしい丹波の山河、和田小学校や柏原女学校のお友達、又愛するきようだい達のことでございます。

此所は八戸市の隣でございまして、メインストリートまでバスで三十分、病院、買物などすべて八戸市に参っておりますが、その八戸市にもひょっとしたら丹波御出身の方がいらっしやるかもわからない、もしそうだったらおめにかかることが出来るかもわからないと、こんな夢を抱いて会誌を見せて頂けます日を楽しみに致しております。

御会の益々の御発展をお祈り申し上げて一言御挨拶とさせて頂きます。61・4・16

田野　均氏（氷上町朝阪）

陸上自衛隊中央音楽隊に在籍。国賓を迎える迎賓館の儀仗や都内及び全国巡回の演奏旅行等を職としております。趣味

が亢じて職業となりましたので、新たな趣味を探すべく努力しております。61・4・14

田路美幸氏（旧姓北山　春日町野上野）

先日は思いがけずお便りを頂き、おどろきと共に何年ぶりかの恋人からの便りのようにうれしく思いました。

広々とした関東に来まして六年目です。すっかり住みなれましたが、やっぱり時々丹波の山、もうそろそろワラビが出る頃かと思いをはせております。61・4・18

山下亮介氏（氷上町）

この関東に来てから早いもので十年になろうとしています。現在千葉市の教育委員会に勤務して主に文化財の仕事に従事しております。郷里（氷上町）にはなかなか帰ることもできません。

今まで同郷の人が身近かにいるなどと思いもかけず日々を送っておりましたがおたよりをいただき、私にとって力強いはげましとなりました。61・4・21

名簿係から

本誌名簿欄はご覧の通り大増員となりました。これは柏陵同窓会九十周年に発行された同会名簿、氷上西高等学校創立十周年記念の同校同窓会名簿及び桃陵同窓会（氷上高等学校＝旧氷上農業高等学校）名簿などから関東以北在住の方々をピック・アップ、新たに加えた結果でございます。これで名簿収録人員は千五百名を超えることになりますが、お気付きのように、大勢の方々のご出身町、旧姓、生年、職業、趣味などが判明しておりません。これでは、いまひとつ旧交新交をあたためるに不足のところがございますので、まことにお手数ながら、右のような属性記載のない方は、どうか本会までご連絡いただきますようお願い申し上げます。人数が増えますと必然的に同姓同名のお方も多くなりますので、判別を容易にするためにも、ぜひご協力を重ねてお願い致します。

なお、今回新規に名簿へ記載する方々につきましては、お名前ご住所などを念のため確認する意味と本会の紹介を兼ねた、簡略なお便りを差し上げましたが、思いもかけず、多くのご返信を頂戴し、係冥利に尽きる感慨がございました。厚くお礼申し上げます。

そのご返信の一部を、お便り短信欄に掲載させていただきました。悪しからずご諒承のほど。

（坂上記）

桂建築綜合研究所
一級建築士事務所

感性の時代、感覚が優先する時代に、住いも、商店も、ソフトな、心にうったえるデザインが要求されています。

丈夫さを求めたハードの時代よりも、自分の居住空間を快適にすることが、生活を楽しく、心を豊かにしてくれます。

経済的なノウハウを駆使して、美しいモダンな空間をデザインする
それが弊社の願いです。

株式会社桂工務店

最近は職人の手間が高騰し、予算をオーバーします。造作は能率的に省力化をはかることがコストダウンになります。

弊社は施工技術を練磨して、高効率、迅速、確実をモットーに、厳選したノウハウによって施工を行います。

株式会社 商店建築社

商業施設は市民文化の支えとして、各都市でイノベーションされています。弊社は月刊誌商店建築の外、臨増、別冊等を編集し、全国に発売しています。

有限会社桂研究所

商業施設の立地、経営等で相談がふえています。
コンサルタントを業とする会社です。

東京都世田谷区南鳥山２－33－11
村　上　末　吉
ＴＥＬ－308－8820
（春日町中山出身）

建築材料販売工事

建設大臣許可 第1834号

中央建材工業株式会社

取締役
東京支店長　**荻野　武**

（市島町出身）

本　　社　名古屋市千種区高見1－6－1
電話　052（761）6181（代表）

東京支店　東京都中央区銀座7－14－3
電話　03（543）8106（代表）

大阪営業所　大阪市西区江戸堀1－8－15
電話　06（443）6665

仙台出張所　仙台市高松2－11－15
電話　0222（73）5724

札幌出張所　札幌市中央区南一条西7－12
電話　011（271）3961

新潟出張所　新潟市米山5－1－25
電話　0252（45）1705

松本出張所　松本市渚1－1－42
電話　0263（25）0351

広島出張所　広島市西区中広町1－4－16
電話　082（291）3780

◆エレクトロニクスパーツの専門商社◆

株式会社 三　誠

東京都文京区湯島2-24-13　(834) 3171（代表）

取締役社長　足立　誠一

☆主要取扱メーカー

日本航空電子工業株式会社

多治見無線電機株式会社

株式会社フジソク

日本開閉器工業株式会社

ライン精機株式会社

本多通信工業株式会社

Sonnenschein

Slider® BASEBALL UNIFORMS

あらゆるスポーツウェアーのご相談は当社へ

Onaji Mai Mai®

園児服・園児用品

スクールウェアー・スクールブラウス

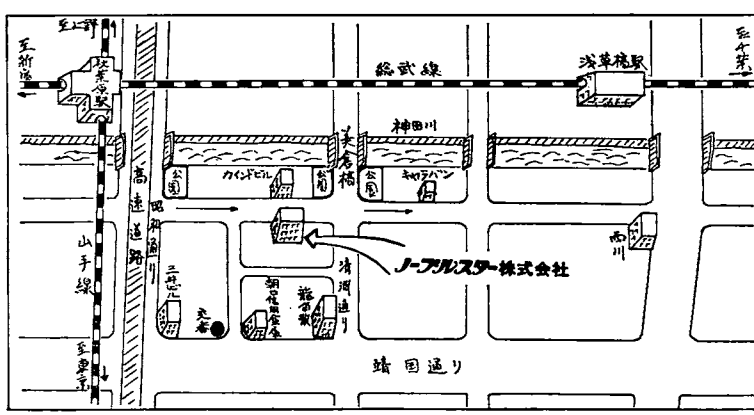
Noble ノーブルスター株式会社

取締役社長　吉　住　重　造

（春日町中山出身）

本社　〒101　東京都千代田区東神田 2—4—7

電話　03（866）9121（代表）



交通事故

もし、あなたが加害者だったら……

AIUの自家用自動車保険

貴方の財産を守る
火災保険から

万一の災害・病気に備えて
生命保険まで

あらゆる保険について　お気軽に　ご相談ください

代理店 永愛友商事 代表者 KK前田和市

〒107 東京都港区赤坂3－1－2 AIUビル電話585-0740(代)

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に

明日香園の健康銘茶を！

《明日香園のオリジナルブランド》

ウーロン茶の缶ドリンクがただいま大好評です

各種御注文は本社工場にて直接承っております

よろしく御用命下さいませ

創業明治四年

伝 統 銘 茶

株式会社 明日香園

代表取締役社長 池畑豪士郎

本 社

東京都千代田区九段北2-3-2 TEL(03)265—2579

本社工場(御注文承り先)

兵庫県氷上郡柏原町南多田3146 TEL(0795)72—3588

直販店

西武百貨店池袋本店B1 TEL(03)981-0111(内線)2044

学校法人国学院大学理事長
国学院高等学校々長
学校法人国学院大学幼児教育専門学校々長
財団法人日本私立大学連盟理事
財団法人私学研修福祉会理事

小　林　武　治

東京都武蔵野市境南町一―三〇―二〇
電　話　〇四二二(三一)四七九六番

株式会社　つるや洋装店
株式会社　東逗子駅前ビル
東　海　産　商　株式会社

代表取締役　小　谷　正　己

逗子市逗子 1―6―4
電話　0468. 71. 3075
71. 6449

調布市社会福祉協議会理事
調布市豊かな老後のための市民会議実行委員
老人問題研究所

木村　つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2—39—5

電話 東京（300）1505番

のびのびベビー・こどものファッション白樺

株式会社

本　　社　〒158 東京都世田谷区瀬田1-22-19
TEL 03-700-3121代表

代表取締役　山本清士

高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

取締役社長　足　立　三　治

東 京 店　品川区西五反田７－22－17
東京卸売りセンター12階
電 話　(03) 494－3285～7

本　　社　川崎市中原区新丸子 701
電 話　(044) 722－6371（代表）
社長室直通 711－3324

南海工業株式会社

社　長　石　亀　義　明

本　　社：東大阪市大蓮東２－12－４
ＪＩＳ工場：電話　06(721)5454／5455
柏原工場：氷上郡柏原町挙田小字浅川160-1
電話　07957（２)3744

株式会社　近藤写真製版所

取締役社長　近　藤　勇　夫
（国領出身）

東京都新宿区下宮比町8番地
電　話（260）6281番（代表）

株式会社　三葉水道

代表取締役　橋　爪　　忠
（氷上町黒田）

千葉県八千代市八千代台西 7—5—29
電話　0474—84—7121番

郷友の皆様　生命保険に加入されるなら
ぜひ当会をご利用ください

明治生命保険相互会社 代理店

ひ か み 会

代表 伴 仲 信 次

東京都千代田区飯田橋2丁目9番　春日建設(株)内
電話・東京 264—4011(代)

昭和還暦60年。激動の歴史とともに
自分の歴史をメモってみる。

記入式 私の昭和史 B5判 160頁

●記入しやすい横書き ●自分史づくりに最適 ●定価1,300円(送料250円)

《自分の歴史》を書いてみませんか。

人生記録
共著シリーズ 私の歩んだ道

自費出版を安い費用で豪華愛蔵本に●案内書進呈

株式会社 ホンゴー出版 東京都中央区日本橋茅場町3-3-4坪井ビル
〒103 TEL 03(666)1922(代表)

日本メキシコ協会会長
日本バレーボール協会会長
アジアバレーボール連盟名誉会長
国際バレーボール連盟副会長
日商岩井株式会社相談役

西川政一

(住) 東京都杉並区善福寺二ノ三五ノ一六
電話 (三九〇) 一三一六番
(寓) 静岡県伊豆高原
電話 〇五五七—五三—二五六〇番

東急建設株式会社
専務取締役 芦田重秋
〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号
渋谷地下鉄ビル内
電話東京〇三(四〇六)五一一一(大代表)

ギーゼル機器のカーエアコンは国内はもちろん、
世界に気持のよい風を送っています。
お子様の学力向上には公文式の算数・国語教室で

足立和巳
自宅 府中市栄町一—一五—二七
電話 (〇四二三) 六四—七二二七

ミワ電気工事株式会社
代表取締役 足立謙悟
〒220 横浜市西区岡野一丁目八番地八号
電話 〇四五(三一二)五二九一番(代表)

川汽企業株式会社

足立勲平

勤務先　東京都港区西新橋虎ノ門高木ビル
電話（五〇四）二三八一
自宅　藤沢市鵠沼藤谷一―七―四
電話〇四六六（二二）六四六一

交通毎日新聞編集部

次長　足立静雄

東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一（白亜ビル）
電話　六四二―三四一四番　〒107
札幌・仙台・高崎・横浜・名古屋
大阪・広島・岡山・高松・福岡

明治生命保険相互会社
認定生命保険士

足立正

事務所（〇三）―六六三―四二三一～五
自宅（〇四二七）―二六―八一四九

トーヨーサッシ株式会社

取締役　足立徹

相談役

〒100　東京都千代田区内幸町二丁目二番二号
電話〇三（五九一）三三八八番（大代表）
電話〇三（五九一）三六三三番（直通）

弁理士　芦田坦

事務所　芦田後藤池田特許事務所
東京都港区西新橋一ノ四ノ一〇
第三森ビル（郵便番号一〇五）
電話東京（03）五九一―一五〇七・一五一三

綾木健

新明和工業株式会社
常務取締役 生田清弘
〒100 東京都千代田区大手町二丁目六番一号
朝日東海ビル十八階
電話（〇三）二四二—二四四一（代）
テレックス二二二二—五一九〇

有限会社井上商店
社長 井上和三
三鷹市深大寺三八〇六
電話 〇四二二—三二—三四八八

植木紙工所
代表者 植木一夫
東京都文京区白山三丁目一ノ十三
電話（八一一）八五七三番

小田富士夫

日製産業株式会社
取締役社長 大木正徳
〒105 東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話（〇三）五〇四—七一一一番

パイオニア株式会社
人事部人材開発課
課長 大西修三
本社 153 東京都目黒区目黒一丁目四番一号
電話 〇三（494）一一一一番（大代表）

埼玉日産モーター株式会社
取締役社長　大西俊治
本社　与野市上落合九三五番地
電話〇四八八(59)五一〇三番(代表)

(株)パンオーディオシステム
代表取締役　岡林逸男
〒330　大宮市盆栽町五一四(押田ビル)
TEL(〇四八六)六五—三六九四(代表)
〒167　東京都杉並区善福寺四—八—一九
TEL(〇三)三九四—六八四四

株式会社大丸東京店
営業特販部
課長　荻野泰次
〒100　東京都千代田区丸の内一丁目九番一号
電話　大代表03—二二二—八〇一一番
内線二八四〇・二八四一番
直通03—二七一—三〇二五番

丹波興産株式会社
代表取締役　柿原陽
〒150　東京都渋谷区桜丘町三十一番十五号
住友生命渋谷ビル
電話(03)四六四—一七七一番(代表)

参議院議員
梶原清

同和火災海上保険株式会社新宿支店
支店長　神田敏博
東京都新宿区歌舞伎町一丁目一番一五号
〒一六〇　(東信同和ビル)
電話(〇三)二〇九—七六〇一番

文芸局担当部長（吉川英治全集担当）

小杉仙生

株式会社講談社文芸局
〒112 東京都文京区音羽二―一二―二一
電話東京〇三（九四五）大代表一一一一

日本学士院会員
理学博士 小谷正雄

自宅 東京都大田区山王三ノ三六ノ四
電話東京（七七一）六六五二

D・M・S ダイレクト・メール・サービス株式会社
取締役
業務推進本部長 坂上勝朗

本社 〒101 東京都千代田区神田小川町一ノ十一
電話 東京（293）二九六一番（代表）

静岡大学教授

坂本重雄

自宅 静岡市小鹿三丁目四―五（〒四二二）
公務員住宅八―二六
電話 〇五四二（八二）八〇五八番

銀座店のご案内

丹波ささ山
山家のお酒

さささ

ぎんざ6―2第13金井ビル2F
電話（五七一）四四二三

須原清

東京都中野区南台五の三〇の六
電話（三八一）一六二一番

勢川武彦

〒164 中野区東中野二ノ一七ノ二〇
TEL 三六一—八六七六番

田中篤郎

大菱印刷有限会社

田中寛

〒101 東京都千代田区神田東松下町十
電話（二五六）九三五七番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話（九五六）〇六〇〇番

高見歯科

高見幸男

〒176 練馬区錦町二—八—三
電話 九三三—六七三一番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一—二四—一七
電話（三三一）一〇七六番

株式会社　環境計画コーオペレーション
取締役　谷口　捷
〒150 東京都渋谷区道玄坂一―一五―一七
プリメーラ道玄坂ビル八〇四
TEL（〇三）四七六―一〇四〇

江南ハウジング株式会社
常務取締役
営業本部長　千種倫幸
〒102 東京都千代田区麹町五丁目七番地
紀尾井町TBR七一二号
電話 代表（二一三〇）三六三一

常岡幹彦

参議院議員
田英夫

東亜国内航空株式会社
整備本部 装備工場
次長　豊島幹雄
〒144 東京都大田区羽田空港一丁目七番一号
空港施設第二綜合ビル
電話 〇三（七四七）六九七五番
座席予約受付（七四七）八一一一番（代）

中井良平
〒100 千代田区有楽町一―一―二
三井日比谷ビル9F
電話（〇三）五〇一―六一一一（代）

ザ・カード株式会社
取締役社長　西尾久之
郵便番号一〇四
東京都中央区銀座二丁目四番一号
銀楽ビル七階
電話東京(03)(561)八〇〇二番(代表)

日本舞踊教授
西崎祥
〒223 横浜市港北区大棚町五〇〇—八
電話(〇四五)五九一—六六五五
西崎祥舞踊研究所　電話七八一—八六〇三

衆議院議員
西山敬次郎

日本行政書士政治連盟　常任幹事・会計責任者
東京行政書士政治連盟　幹事長
東京都行政書士会　副会長
行政書士　畑光
事務所　東京都港区虎ノ門五丁目八番八号
第三文成ビル三〇二号・電話(〇三)四三七—五六七〇番
自宅　東京都練馬区土支田一丁目五番一九号
電話(〇三)九二一五—八七七〇番

黒川木徳証券株式会社
畑秀夫
本社　東京都中央区日本橋一—一六—三
電話　東京(〇三)二七八—七八四六番

波多洋三
文京区春日二—一七—二
電話(〇三)八一一—二八六〇番

青木末吉
割烹 青木
〒542 大阪市南区畳屋町二四清流会館二階
電話（〇六）二一一—四七八二番

藤田正雄
自宅 〒215 川崎市麻生区王禅寺六七八—四
電話（〇四四）九五四—四九五七番

船越祥郎
東京都昭島市郷地町五四九—一四
電話（〇四二五）四四—五九九七

都営八王子霊園・東京霊園正門前
青葉山真照寺住職 堀井隆川
〒193 東京都八王子市元八王子町三—二三九七
電話（〇四二六）六三—八四〇三

エクステリア専門商社
株式会社 大洋
代表取締役社長 松下文雄
本社 〒351 埼玉県朝霞市膝折三—七—五
電話（〇四八四）六六—一五五一（代）

動力炉・核燃料開発事業団
広報室長 水船隆昌
〒107 東京都港区赤坂一丁目九番十三号（三会堂ビル）
電話五八六—三三一一（大代表）

株式会社興水タイヤ商会
取締役経理部長　三宅良夫
〒210 川崎市川崎区元木一ノ一ノ一
TEL ○四四―二三三―六三二一（代）

東京トヨペット株式会社
企画室
課長　宮野近
東京都豊島区東池袋三ノ三ノ五
〒171 電話(03)九八七―一四二一

曹禅寺住職
村上大憲
東京都大田区池上七丁目二二番十号
電話 ○三―七五一―○六七八番

ブライダルファッション
（株）シャルム商会
常務取締役
東京店店長　村上昇
東京店 〒164 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話（○三）三七四―○二一五（代）
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話（○七五）二二二―○二一五（代）

株式会社 スズヤ洋装店
株式会社 イイダスズヤ
取締役社長　村上豊
電話○三（七三三）四○四八・（七五一）四七九八

エイ・エム・ティ株式会社
取締役社長　百木雅崇
東京都港区浜松町二ノ三ノ二三
フクダビル
電話（四三一）三五五一番

大七（だいなな）証券株式会社
投資顧問部
安田　功
〒103 東京都中央区銀座三丁目一〇番九号
電話 東京（五四五）九一一一（代）

伊藤忠エレクトロニクス株式会社
営業第七部長
山内隆行
東京都渋谷区渋谷二丁目一五番一号
〒150 東邦生命ビル7階
電話（〇三）四八六―五八五〇

技術士（電気部門）
部長
山本権一
近畿電気工事株式会社営業本部技術部（横浜駐在）
〒240 横浜市保土ヶ谷区和田二丁目一番二号
電話 〇四五（三三三）一二二一

紳士服地・毛皮・仕立て…等のご相談は
鷹岡株式会社東京支店
営業第二部
課長
村田年彌
〒103 東京都千代田区神田須田町一丁目三番地
電話東京 03（255）六六一一（代表）―九番

社団法人日本プラント・技術部
プロジェクトマネジャー
技術士（電気部門）
若森敏郎
〒100 東京都千代田区有楽町一丁目八番一号
日比谷パークビルヂング（三階）
電話 東京（213）八五五一番（代表）

渡邊隆男

下北沢商店街振興組合

副理事　旭　弘

子供服　ア　ヤ　東京都世田谷区北沢二―二四―九
電話（四六七）七四二八

ニューメディアハウス　AYA・SUN　電話（四六〇）七七四七

安達健一郎

〒188　保谷市中町三―三―一三
電話　〇四二四（二二）三四四六

船舶事業部

参与部長　有田興司

東京支店　東京都港区浜松町一丁目二七番一七号（三和ビル）
〒105　TEL（〇三）四三四―七八二一（代）

株式会社ネオス　本社
〒650　神戸市中央区加納町六丁目二番一号
TEL（〇七八）三三一―九三八一（代）

損害保険のコンサルタント
日本損害保険協会　特販（一般）資格　第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田光雄

自宅　四街道市旭ケ丘三―九―二
〒284　電話〇四三四（三二）二三一三

日本リーファー株式会社

常務取締役　池上亘泰

〒230　横浜市鶴見区弁天町三番地
電話　横浜〇四五（五〇四）〇八一一（代）

NHK家庭部・医療番組班
チーフ・ディレクター

大野善三

〒150　東京都渋谷区神南二―二―一
（〇三）四六五―一一一内線三二九七
自宅〒228　神奈川県相模原市相模台七―二五―八
（〇四二七）四六―八七九〇

佐々木盛雄

自民党
〒100 東京都千代田区永田町一―十一
電話五八一―六二一一（内）二六五
事務所
〒160 東京都新宿区新宿五―十七―六
電話（〇三）二〇九―三一七六～七番
自宅
〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八
電話（〇三）九五一―二八五八番

川鉄商事株式会社
プロジェクト開発室主査
副部長 杉浦一

〒105 東京都港区浜松町二―四―一
世界貿易センタービル二七階
電話（〇三）四三五―四〇三九
FAX（〇三）四三五―三三四四

丹波総合開発促進協議会長
阪神丹波行政連合協議会長
柏原町長 谷口務（つとむ）

兵庫県氷上郡柏原町柏原一番地
電話（〇七九三七）二―〇五四四番

旭タンカー株式会社
営業二部
次長 田原敏男

〒100 東京都千代田区内幸町一丁目二番二号
（大阪ビル二号館）
電話（〇三）五〇八―一一八一番
テレックス 二二二―五六七七番

兵庫県東京事務所
所長 板野英彦

〒102 東京都千代田区平河町二丁目六―三
都道府県会館内
電話（〇三）二五一―四二六六

自衛隊中央病院
高等看護学院長
理学診療科部長
前田和秀

病院 東京都世田谷区池尻町一ノ二ノ二四
〒154 電話（〇三）四一一―〇一五一

美味無比 木の実酒

栗の三年酒

（くり　さん　ねん　しゅ）

◆丹波焼壺詰（1、500000ml）
◆徳用びん詰（3500000ml）

この木の実酒「小鼓くりの三年酒」は、純粋の丹波産栗の実、梅の実など山野の木の実を原料として秘醸したもので、常用すれば胃腸を整え健康と美容と活力を増進します。
ストレートでお飲みいただきますと、さわやかな梅の香りがひろがり、あと口にはコクのある栗の味が残ります。

お正月のお屠蘇には、縁起のよい「小鼓栗の三年酒」をお用い下さいキット好評です。

小鼓の西山酒造場

氷上郡市島町中竹田
電話（〇七九五八）⑥〇三三一代

編集後記

▼有田先生の急逝という予期せぬ事態を迎えて、発行段取りも終盤を迎えていた「山ざる」を追悼号に切り替えることにしたため、発行が遅れてしまった。深くお詫びします。また、追悼文を急いで書くなどということは故人に対して礼を失すること甚だしいものがあることも十分承知致しておりますが、これも止むを得ないところとご了承を願っておきます。

今回は、テーマを決めて然るべき人に原稿をお願いしたところ、予定どおりとはいえないまでもかなりの成果を挙げたと思います。然るべき人とは、編集部で一方的に選んだ人のことであり、当然、然るべき部の人が今回漏れた向きも多々あると存じますが、今後ともこの方式で然るべき輪を広げてゆきたいと存じますのであしからず。

▼「ふるさと」といえば、だれもが犀生の詩の最初の一行だけを引用されます。共通のふるさとについて、会員それぞれの「ふるさと」とはなんぞや、を考えてみたいものです。

わたしのふるさとは、単調にありといいたい。動かない、変らない自然とそのアクセントとしての方言にある、と考えています。

こういうことをいうと、こうざいなことぬかすな、といわれそうです。

▼「おとっちゃんが今日うちに〈風呂ある〉いうてこい」いうたったさかい、ゆいに行ったおりに、きょう、うらの草ぶくで、おっきょいハメとったったゆうとったったさかいに、うちにも見せとくれえな、ゆうたら、おっさんが、おまえもばっさいやな、ハメはかむさかいこわいで、ゆうたったさかい、泣きべすよりましやろ、ゆうて、見いに行ったら、ちいこいながちょろいハメがあおのけになったけど、ひいさんみとったら、ちいといごいたわ。……丹波へ帰ってこういう会話がしたい、のです。（源）

▼次号に原稿をお寄せ下さい。〆切りは来春一月ですが、それまではいつでも受けつけます。左記郷友会宛にお送りおきください。

▼広告は本誌の貴重な資金源です。ぜひ多数ご出稿ください。一ページ二万円。半ページ一万円。名刺広告四千円です。左記へお申し込みください。（編集部）

山ざる　第17号

昭和六十一年五月三十一日発行

編集委員

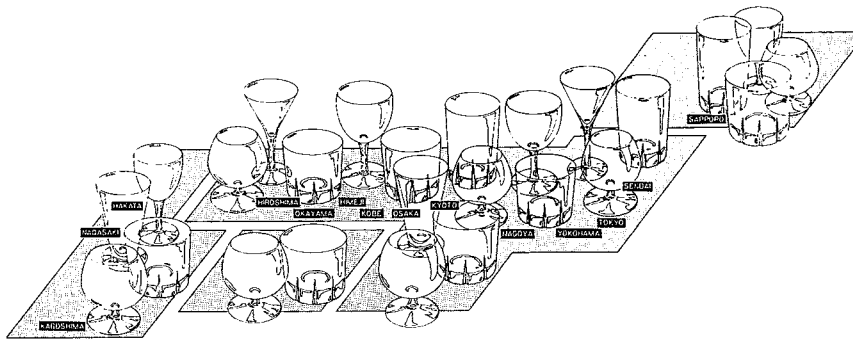
足立源治　足立正　小田富士夫
足立和巳　大野善三　小杉仙生
坂上勝朗　田中篤郎　常岡幹彦
鶴田ゆき子　宮野近　渡辺隆男

発行者＝関東氷上郷友会々長　伴仲信次
〒102　東京都千代田区飯田橋二丁目九番
春日建設株式会社内・☎〇三(二六四)四〇一一番
振替・東京一-二三三二〇番・製作＝㈱二玄社

こころざしはパーフェクション

大和実業は常に新しいシステム&サービスで店舗展開をめざします。

エスカイヤクラブを頂点に、札幌から鹿児島まで
全国主要都市をネットする大和実業グループ。
たえず移り変わるニーズに、一歩先じたシステム&サービスで、
常にパーフェクトな店舗展開をめざします。



- エスカイヤクラブ
- ザ・ロイヤル
- 櫓(やぐら)茶屋
- グランドパブ
- ギャルズ
- クラブVO
- VOキューティ
- VOローズルーム
- セブンティクラブ
- ザ・トップクラブ
- ザ・トップクラブ ミュージックサルーン
- 舞妓
- やぐら亭
- スイートクラブ
- ザ・セラーズ
- ラジオシティ
- ザ・ワインバー
- ジェファーソンクラブ
- BAC
- プカプカ
- カフェバー5/6
- やぐら寿司
- 曙
- YAKINIKU HOUSE 298

取締役社長　岡田 一男（春日町三井庄出）

大和実業グループ　大和実業株式会社

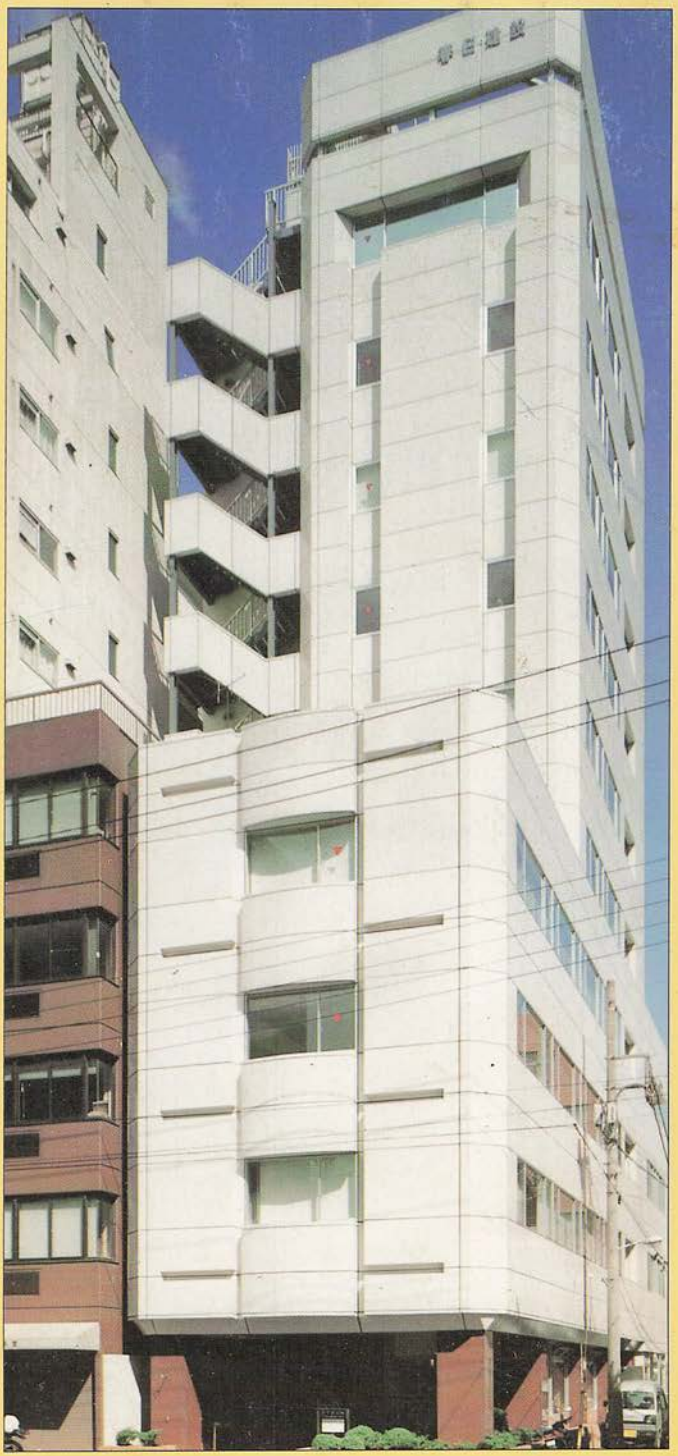
本社/〒530 大阪市北区芝田2丁目1番18号 西阪急ビル10階　☎06(372)8571(代)

春日建設株式会社

綜合建設業——建設大臣許可第233号

取締役会長 伴仲信次　取締役社長 伴仲信義

東京都千代田区飯田橋二丁目九番・電話03(264)-4011番(代表)



昭和六十年・新社屋ビル竣工